

'90・天山山脈トムール峰 登山隊報告書

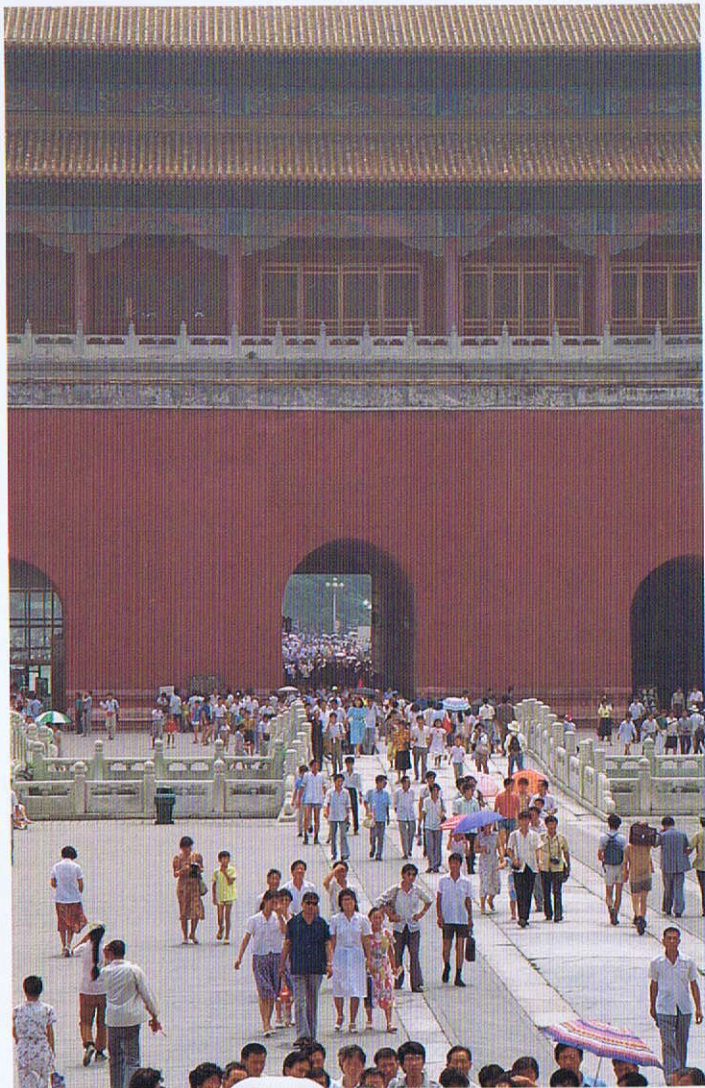
横浜市立大学天山踏査の会

'90・天山山脈トムール峰 登山隊報告書



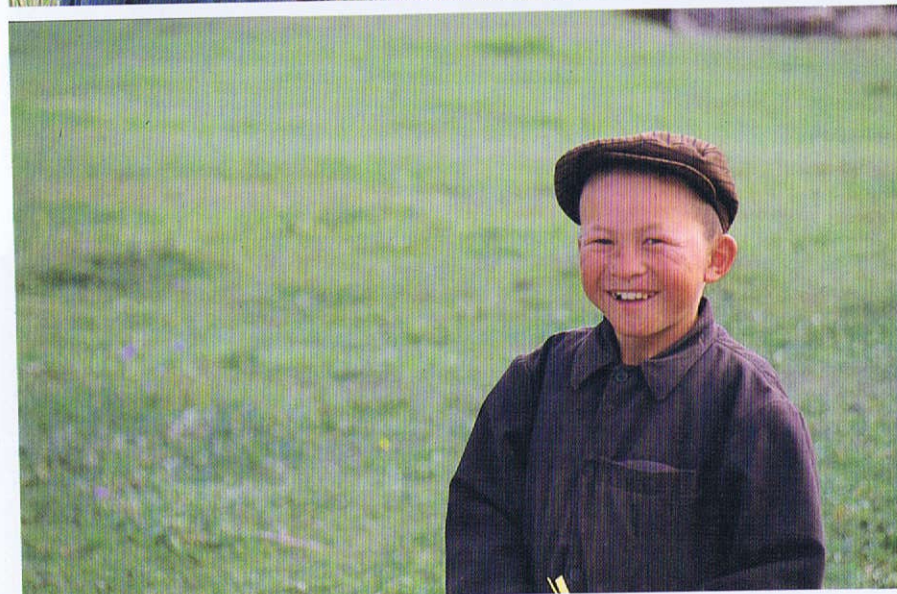
横浜市立大学天山踏査の会

天・09
山 登



北京 故宮博物館

アクスへの独行軍の途中立ち寄った青空
定食屋のオヤジさん。料理の腕前もなかなかのもの。7月16日

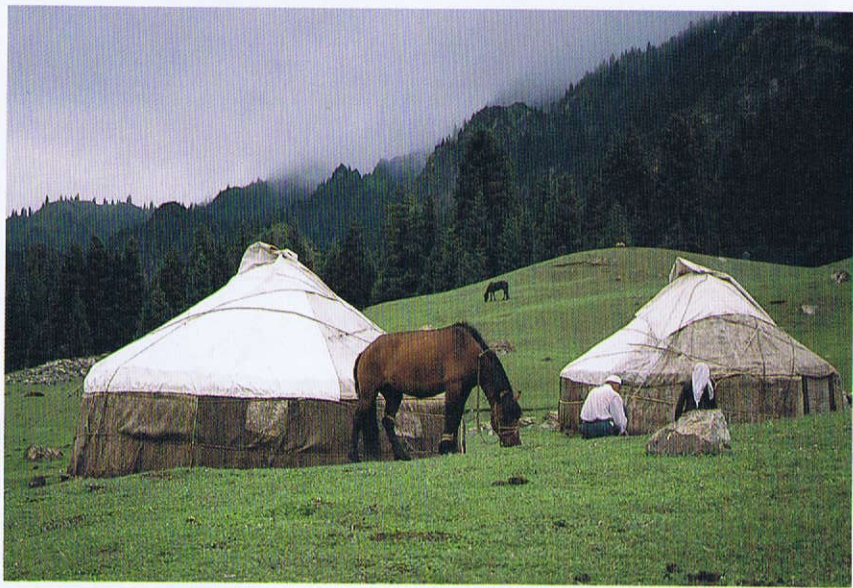


2,100m地点で放牧するウイグル族の家族
達。少年がウイグル語で話しかけてくる。満
面の笑顔である。彼に日本語で言葉返す。
7月19日





BCに到着。私達もヘトヘトなら馬もヘトヘトである。荷を背負ったまま一面のお花畑の中に座り込む。7月21日



ウルムチから日帰りて天池観光。遊牧民のバオが草原に映える。7月23日

C3方面への偵察を行う西堀隊長。5,500m付近。8月2日



旧C1よりBC方面を望む。この後、テント周辺に多数のクレバスを発見し、約200mC1を後退させた。7月27日





BCよりトムール峰を望む。黒々とむき出しになっている岩壁を、田部井隊にならって軍艦岩と呼ぶ事にした。

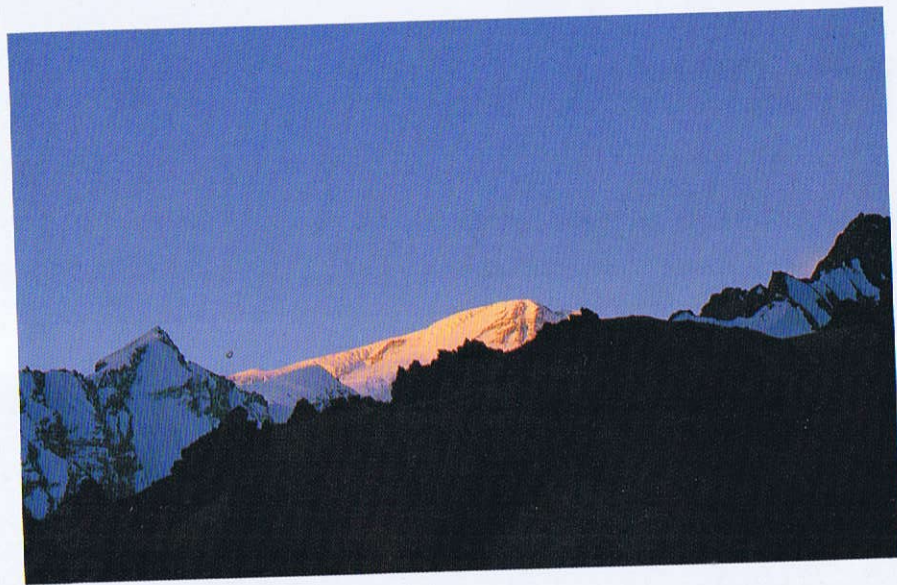
BCのアンテナポールに掲げられた、上から筑波大学の浅野先生より贈られた日の丸、大学旗、横浜市旗、中国国旗。



旧C1とC2、C3方面。この頃は特に好天が続いていた。7月24日



C1へ向かって雪原を登山中の西堀、宮崎、井上、吉田、田村、吉見の6名。吉田、吉見が背負うアルミのハシゴが時折キラキラと光って見えた。7月31日



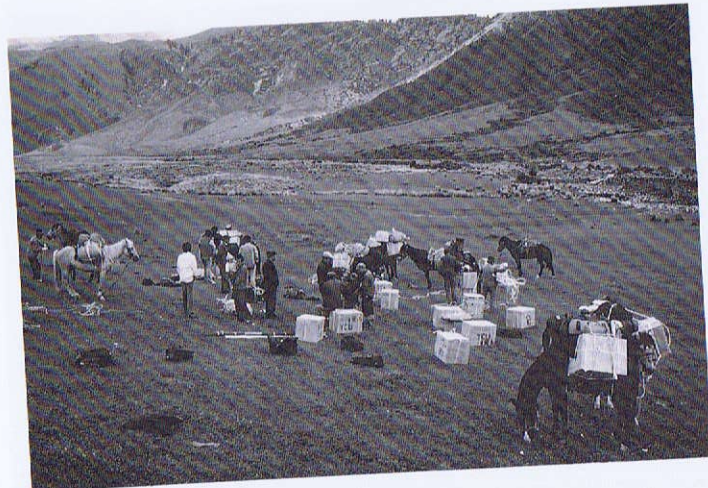
BCよ
なつて
艦岩



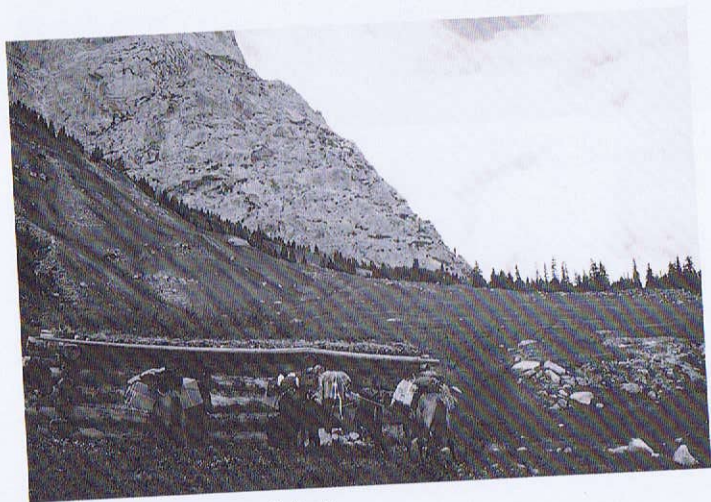
温宿を抜けタカラクを目指す。中国製ジープ「北京」が奮闘したが時折このようにヘソを曲げた。7月18日



2,100m直下の草原での放牧。雨の中を少年が1人やってきて私達を珍しそうに眺めていた。7月18日



2,100m地点での荷積み作業。のどかな大草原の上で、作業もどかに進んで行く。7月19日



先発隊キャラバン1泊目の2,400m地点。左右は荒削りの岩峰群がそびえ立つ。周囲は針葉樹が目立って多い。7月20日



2,400m地点を通過する後発隊。このまま2,600m地点まで進んでキャラバン第1日を終了。7月27日

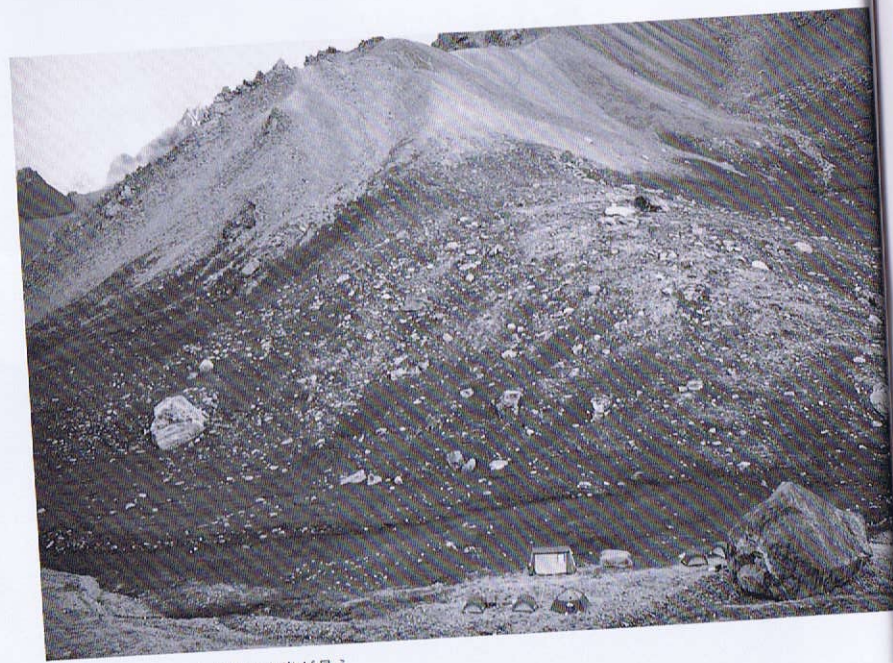
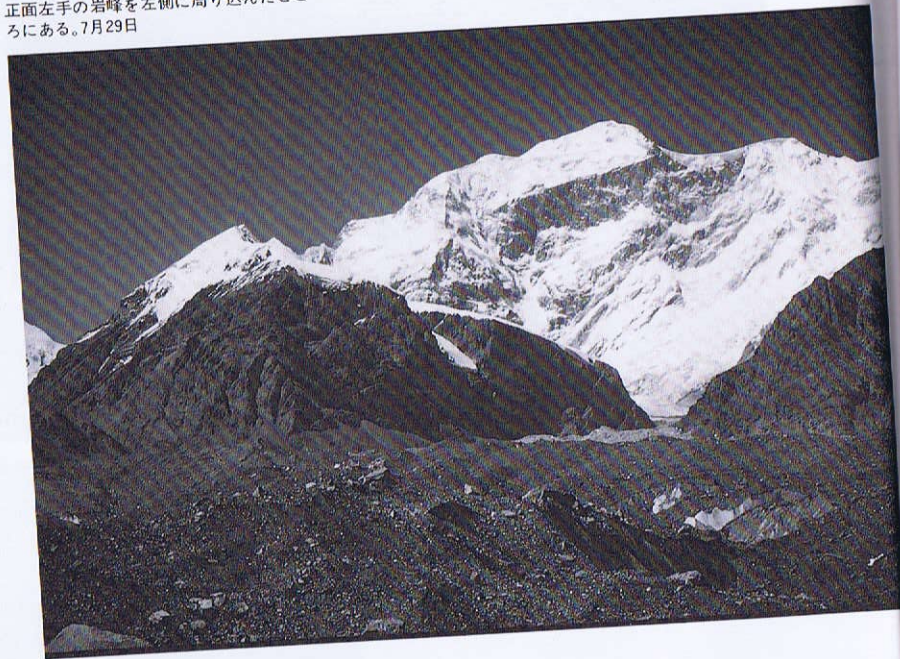


3,100mのキャンプサイト。白砂と草原のコントラストが見事である。楽しいハイキング気分
のキャラバンはここで終了。7月19日

翌日はうって変わって辛いモレーン地帯の踏破が待っていた。人も馬も疲労困憊である。無気的な風景が更に私達を打ちのめす。7月20日



モレーン地帯からトムール峰を望む。BCは正面左手の岩峰を左側に周り込んだところにある。7月29日



BCの設営を完了。シンボルの大岩が見える。お花畑の中を小川が流れる。モレーンと比べるとまさに別天地である。7月21日

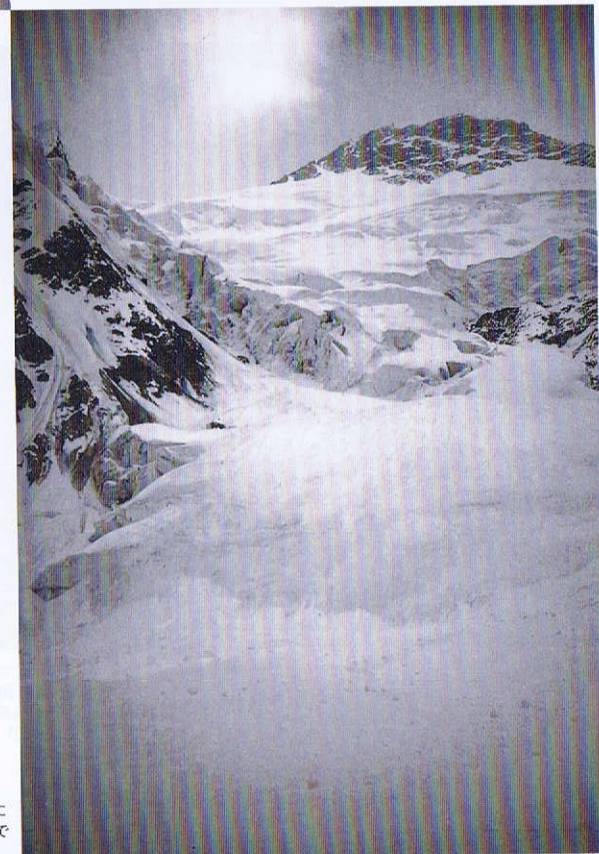
4,300m地点のデボ地。一端ここに仮CIを設営し、西堀、田村はここに残って翌日CI建設を目指した。7月23日



デボ地(4,300m)への荷上げを終えアイスフォール帯直下を下山する吉田、吉見、伊東。皆真っ黒に日焼けして歯ばかりが白い。7月30日



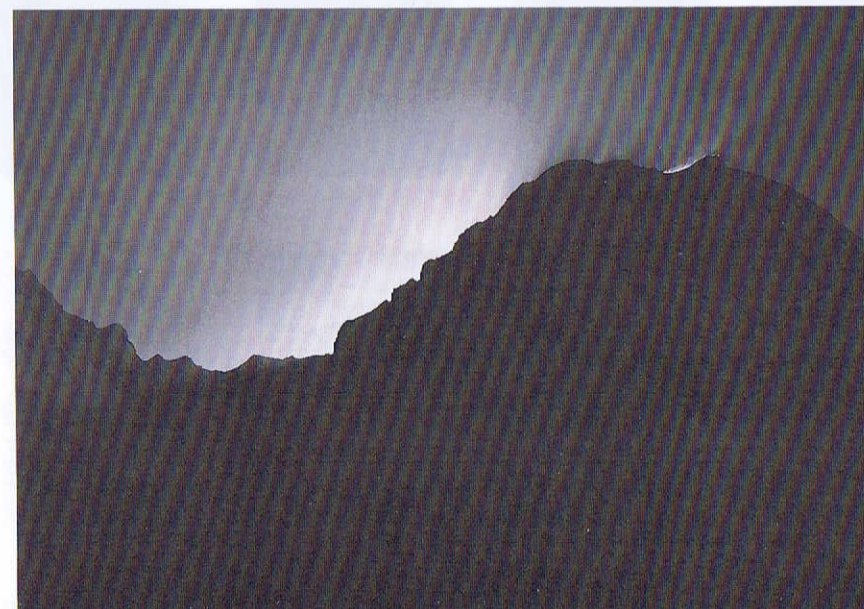
C2上部の雪壁よりC2を望む。田部井隊のC2は私達のC2よりも標高にして70m、20分程登った所にあった。8月2日



C2付近よりC3方面を望む。緩斜面と垂直に近い雪壁が連続して続くルンゼ状の氷河である。8月2日



BC南側に出た満月。8月4日



C1西側の急峻な稜線に日が沈む。8月2日

隊員、中国側スタッフ紹介



隊長 西堀 秀二



登攀リーダー 井上 誠



伊東 昌彦



吉田 宣明



永易 量行



田村 康一



吉見 敦司



片岡 実



高松 康夫



河合 武臣



宮崎 捷二



医師 堀井 昌子



事務局長 森下 市朗



連絡官 高 城



通訳 王 磊



通訳 アリキン・ユーション



コック 劉 新徳



馬頭 アサニ



トウディ



イメール



サウト



ケンジ

巻頭言

横浜市立大学天山踏査の会 会長 小林 義雄

30年来の夢を胸に、1990年7月、天山山脈のトムール峰に、中国側からの外国隊としての初登頂と、天山山脈、シルクロード周辺における自然、人文学的な予備調査を目指して、「横浜市立大学天山トムール峰登山隊」を中国に送りました。

この遠征計画の母体である「横浜市立大学天山踏査の会」は、本大学の「探査会」「山岳部」「探検部」が中心となった、未知の地域の踏査と科学的研究、高所登山等を目的とした、教職員、卒業生、学生等の有志による任意の団体です。

天山山脈の計画は、1959年に、「探査会」により行われた「北海道、知床半島の学術調査」の次の大目標として計画されました。折から「日中国交回復の交渉」に訪中した国会議員の方々に、天山山脈の登山と学術調査の申請書を託しました。「シルクロードをジープで走破しながら、天山山脈の主峰の登頂と、砂漠、高原、山岳地帯の学術調査をする」という気の遠くなるような壮大なプランでした。中国、ソ連の両国も非常に好意的で、自動車会社からは四輪駆動車の提供、新聞社の後援の内諾も得ました。しかし、実施計画の提出を目前にして安保改定が行われたことによって、一転し何回もコンタクトを試みても、ノーコメントでした。以来、中国政府、中国登山協会、中国科学院等に、登山と調査の申請をして参りました。

1989年になって「トムール峰登山歓迎」の書簡を受取ることになり、30年来の夢が現実のものとなりました。関係者一同大喜びのうちに、多くのOBや同好の志のご協力を頂きながら、推進母体となる「横浜市立大学天山踏査の会」の組織化、資料の収集、登攀計画、予備調査計画、派遣隊員の決定、登攀技術訓練、資金計画等々の諸準備を進めて参りました。

「天山に於ける登山活動は、好天に恵まれて、BC、C1、C2、C3と順調に歩を進めている。」との中間報告を受け、登頂成功の報せを心待ちにしていた私たちは、「3名が行方不明、遭難」の悲報に接したのです。わが耳を疑い、ただ茫然とするばかりでありました。

トムール峰の登攀は、いかにして雪崩を避けるかが最大の難問でありました。様々の検討と細心の注意をはらっての山行をすすめてきましたが、氷河の崩壊による遭難が起きてしまいました。今でも、信じがたい気持ちであり、まことに痛恨の極みであります。

3名の隊員は、共に登山の技術のみに秀れているばかりではなく、バイタリティーと、人柄の良さで、信望厚く、多くの人達から敬愛される好青年でした。

この度の遭難事故を含め、天山トムール峰登山隊の報告書を作成致しました。

ご支援、ご協力頂きました皆様に、ご一読いただき、忌憚のないご意見、ご批判を賜り今後の活動の指針とさせていただきたく存じます。

山を愛する方々には、「他山の石」としてご活用いただければ、望外の幸せです。

トムール峰を目指し、その頂を越えて、さらに、さらに、高い所へ登っていった、西堀秀二君、井上誠君、伊東昌彦君、君達の御霊の安らかならんことを祈念し、いつの日か、君達の意志を継いで、若人達が、トムール峰の頂きを極める日がくることを願っております。

1990年10月31日

目次

巻頭言	横浜市立大学天山踏査の会会長 小林 義雄	1	
隊員名簿		4	
行動日程表		6	
I 計画準備	高松康夫		
1. トムール峰との出会い		7	
2. 計画と組織づくり		7	
●天山とトムール峰	8		
3. 準備作業		8	
II 行動の記録			
1. 出発からBC建設まで	永易量行・吉田宣明	11	
(1) 先発隊 11	(2) 後発隊 14		
2. 登攀活動	永易量行・吉田宣明	17	
(1) C1建設まで	17	(4) C3建設まで	23
(2) C2に向けて	19	(5) 最高到達地点に達する	25
(3) C2を建設する	21	(6) 事故前の行動	26
3. 事故発生と捜索活動	永易量行・吉田宣明	28	
(1) C3交信不能となる	28	(3) BC撤収	33
(2) 捜索活動の状況	29		
4. トレッキング隊行動記録	宮崎捷二・河合武臣	34	
5. 救援隊活動報告	森下 市朗	37	
6. 中国側の救援協力活動	永易 量行	45	
7. 国内留守本部の対応	山森 希典	47	
(1) 第一報を受ける	47	(3) 帰国と終収期	49
(2) 救援と情報混乱期	47		
8. 行動表		51	
(1) パーティの行動表	51	(2) 各隊員の行動表	54
9. 帰国後の経過	高松 康夫	60	
III 担当報告			
1. 装 備	62	4. 輸 送	74
2. 食 糧	67	5. 国内でのトレーニング	76
3. 医 療	72	6. 渉 外	77
IV 会計報告			
1. 本隊会計	78	2. 救援会計	79
●協力者名簿	80	●トムールに逝った3隊員の略歴	82
		●編集後記	83

隊員名簿

1. 氏名 担当	2. 住所 TEL	3. 職業 (学部) TEL	4. 所 属
1. 大野迪朗 (総隊長・国内総括) 国内残留			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 同 上			同 上
4. 山岳部OB (1953年度卒)			
1. 山田 勇 (副隊長・国内総括) 国内残留			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 高松臨海倉庫(株)			[REDACTED]
4. 山岳部OB (1959年度卒)			
1. 磯村康博 (事務局経理・通信) 国内残留			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 横浜市水道局水質試験所			[REDACTED]
4. 探査会 (1967年度卒)			

登山隊

1. 西堀秀二 (登山隊長・輸送)			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 空港施設(株)			[REDACTED]
4. 山岳部 (1973年度卒) JCC			
1. 井上 誠 (登攀L・食糧)			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. キャノン玉川事業所			[REDACTED]
4. 山岳部OB (1984年度卒)			
1. 吉田宣明 (装備・医療)			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. JMS 東部販売(株)			[REDACTED]
4. 山岳部OB (1986年度卒)			
1. 永易量行 (装備・記録)			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 無職 (1989年度卒)			
4. 山岳部OB			
1. 田村康一 (渉外・会計)			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 無職 (1989年度卒)			
4. 探検部OB			
1. 伊東昌彦 (食糧・医療)			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 文理学部2年			
4. 探検部 山岳部			

1. 吉見敦司 (医療・装備)			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 文理学部2年			
4. 山岳部 探検部			
1. 片岡 実			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 茨城県立結城第二高等学校			[REDACTED]
4. 山岳部OB (1958年度卒)			
1. 高松康夫 (事務局総務・渉外・輸送)			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 横浜市立大学商学部大学院図書室			[REDACTED]
4. 探査会 探検部OB (1966年度卒)			

BCおよびトレッキング隊

1. 松田 孝 (総隊長代理) 国内残留			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. ソーダニッカ株式会社			[REDACTED]
4. 山岳部OB (1954年度卒)			
1. 森下市朗 (事務局長)			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. (株)武蔵屋			[REDACTED]
4. 探査会 山岳部OB (1962年度卒)			
1. 山森希典 (事務局財務顧問)			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 山森税務会計事務所			[REDACTED]
4. 探査会 新聞部OB (1955年度卒)			
1. 堀井昌子 (医師)			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 神奈川県立がんセンター			[REDACTED]
4. 医学部山岳部OB (1964年度卒) 日本山岳会 横浜山岳会			
1. 河合武臣 (トレッキング隊長)			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 成美学園小学校			[REDACTED]
4. 探査会 (1964年度卒)			
1. 宮崎捷二			
2. [REDACTED]			[REDACTED]
3. 群馬県立伊勢崎東高等学校			[REDACTED]
4. 探査会 (1964年度卒)			

1990年7月1日当時

行動日程表

7月14日	登山隊	成田→北京	
15日		北京→ウルムチ	
16日		ウルムチ→コルラ (ジープ)	
17日		コルラ→アクス	
18日		アクス→2100m (ジープ)	
19日		2100m→2400m (キャラバン開始)	
20日		2400m→3100m	
21日		3100m→3900m (BC建設)	
22日		ルート偵察・荷上げ	
23日		アイスフォール帯のルート工作	
24日		C1設営(4550m)	
25日		ルート整備, C1への荷上げ	
26日		BCにて休養	
27日		C1を移動し, 新C1設営(4550m)	
28日		C2へのルート工作, C1への荷上げ	
29日		停滞	
30日		デポ地往復	
31日		C1への荷上げ	
8月1日		C2設営(4980m)	
2日		C3へのルート工作, 下部のルート整備	
3日		C2, デポ地への荷上げ	
4日		停滞, 休養	
5日		C3へのルート工作, C2への荷上げ	
6日		仮C3設営(5800m), C1への荷上げ	
7日		稜線到達(6450m), 仮C3をC3とする	
8日		C2への荷上げ	
9日		C3への荷上げ	
10日		C2への荷上げ	
11日		最低コル(6100m)へのルート工作	
12日		C3(西堀・井上・伊東)と交信途絶える	
13日	捜索隊	ブロック雪崩によるC3消失を確認	
14日			
15日		C3下部の再捜索	
16日		〃	
〃		すべての捜索活動を打ち切る	
17日			
18日			
19日		BC撤収→2400m	
20日		2400m→アクス, ホテルにて状況報告	
21日		追悼式	
22日	家族ら4名	アクス→2400m	
23日		2400m→3100m→アクス	
24日		アクス→ウルムチ	
26日		ウルムチ→北京(森下, 片岡は帰国)	
28日		北京→成田(全員帰国)	
	後発隊	成田→北京	
		北京→ウルムチ	
		天池観光	
		ウルムチ停滞	
		ウルムチ→アクス	
		アクス→2100m	
		2100m→2600m	
		2600m→3100m	
		3100m→BC	
	トレッキング隊・BC隊	下山開始	
		アクス着	
	トレッキング隊	アクス→カシュガル	
		カシュガル	
		〃	
		カシュガル→ウルムチ	
		ウルムチ→トルファン	
	永易	BC→2100m	
		2100m→アクス	
		ヘリコプターで現場を捜索	
	救援隊	成田→北京	
		北京→ウルムチ	
		ウルムチ→アクス	
		第2次救援隊アクス到着	

I 計画準備

高松康夫

1. トムール峰との出会い

1980年, 世界各国から願望されていた中国の高峰の一部が外国人に開放されて以来, 現在多くの高峰が開放されている。1982年「探査会」は20数年ぶりに中国当局に接触を再開し, 数年に渡っていくつかの遠征を企画した。しかし, 対象地域・山峰が未開放・未踏峰の高峰であったり, あるいは科学調査が受け入れられなかったり, 実現には至らなかった。

1985年, 天山山脈の主峰トムール峰(7435m)が開放された。この高峰は中国隊が1977年に登頂を果たして以来, 中国側からの外国隊としては未踏峰である。「日本女子登山隊」

(田部井淳子隊長)が1986年に初挑戦したが, 不成功に終わっている。]

私たちは1989年, 過去数年の経験を踏まえ, 山岳部OB有志と共に検討し, トムール峰を第一候補とし, 二, 三の候補を選定し申請した。幸い4月, 中国登山協会(以下CMA)より, トムール峰登山歓迎の仮許可を得ることができたのである。

私たちの先輩諸氏が1959年, 初めて天山山脈主峰遠征のアプローチを試みて以来, 30年ぶりに夢が実現した。先輩・後輩それぞれに思いを馳せ, 実行計画に着手することになった。

2. 計画と組織づくり

CMAよりトムール峰登山の仮許可を得てから, まず私たちが着手したのは組織づくりであった。

1989年5月, 関係者が集まり「天山実行委員会」を結成し, 組織の構成と参加メンバーについていろいろ意見を交わした。そして主催団体を「横浜市立大学天山踏査の会」とし, 構成団体は「横浜市立大学探査会」, 「同山岳

部」, 「同探査部」の三者とし, 派遣する隊を「横浜市立大学天山トムール峰登山隊」とした。また, 後援団体としては大学, 横浜市, 同窓会, その他等をお願いすることにした。

私たちは, 中国の未知の地域, 未踏の高峰や自然と民族・文化等に憧れを抱いて来た。単に登山だけでなく, 自然と人間との関係を求めて広く中国の未知の地で踏査活動を行な

天山とトムール峰 托木尔峰

天山山脈は、中国新疆ウイグル自治区東部のハミ北方から中央アジアのパミール高原の北まで、東西2500km、南北400kmの大山脈である。平均海拔4000mのこの山脈は、北に名馬を産してきた大草原を、南に死の砂漠タクラマカンを持ち、その中心部の中ソ国境付近には6000m以上の高峰が林立している。モンゴル語で「テングリ・オーラ（天なる山）」と呼ばれるにふさわしく、海拔3500m以上は雪と氷におおわれ、そこから流れ出る氷河は実に6900条に及ぶ。

私達の目指したトムール峰は、中ソ国境の北緯42'08"、東経80'10"に位置する標高7435mの天

山山脈最高峰であり、天山の氷河面積の30%にあたる氷河がここに集まっている。山名のトムールとはウイグル語で「鉄の山」という意である。

トムール峰の登山史をみると、この山の気象変化の激しさ、雪崩の多さ等、登頂の難しさを知ることができる。1937年、ハンテングリ（7010m）より高い山としてソビエト隊に発見されて以来、この山に挑んだ約300名の登山家のうち、60余名が二度と戻らぬ人となっている。トムール峰の初登頂は1956年、同峰北面のイノルチェック氷河からソ連隊が果たしており、ポベダ（勝利の峰）と名付けた。南面の中国側からは、初登頂から遅れること約20年の1977年、中国隊が登頂したのみであり、1986年の日本女子登山隊は3度の雪崩に遭い断念している。

私達は、この2隊の記録をもとに、盟主トムールに向かったのである。

いたいと願って来た。そこで派遣する隊の構成も「登山隊」と「トレッキング隊」とし、それぞれ隊員候補は広くOBや学生等大学関係者に呼びかけ希望者を募り、実行委員会に参加してもらうことにした。

実行委のメンバーは多岐にわたった。30年ぶりの夢を実現すべき50代から、現役学生の10代まで様々な年齢構成であるが、登山隊の

中心は20～40代の社会人である。問題は社会人にとって、海外登山経験者も含め、約40～50日という日程のハードルをいかにクリアするかであった。そこで登山隊については登山経験の内容と体力に応じて登攀隊と支援隊、BC本部に分け、日程も弾力的に対応することにした。その結果トレッキング隊も含めて20人近い隊員候補が実行委の中に集結した。

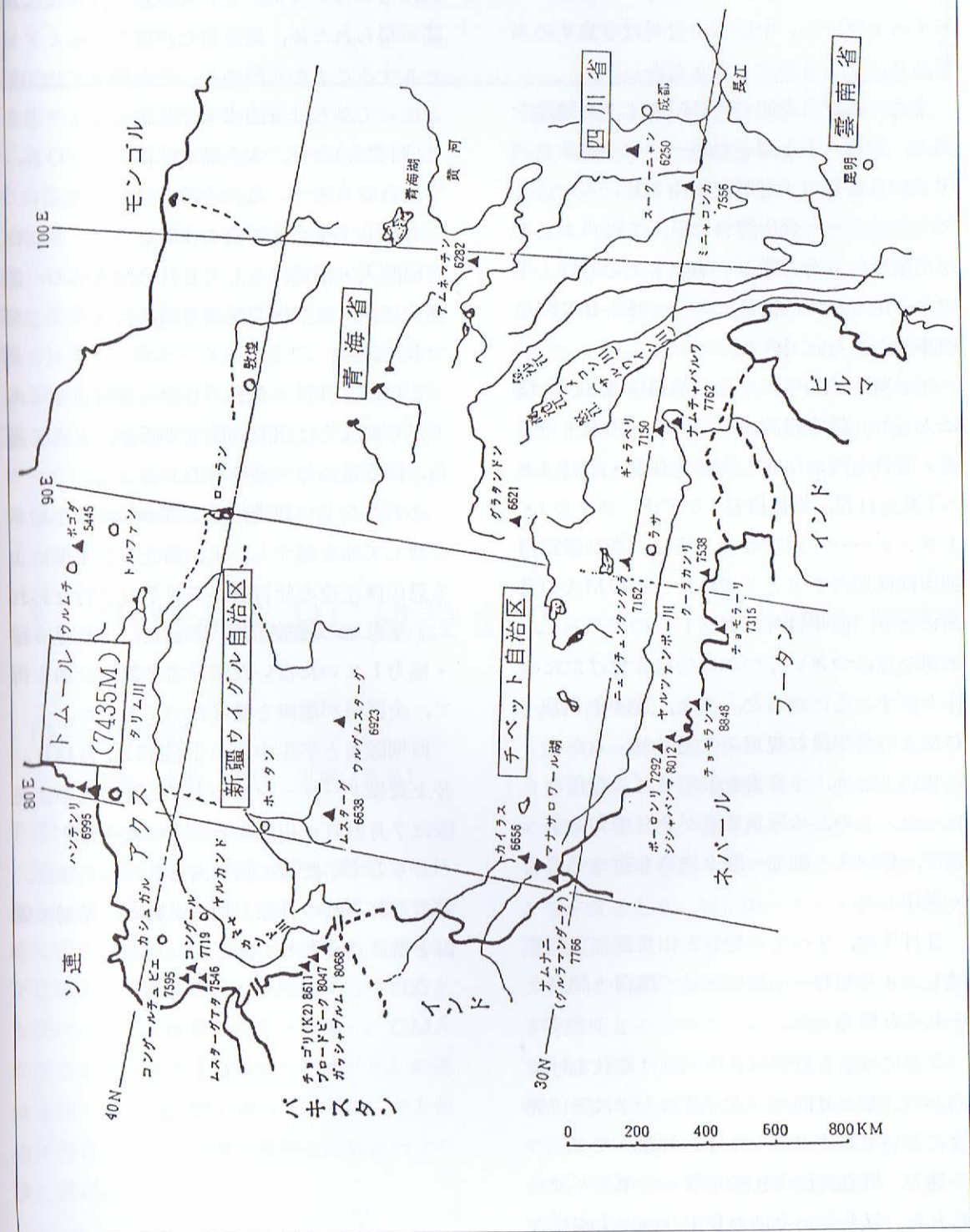
3. 準備作業

実行委員会は月2回のペースで開かれた。任務分担をし、トムール峰に関する資料の収集、登山隊・トレッキング隊の計画、趣意書・予算書の作成、資金計画、偵察隊の派遣等に精力的に取り組み始めた。

こうして準備作業は進められたが、当初予定していた8月の偵察隊の派遣は諸々の事情で中止となった。そこで登攀隊員による登攀委員会を設置し、登攀隊員のチームワーク、登攀技術訓練、体力強化、準備日程、資料に

〈図一〉

中国西部概念図



基づく登攀計画等に取り組むことにした。

登山資料は1986年の「日本女子登山隊」の報告書が唯一の具体的資料であり、大いに参考となった。また、田部井隊長から直接アドバイスも受けた。中国隊の資料は写真集のみであり、あまり参考とならなかった。

また、議定書調印の時CMAより直接話を聞き、資料入手を図ったが——その議定書調印も12月初旬の予定が翌年の3月にズレ込んでしまった——登山資料に限っては得ることが出来なかった。詳しい地図もその時は入手できなかったが、後日トムール峰とBC間の明細図が送られてきた。

年が明け1990年になると準備作業は佳境に入った。議定書調印のための計画書・予算書・隊員名簿の作成、装備・食糧・燃料（ガス）輸送日程、撮影機材（ビデオ、カメラ）・トランシーバー選定等々。実は、当初議定書調印は郵送のやりとりでOKとのCMAの意向により、前年11月に郵送したのであるが、不明な点につきいくつかの指摘を受けたため作り直すことになった。また、1990年3月、CMAの費用徴収規定が改定され、しかもドル払いとなり、予算書を改定せざるを得なくなった。このため隊員2名が3月中旬北京へ飛び、CMAと細部の取り決めを行ない署名・調印した。

3月下旬、すべての物資を山岳部部室に集結し、4月初旬～中旬にかけて隊荷と燃料をそれぞれ輸送した。

5月になると登攀隊員の訓練は総仕上げに向かい、2ヶ月間の予定で筑波大学浅野研究室において低圧訓練も行なわれた。

他方、資金計画は1989年秋から準備が進められた。私たちの今回の登山計画は大規模な

海外遠征としては初めてであり、すべてゼロからスタートした。個人負担を越える分については関係諸団体・個人の支援、協力を仰がねばならなかった。そこで後援団体の後援承諾が得られた後、趣意書を作成して広くアピールすることから始めた。年が明けて1990年となってからは計画書・予算書を添えて進交会(同窓会)会員、本会構成団体会員、OB、学内教職員等への援助依頼を行なった。

こうして資金・物資の援助を受け、必要物資の購入・輸送、そして6月CMAへの一部経費送金、航空機手配等を順次行なうことができた。

この間、隊員の異動、日程一部変更等もあり、CMAとは出発間際まで手紙、FAX通信、国際電話等で連絡を取り合った。

あわただしい準備作業も細かい事務手続きを残して峠を越すと、天山踏査の会主催による登山隊派遣の壮行会が7月7日に行なわれた。学長始め後援団体、教職員、OB等支援・協力していただいた関係者多数の参加を得て、全隊員が激励を受けたのであった。

西堀隊長と学生中心の先発隊は7月14日、井上登攀リーダーを始めとする社会人の後発隊は7月21日に出発することになった。

こうして年齢層に幅のある私たちの隊は、隊員それぞれの目標と期待を胸に、元気に成田を飛び立ったのである。

Ⅱ 行動の記録

まずはじめに、行動の記録を記すにあたっての「時間」と「標高」についての表記方式の前提を示しておきたい。

時間 アクスは日本との間に実質4時間程度の時差がある。しかし、中国全土が共通時間を採用しているのと、北京がサマータイム制で日本との時差がないことで、標記時間は日本時間と同じである。従って現地における日の出は午前8時半頃、日没は午後10時半頃である。記入してある時間から4時間を差し引くと、時間が感覚的に把握できると思う。

標高 私たちの採用した標高は、中国隊、田部井隊双方と大きな差を生じている。これは高度計の精度等に左右された結果と推測されるが、記述にあたっては私たちが高度計によって得られた標高値を採用することにした。従って本文記述にあるC1、C2、C3上のコルは、その場所が先の2隊とはほぼ同位置であるにもかかわらず、C1で250m、C2で350m、C3上のコルで約300m 私たちの高度計は低い値を示している。

1. 出発からBC建設まで——永易量行・吉田宣明

(1) 先発隊

(西堀、永易、田村、伊東、吉見)

7月14日(雨) 成田—北京

15:00—先発隊の5名は家族、後輩らの見送りを受け成田を発った。約4時間で北京空港に着く。通関出口では、中国登山協会(以下CMA)交流部通訳の李氏他2名の出迎えを受けた。北京は思ったよりも暑く、CMAが用意してくれた『冷房マイクロバス』の窓は全開であった。22:00—当夜の宿、東方飯店に到着。すぐに夕食と簡単な打ち合わせの後、就寝。

7月15日(曇) 北京—ウルムチ

12:00—東方飯店をチェックアウトし、そのまま故宮、天安門広場へ。半日の北京観光である。しかし、そのスケールの大きさにグッタリする者もあった。17:00—空港着。ここで夕食をとり、19:00—ウルムチへ向け出発した。

ウルムチには23:00頃着くが、なんと実質3時間ほどある時差を完全に無視しているので、23:00といっても、やっと暗くなった頃、という感じである。空港には通訳の王氏や新疆登山協会の4人が私達の到着を待っていた。ウルムチでの宿は華僑賓館。この街で2番目に豪華なホテルという話だ。



アクス賓館全景

この夜、夕食はホテルのレストランが終了していたため、CMAの人達が街頭のシシカバブーの屋台に連れていってくれた。打ち合わせを兼ねての会食。吉見、伊東の2人は店にいた地元大学生らと意気投合し、酒も振る舞われるなど、非常に楽しいものとなった。

7月16日(晴) ウルムチーコルラ

ここからアクスまでは車を使っての移動となる。私たちを乗せてくれるパジェロに続き、4月に船便で送った荷を乗せたトラックも昼頃ホテルに到着した。私たち5名と通訳の王氏、それにドライバーとでパジェロ1台であったので車内は非常に狭く、つらい2日間であった。行く手の右側は果てしなく続く天山山脈、左手もこれまた果てしのないタクラマカン砂漠が続く。皆最初は感動して写真など撮ったりしていたがすぐにダラリと脱力した。

19:45—この日の目的地コルラ巴郭@賓館に到着。陽はまだ高く、この小さな街を散策した。

7月17日(晴) コルラ—アクス

10:00—オアシスの街コルラを後にする。前日に引き続き、つらい1日が始まる。途中、砂漠に行く満員の長距離バスを何台か抜

いて行く。

18:00—アクス賓館到着。ここで以降お世話になるアクス登山協会主任の張氏と会う。挨拶の後、依頼してあった食糧の内訳を聞き、その他のものについては彼の同行のもとで購入することとなり、アクスの街へ買い出しに行く。

20:00—ホテル帰着。

7月18日(曇時々雨) アクス—2100m

銀行、郵便局へ行って用を済ませた後、14:45 2台のジープに分乗し、アクス賓館を出発。温宿からはステップの中を、山岳地帯に入ると悪路となり、雨も降り出した。途中何度かぬかるみで立往生しつつもタカラクを越え、19:30—2100m地点に到着。のどかなアルプスのような高原にドロドロの中国製ジープ2台、の如き図が大変妙である。

トラックの到着を待って(ほとんど奇蹟に思えた)、カートン整理にとりかかる。後発隊の荷は、タラン氷河の支流にあたる小川を渡ったところにある人家に預かってもらった。当初私達はここに宿泊させてもらえるとの話であったが、連絡の行き違いがあったらしく、結局草原にテントを設営することになった。

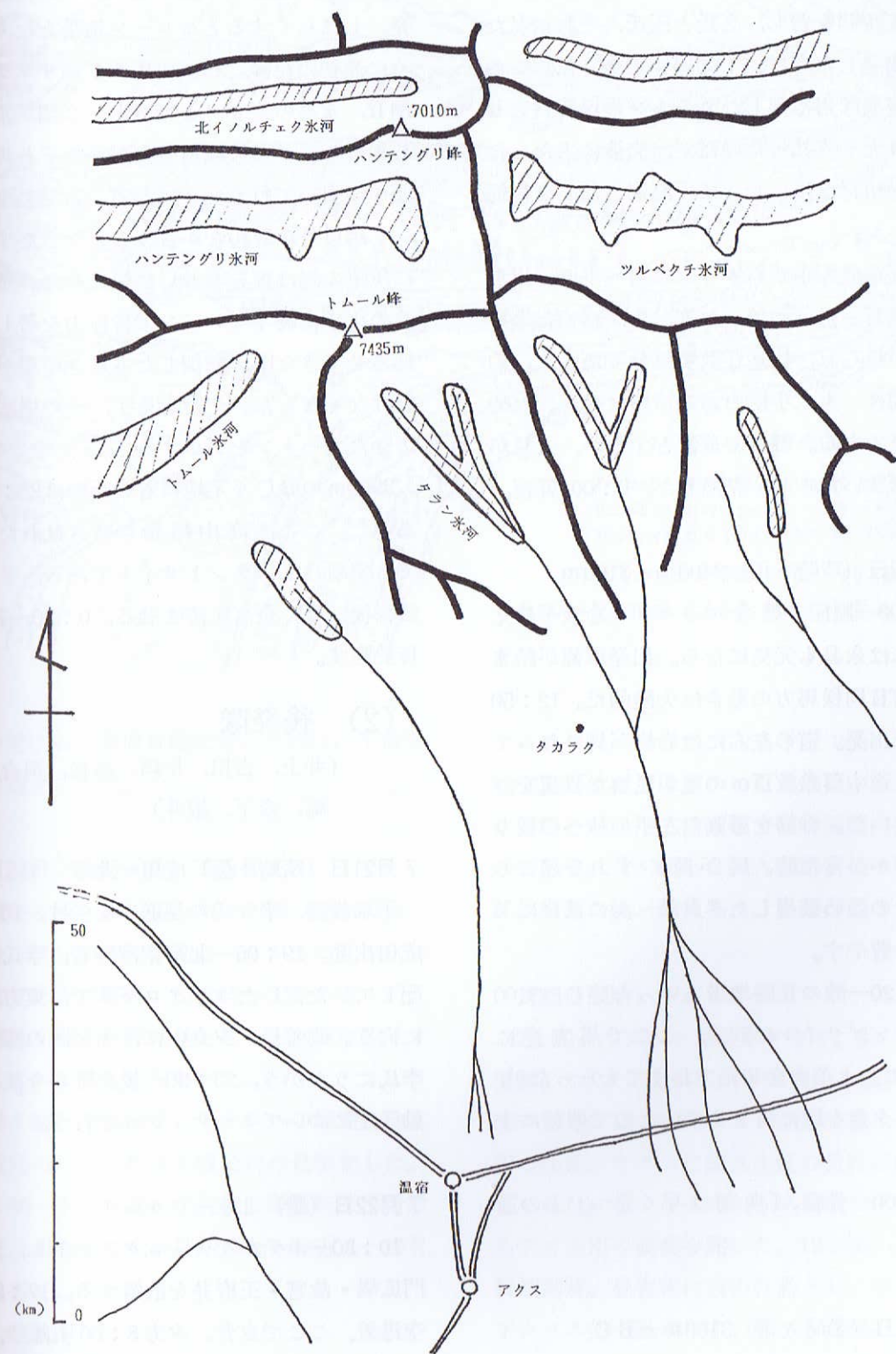
この日の夕食からキャラバン食であったが、アルファ米とレトルトは、私達をユウウツにさせるに十分な威力をもっていた。就寝。0:30。

7月19日(晴時々曇) 2100m—2400m

8:30—起床。朝食を済ませた後、先発隊用のカートンを馬に積むのだが、遅々としてはかどらず、朝から昼寝をする者少々。12:30—ようやく馬14頭と馬方達が出発する。当

〈圖一2〉

トムール峰概念図



初予定していた頭数では荷を積みきれないとのことで、1頭追加になったが、これにも又大幅に時間を費し、高氏と王氏、それに私たちが出発したのは14:00過ぎであった。このとき後発隊用に残したカートの保管料として200元を支払ったのだが、交渉にあたった西堀と田村は後になって「高過ぎた」と後悔していた。

道は草原の中からタラン氷河へ下り、川沿いを進む。道々に羊、ヤク、牛、らくだ等の放牧が見られ、快適な散歩気分であった。約5時間後、丸太小屋のある草原に到着。2400m地点である。ここで幕営とするが、永易が風邪をひいたらしく発熱した。0:00 就寝。

7月20日(晴時々雨) 2400m—3100m

9:00—起床。朝食のラーメンを食べ終えた頃には永易も元気になる。出発準備が始まるが前日同様馬方の動きは大陸的だ。12:50 やっと出発。道の左右には岩峰が切りたっており、途中落差数百mの滝が見事な景観をつくっていた。谷筋を離れた左手の峠への登りにさしかかった時、馬が荷くずれを起こした。このため破損したダンボールの補修に又時間を費やす。

17:20—峠の丘陵地帯といった感じの3100mキャンプサイトに到着。ここで馬方達に「夕食に」と羊肉を40元でわけてもらったが、私達は夕食を既に済ませていたので明朝にまわす。

23:00—就寝。「明朝は早く発つ」との通達。

7月21日(曇時々雨) 3100m—BC

6:30—起床。昨日の肉でスープを作って

食べる。食後大急ぎでテントを撤収するが、あいかわらず荷積み作業が遅い。10:35—出発。しばらくするとモレーン地帯となり、すぐに最初の徒渉。ここで馬が1頭ザブンと転倒し、永易のザックとカート2個が水びたしとなる。この後隊員各人がそれぞれ馬を1頭づつ引いて行くハメになる。吉見の引いていく馬以外はなかなか言うことをきかず、特に伊東の馬は彼をおおいに悩ませた。延々と波のように続くモレーンで皆体力を著しく消耗させてきた頃、転倒したさっきの馬が遂に動けなくなった。やむをえず、その場に積んできたカートをデポする。

3900mのBC予定地に着いたのは22:00であった。ここは高山植物の咲き乱れた草原で、素晴らしいテントサイトである。テント設営後、軽く食事を済ませる。0:30—就寝。皆熟睡す。

(2) 後発隊

(井上, 吉田, 片岡, 高松, 河合, 宮崎, 森下, 堀井)

7月21日(晴時々曇) 成田—北京

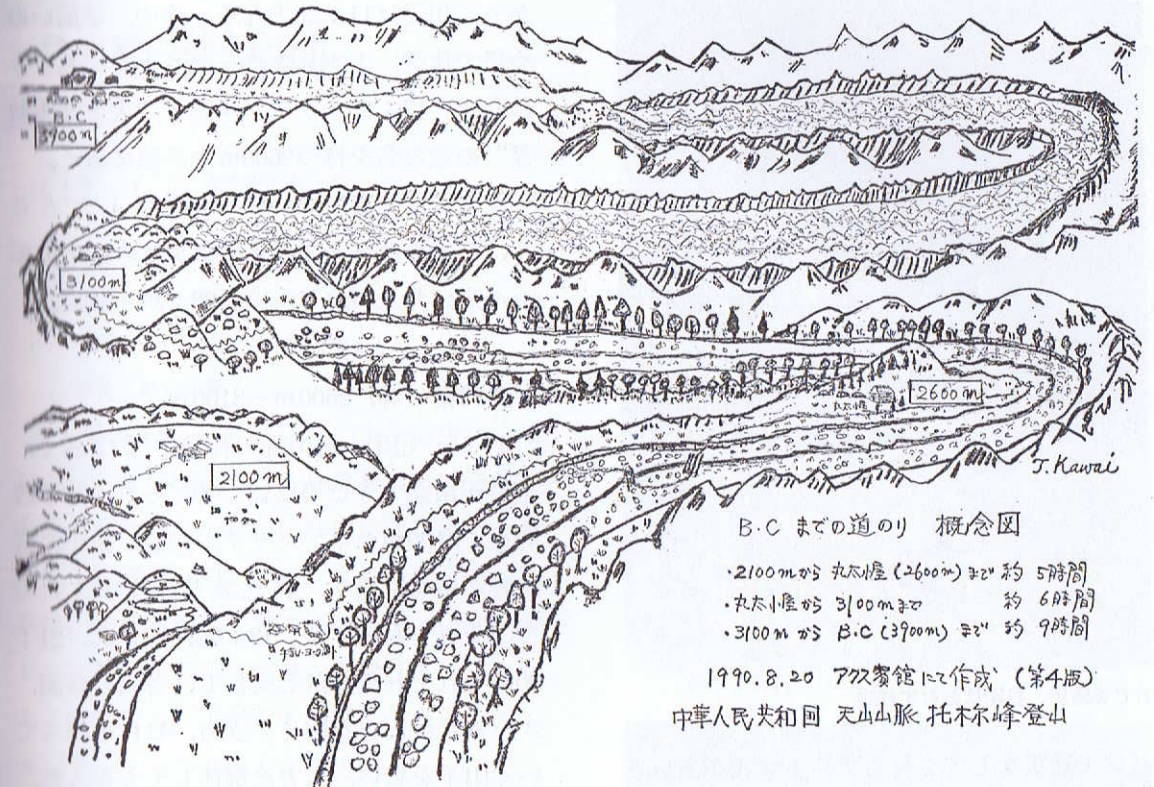
平塚教授, 平井氏の見送りを受け, 15:25 成田出発。19:05—北京空港到着。李氏に手配していただいたマイクロバスで, 東方飯店に向う。到着後, 夕食中に, 先発隊の様子を李氏にうかがう。23:30—後発隊の今後の行動予定についてミーティングを行う。

7月22日(曇) 北京—ウルムチ

10:30—ホテルをチェックアウトし, 天安門広場・故宮・王府井を散策する。17:30—空港着。ここで夕食。夕方8:00頃離陸。ウルムチに着いてCMA通訳—ヌル氏らの出迎

〈圖一3〉

BCまでの道のり概念図



B・C までの道のり 概念図

- ・2100mから丸太小屋(2600m)まで約 5時間
- ・丸太小屋から3100mまで 約 6時間
- ・3100mからBC(3900m)まで 約 9時間

1990.8.20 アズマ館にて作成(第4版)

中華人民共和國 天山山脈 托木尔峰登山

えを受ける。華僑賓館に着いたのは、午前零時を過ぎていた。

7月23日(雨時々曇) 天池観光

朝から雨。10:40—ボゴダ峰の麓, 天池へ向け, ワゴン車で出発。ウルムチ郊外の草原にはラクダの群れ。13:15—天池に着くが, 天気悪くボゴダ峰は見えないし, 湖は観光ずれして美しくなかった。

15:30—天池出発。ホテルへの帰途には, 遊牧民のパオや民族楽器公司の見学をした。19:40—ホテル着。夕食後, 隊員皆で手分けして, 出発までにお世話になった方々への礼状を書く。

7月24日(晴) ウルムチ停滞

この日は、アクスへ入る予定であったが、航空券が手配できなかったために、ウルムチに停滞となった。帰国までの中国国内航空券の手配を、ヌル氏とCMA副秘書長・張氏とに依頼した後、隊員各々、自由行動とする。

7月25日(晴) ウルムチ—アクス

7:50—ホテルチェックアウト。8:15—空港着。ここで北京へ向う山森氏と別れ, 9:50—出発。12:00にアクス空港に着くと, 通訳の任氏, アクスCMA主任の張氏が出迎えてくれた。ホテルへ向かう車の中で, 任氏からアクス市の概要を聞いた。12:05—アクス賓館到着。昼食後は自由行動とし, それぞれアクスの街を散策する。陽ざしは強いが湿気が無いため, さわやかである。夕方, キャラ



BCを遠望。目印はおむすび岩

パンで通訳をしてくれるアリキン氏があいさつに来た。明るい気さくな人である。入山前の最後の風呂に入り、就寝。

7月26日(晴後曇一時雨) アクスー2100m

ジープの到着を待って、11:00—ホテル出発。3台に分乗して行くが、砂漠を抜けた所で1台がオーバーヒート。さらに山岳地帯に入ると、エンジンのボルトが折れてしまい、ロープでエンジンを固定、約2時間作業に費やす。タカラクの入口に着き、自然保護官に各人のパスポートを提示。先発隊からの伝言のメモを高氏から受け取る。

2100m着18:05だった。後発隊用の荷の確認、馬の手配を張氏に依頼しテント設営・夕食準備。羊飼いの少年が水場を教えたので、礼にポラロイド写真を写してあげる。

7月27日(晴) 2100m—2600m

8:00—起床。朝食後、直ちに出发準備に

取りかかる。ハシゴ・羊の荷積み等に時間かかり、出発は11:35となる。途中、羊飼いの小屋で休憩、ミルクとヨーグルトをごちそうになる。17:25—ウイグル語で“大きな玉ねぎ”の意の名を持つ2600mの草原に着く。

夕食後、トランシーバーを開局したところ、C1の西堀・永易と交信ができ、久しぶりの声に井上がはしゃぐ。23:15—就寝。

7月28日(晴) 2600m—3100m

9:15—起床。馬方達の荷積作業は遅く、全員が出发できたのは13:40だった。約3時間後、3100mキャンプサイト到着。途中、宮崎達が道を間違え、偶然水場を発見したので、それを利用する。18:00、20:00、21:00にそれぞれ先発隊と交信し、各人の体調、ルート状況などを聞く。夕方、BCへ持っていく山羊を買い、馬方に解体してもらった。23:15—就寝。

7月29日(晴れ) 3100m—3900m (BC)

6:10—起床。朝食後、撤収作業を急ぐ。10:05—井上・吉田・高氏及び馬数頭以外の者が出発。この後、残った馬が荷を積んだまま逃げ出し、皆で手分けして追う。11:30—ようやく全員出発。長いだらだらとしたモレーン地帯が続く。途中、隊員3名の調子があまり良くないため、井上・吉田相談のうえ、BCに到着した馬を降ろすことを要請。

この頃、C1との交信で、田村が隊からはずされたこと、翌日西堀が1人で下山してくることを聞き驚く。20:00頃、3名馬に乗せ、井上・吉田・高氏が先導する形で歩く。

20:30—BCに到着。伊東・田村・吉見の出迎えがたまらなくうれしかった。

2. 登攀活動

永易量行・吉田宣明

(1) C1 建設まで

7月22日(晴)

西堀・田村・伊東・吉見 (BC) 15:10/18:30
(4250m) 18:50/20:30 (BC)

永易 BC停滞

9:50—起床。朝食のあとは午前中いっぱいカートン整理を行う。昼食後、再び発熱した永易を除いた全員で偵察に出发。氷河上のルートは選択が難しく、2パーティーに別れた。結局向かって左寄りのルートに決定し、4250m地点まで到達。登攀具とポールをそこにデポし、下山する。BCの永易とのトランシーバーの交信も好調であった。

20:30—BC着。西堀、田村に多少むくみが出る。永易は回復。夕食はBC建設を祝して、羊とじゃがいものスープ、肉野菜炊めを中国側から提供され、さらにマッシュポテトも加えて豪華おかず三本立てとなった。

7月23日(晴)

吉見 (BC) 10:45/12:45 (4250m) 13:00/
15:00 (BC)

西堀・田村 (BC) 10:45/15:00 (4300m)
18:20/21:00 (4450m) 21:00/21:50
(4300m・デポ地)

永易・伊東 (BC) 10:45/15:00 (4300m)
17:55/18:20 (BC)

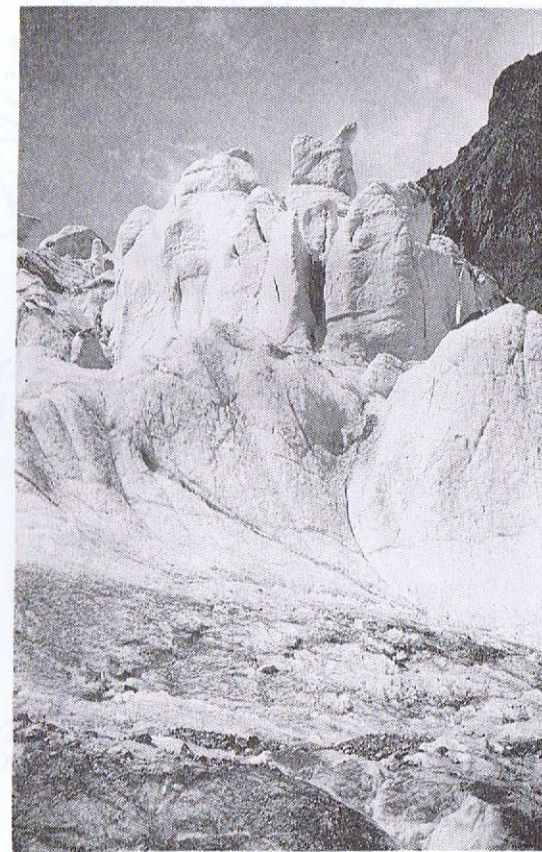
7:30の予定を寝坊し、8:00起床。テントに霜がはっている。朝食後、全員で第2回の偵察に出发。約2時間で4250m地点に達したが、吉見が不調を訴え、ここから単身BC

へ下山。他はさらに氷河を登行し、氷河左手の岩峰直下のプラトーに仮C1を設営することを決定した。高度は4300m。ここから再び4250m地点へ下降し、昨日デポしたものを4300mへ荷上げし、西堀、田村はこのまま仮C1泊とした。2人はその後上部へのルート偵察を行った。

永易・伊東は約3時間かけてBCに帰着。この日馬方達は高氏とともに下山した。

7月24日(快晴)

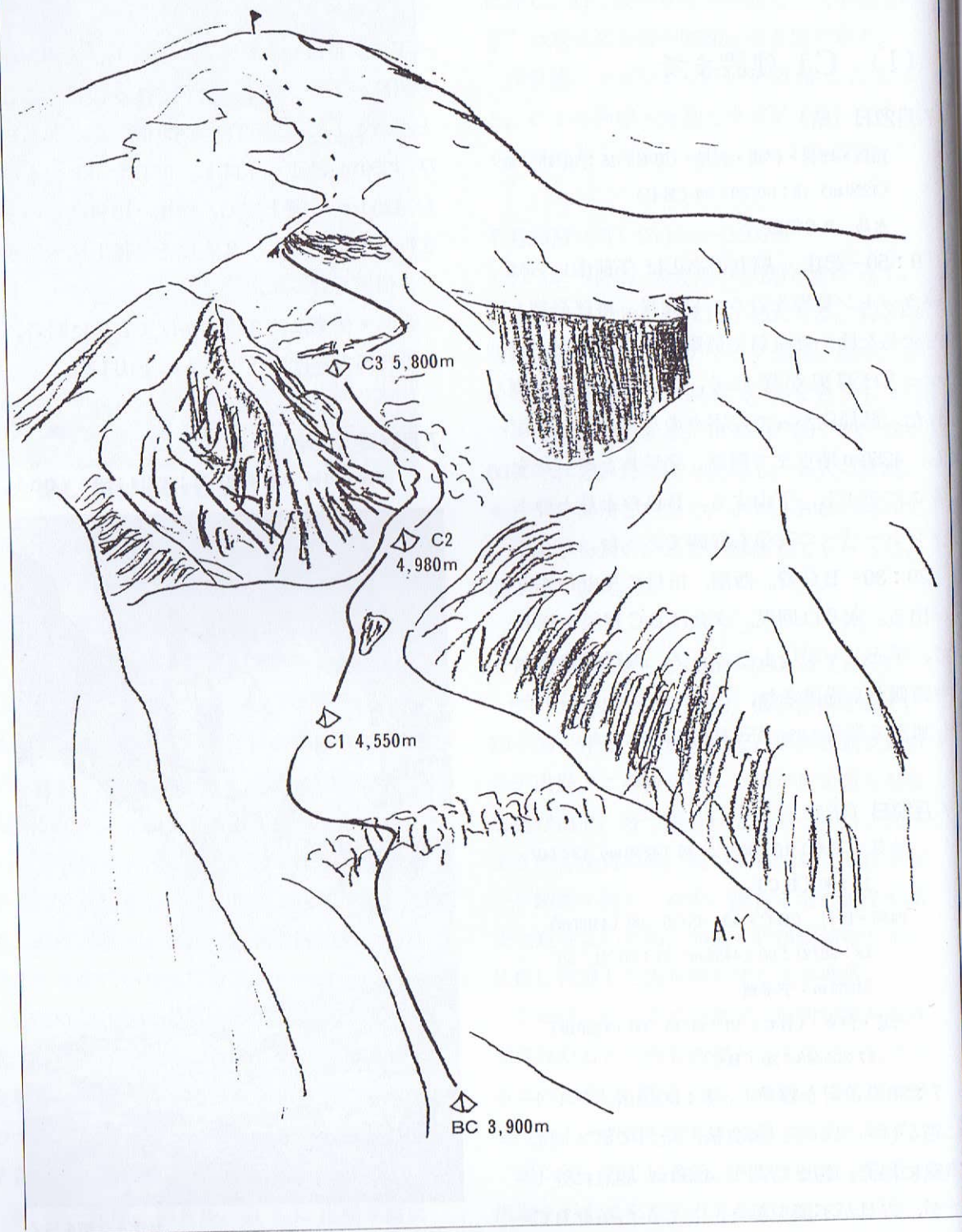
西堀・田村 (デポ地) 11:25/14:50 (C1)



セラック帯を行く

〈図-4〉

BC, C1, C2, C3位置略図



17:00/17:50 (4450m) 18:10/19:00 (C1)

永易・伊東・吉見 (BC) 11:00/20:35 (C1)

西堀, 田村は8:45に起床してC1建設をめざした。前日の偵察で, すでにアイスフォール帯を抜け上部の雪原に達していたので比較的スムーズに登行する。雪原の末端に個人装備と食糧をデポし, その後アンザイレンして雪原を進み, 14:50-C1予定地の4550m地点に到着した。

設営地模索中に田村がヒドンクレバスに約4m転落し, 「西堀さん」と隊長の名を連呼するも隊長は数分間全くこれに気付かず「全く田村は遅いっ」などと思っていたという。やっとの思いで脱出した時には1時間も経っていたが, 田村の方もクレバスの中から空の写真を撮るといふ余裕ぶり。

16:00-C1を設営。その後雪原のデポの回収に向かう。

一方BCの永易・伊東・吉見はC1目指して11:00出発。3名とも非常に調子悪く, C1にヒューヒューいながら到着したのは20:35。1時間半程前に到着していた西堀, 田村と合流し全員C1泊となる。夕食後, 就寝。

(2) C2 に向けて

7月25日 (BC晴, C1雪)

吉見 (C1) 10:00/15:00 (BC)

西堀・永易 (C1) 10:00/11:30 (デポ地)

12:00/15:30 (C1) 16:15/19:30 (BC)

田村・伊東 (C1付近で作業)

8:00起床。西堀, 永易, 吉見は4300mのデポの回収及びBCへの下山。田村, 伊東はC2方面へのルート作業を行うことになった。しかし降雪がかなりひどいので, 田村隊はC1で様子を見ることにした。西堀隊は

10:00にC1を出発し, 11:30に4300mのデポ地に到着。しかし吉見は不調のためそのまま下山した。

西堀と永易はデポ品を殆ど回収し, 再び登り返して15:30にC1着。そして約3時間でBCに下山した。田村隊は結局雪のため動けず, C1付近のクレバスのFIX作業などをしてお茶を濁した。といっても実際C1付近はクレバスが多く, アンザイレンしないととても遠くへは行けない。なんと伊東はこの日, テントから数mの地点でクレバスに5m程落ちた。

C1の景観は素晴らしく, 北を見ればトムールの最前衛峰, 南を見れば遙か遠くにモレーン地帯, 夜になれば星は空を埋めつくさんばかりである。

7月26日 (曇後雨時々雪)

西堀・永易・吉見 (BC停滞)

田村・伊東 (C1) 10:30/16:30 (BC)

BCの西堀, 永易, 吉見は休養日とした。田村, 伊東は, 今日こそC2方面へのルート作業を行うはずだったが, 昨日クレバスに落ちたショックからか, 伊東の体調が非常に悪く, 10:30BCへ向け下山を開始し, 16:30BCに帰着した。

7月27日 (晴)

西堀・永易 (BC) 10:40/18:00 (C1)

田村・伊東・吉見 (BC停滞)

8:00起床。田村, 伊東, それに相変わらず不調の吉見はBCで休養とし, 西堀, 永易は10:40C1へ向け出発した。西堀隊は3時間でデポ地に到着。その後のアイスフォール帯は気温が高いため, いたる所に川ができてお



アイスフォール帯を行く(伊東隊員)

り、巨大な数千の氷塔が今にも崩れそうで恐ろしい。18:00—C1に到着したが、周囲があまりにもクレバスだらけなのでC1の移動を決め、約200m後退させる作業を行ったが、これがデポした荷物などの関係で、広い広い雪原上をあっちこっちへ荷を背負って歩き回るハメになって2人ともヘトヘトになってしまった。

それでも新C1の周囲にはクレバスがほとんど見当たらず、とりあえずテントから半径20m以内なら一人でも大丈夫であった。この夜、C1は後発隊と初の交信に成功し、彼等の入山が1日遅れるという事実を知って、後発隊カートンの中のコーヒーを待ち望んでいた西堀と永易はガックリと首をうなだれるのであった。

7月28日(晴)

西堀・永易 (C1) 9:00/14:00(田部井C2)
16:30/18:00(5300m) 18:00/21:30(C1)

田村・伊東 (BC) 10:00/20:30(C1)

吉見 (BC停滞)

BCの田村、伊東はC1への荷上げのために7:30起床し10:00に出発。吉見はひき続き休養することにし、初代“BC王”と名付けられた。田村隊の到着は20:30。

西堀、永易はC2方面へのルート工作を行うことにし、9:00にC1を出発した。雪面は硬く凍っており歩きやすく、なだらかな斜面をC2方面の谷目指してひたすら歩く。

12:00頃から雪面は段々畑状となり、クレバスだらけらしかったが、なにぶん気温が低いので、これを踏み抜くことなく登行してゆくと、突然眼前がひらけてそこが田部井隊のC2跡地であった。しかしここは左手のルンゼ、つまりC3方面より彼女達が雪崩を受けているので更に上部へ幕営地を探しに向かったが適当な場所がなく、結局引き返した。

16:30—田部井C2に荷物をデポし、若干の登攀具を持ってC3方面へのルート工作を引き続き行った。目指すルンゼの右側がきれいな雪面になっているので迷わずこの雪面にとりつき、これを直上すると更に新たな雪原がこれに続いている。斜度は20~40度位である。そのまま雪原をFIXする必要もなく、アンザイレンして高度を稼ぐ。田部井C2のデポやC1が遠くに見えている。18:00になったので下山を決め、ザイル等を雪原上にデポした。高度5300m。

上部は左寄りに進んで行けばわりあいスムーズにコルに出られそうに見えた。高度計は

5300mを指している。下山中、一番斜度のきつい地点にアンザイレンのザイルをFIXした。高度5200m。このままC1へ向かって下降を開始したが、永易が4700m付近でヒドンクレバスに落ち右足を負傷し、急にペースが落ちて21:30にC1到着した。

7月29日(快晴)

田村・伊東 (C1) 10:00/14:20(BC)

西堀・永易 (C1停滞)

吉見 (BC停滞)

永易は夜が明けても足の痛みがひかず、動けない。ここで先発隊の行動について、「できるだけ上部へルートを伸ばすべきだ」という西堀隊長と、「C1、C2までのルート整備を優先すべき」という田村の間で意見がわかれ、隊長は田村を隊からはずす決定を下す。田村と伊東はBCへの下山を決め、10:00にC1を出発し、14:20にBCに到着した。西堀と永易は、永易の足が思ったより悪いので、C1で停滞となった。

(3) C2を建設する

7月30日(晴)

西堀 (C1) 9:30/12:20(BC)

永易 (C1停滞)

井上・吉田・吉見・伊東・宮崎・堀井 (BC)

16:00/18:00(デポ地) 18:20/19:50(BC)

BC起床8:45。午前中、カートン整理をしていると、西堀が下山してきた。再会を喜んだ後、昼食の準備にとりかかる。伊東おすすめのマッシュポテトはなかなか旨い。

午後、井上、吉田の高度順化のため、西堀が案内役で、4300mデポ地までの往復をす

る。伊東、吉見も荷上げを兼ねて同行。氷河のスケールのでかさに、井上感動。

夕食後のカレーを皆でワイワイ食べた後、登攀隊員でミーティングを行う。田村の離隊について各隊員が素直な意見を速べる。基本的に皆、隊長に反対の意見であった。また、トムールの登山に対する考えをそれぞれ述べ、数時間の討論の後、西堀が折れる形で田村の帰隊が決まる。

皆、西堀隊長に感謝しつつ就寝。もやもやがふっきれ、一同に隊の結束が強まったことを確認した貴重な一日であった。

7月31日(晴)

西堀・井上・吉田・田村・吉見・宮崎 (BC)

14:40/18:15(デポ地) 19:00/21:30(C1)

片岡・高松 (BC) 14:40/18:15(デポ地) 19



アンザイレンする隊員(トップ井上、右伊東隊員)

:00/19:25 (アイスフォール帯) 19:30/21

:00 (BC)

伊東 (BC) 14:40/17:30 (赤い大岩・4250m)

17:50/18:00 (BC)

森下 (BC) 14:40/18:15 (デポ地) 19:00/20

:00 (BC)

永易 (C1停滞)

BC起床9:50。10:00 交信で、永易に必要な薬の手配をする。朝食後、登攀隊員全員で荷上げ、上部ルート工作目的でC1へ向かう。しかし、伊東の体調が悪いため、宮崎が変わりにC1に上がることになり、伊東はBCへ戻る。デポ地では森下が、アイスフォール帯では片岡、高松が、それぞれ別れてBCへ下山した。

雪原上は、3名ずつのコンテで進む。やがて、C1に到着。永易がテントの横に立って待っており、大変な喜びようであった。

夕食後も、話は尽きそうもなく、就寝は0:20であった。

8月1日 (晴)

西堀・井上・吉田 (C1) 10:00/13:50 (5050

m) 14:20/14:50 (C2) [吉田 (C2)

20:55/0:30 (C1)]

田村・吉見・宮崎 (C1) 10:40/11:10 (旧C

1) 11:45/15:30 (C2) 20:55/0:30 (C1)

永易 (C1停滞)

C1起床7:00。朝食後全員の血圧と脈拍を測定する。この日、西堀隊はC2設営、田村隊はC1～C2間のルート整備及びC2への荷上げを目的とする。

西堀隊は、C1の右前方に見える岩山にはさまれた狭い氷河を目指す。雪原から氷河クレバス帯を過ぎ、田部井隊がC2を設営した

雪原へと出る。3人相談の末、氷河クレバス帯上部の雪で埋まった大クレバス内(4980m)にテント設営し、C2とする。

田村隊は、旧C1のテントポールが折れていたため回収をあきらめ、付近のルート整備をしつつC2へ。C2に着く頃、井上が田村隊に手を振って数歩歩いた所で小さなクレバスに落ちる。

夕方、吉田の体調が悪くなったので、田村隊とともに陽がかけのを待ってC1へ下山。クレバスの状態悪く、悪戦苦闘の末0:30、C1着。永易が大変心配する。C1就寝2:00。

8月2日 (晴時々曇)

西堀・井上 (C2) 8:30頃/16:00 (5750m)

16:30/19:00頃 (C2)

吉田・吉見・宮崎 (C1) 20:00/0:45 (BC)

伊東・高松 (BC) 8:30頃/15:40 (C1)

田村 (C1付近ルート整備)

永易 (C1停滞)

ルート工作の西堀隊は起床早く、9:00には登高していた。ルートは5050mの雪原から向かって左にある前衛峰の南東面の大雪壁(高度差1000~1500m)の左寄りの登攀となる。途中、5500mの大クレバスの雪壁(ギャップ)に50mザイルをFIXする。順調に高度をかせぐが、5400m付近から降雪となる。さらに、井上が高度順化できておらず、雪壁上の5750m地点で眠気を訴え、行動不能になる。休息後、テント等をデポし、C2へ引き返す。C2に着く頃、井上体調回復す。

C1付近のルート整備は、田村・吉田・吉見で行う。荷上げ後の伊東・高松が到着し、吉田・吉見と交代、C2方面へ整備を続け

る。

吉田・吉見・宮崎はBCへ下るが、またも夜間行動となる。夜、永易が再度発熱し、氷で冷やす。BC就寝1:00。

(4) C3 建設まで

8月3日 (C1晴, BC曇)

西堀・井上 (C2) 9:00/10:45 (C1) 12:

00/16:00 (BC) [C1からは永易・高松が同行]

田村・伊東 (C1) 12:00/17:35 (C2)

吉田・吉見・宮崎・河合・堀井 (BC) 13:30/15:50 (デポ地) 16:15/17:35 (BC)

C1起床8:45。西堀隊はC1の永易・高松を連れてBCへ下ることにする。これはBCのDr.堀井の指示である。雪原上では永易もスムーズに歩けたが、アイスフォール、モレーンとなると足への負担が大きくつらそうである。途中モレーン地帯で、BCからの荷上げ隊と出会い、永易の状態等を話す。

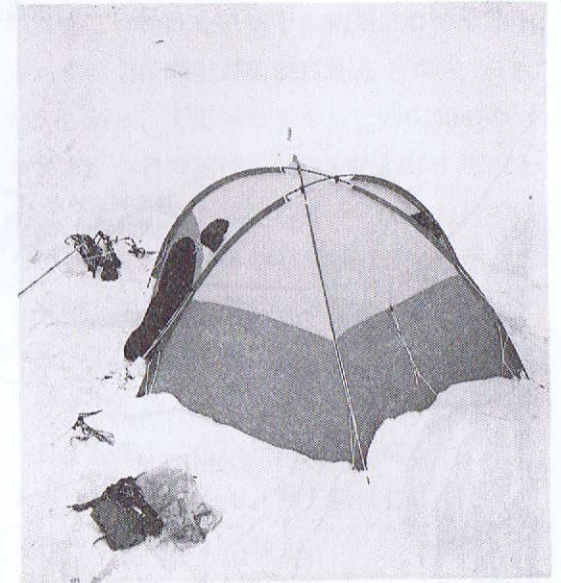
田村隊は、C2に6人用テントを張ること、食糧の荷上げの2点を主目的としてC1を出発。雪原左側のクレバスの狭くなっている所にルートを選ぶ。

荷上げ隊は、当初C1までの予定であったが、吉田不調のため、デポ地までとする。夕方BCには久しぶりに多勢集まり、楽しい夕食となった。C2就寝21:30。BC就寝0:00。

8月4日 (BC雨, C2雪)

BC, C2 停滞

BC・C2とも8:00起床。C2付近は降雪、風強く、視界5mで、10:00、田村隊が停滞を決定。BCは雨。吉田・吉見の出発を



C2のキャンプサイト

隊長が制止したので、皆停滞とする。井上は顔にむくみが出て1日中寝たきりであった。12:00の交信以降、3時間毎の開局とする。18:00頃には、BC・C2ともに晴れあがった。C2の積雪は30cmで、トレースは消されていた。

BC就寝0:30。C2就寝22:00。

8月5日 (BC晴, C2晴)

西堀・吉田・吉見 (BC) 11:00/16:25 (C1)

17:35/20:50 (C2)

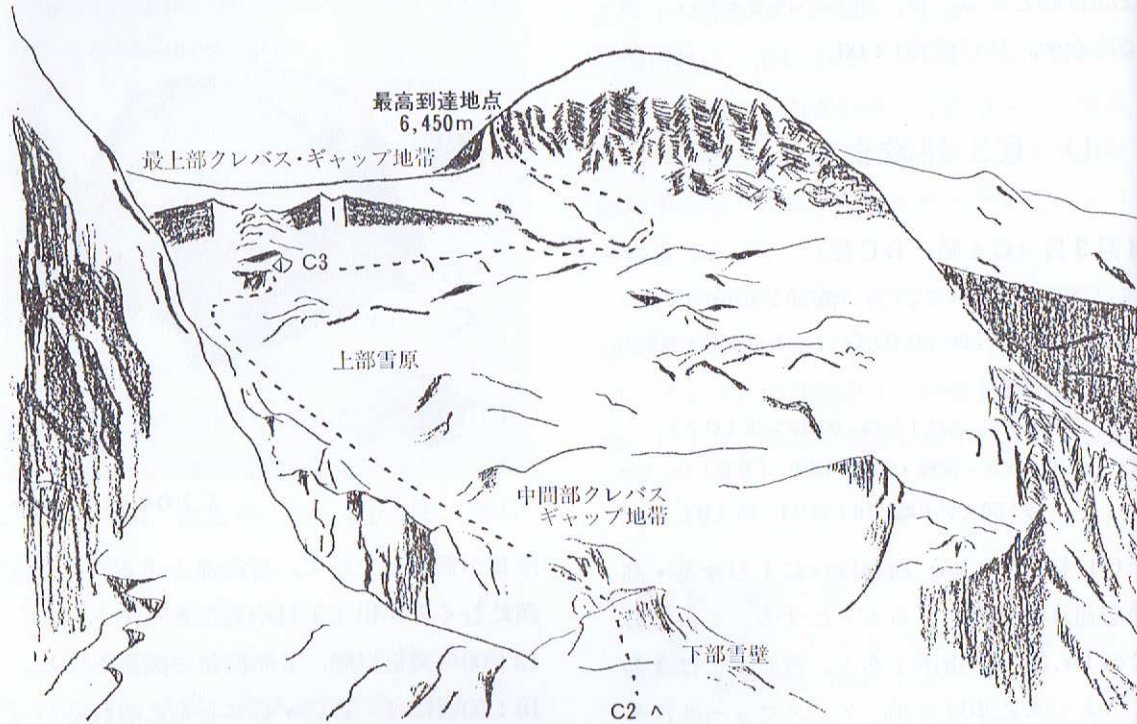
田村・伊東 (C2) 10:05/12:50 (5350m) 13

:05/15:00 (C2) 20:00/21:10 (C1)

森下・宮崎・河合・堀井 (BC) 10:44/23:15 (2400m)

井上・永易 (BC停滞)

BC8:30起床。トレッキング隊のメンバーの下山を見送った後、西堀隊はC2へ向かう。C2の食糧・燃料の荷上げである。C1で紅茶を飲み、大休止した後、夕方にはC2へ着いた。C2の大量の食糧の整理を3人で手分けして行なう。



C2 起床7:30。田村隊は上部のルート工作を行なう。が、9:00の時点で未だ出発しておらず、隊長に皮肉られる。5250mあたりの50m雪壁にザイルをFIXするが、ここには西堀・永易隊が既にFIXしていたのであった(FIXは雪でうまっていた)。5350m付近で田村不調となり、引き返す。C2で休むが、回復せず下山。

井上はこの日も休養とする。

C1 就寝24:00。C2 就寝23:45。

8月6日 (BC, C1, C2 晴)

西堀・吉田・吉見 (C2) 8:30/16:40(5750m)

17:30/19:50 (6000m) 20:00/20:45

(5800m)

田村・伊東 (C1) 10:40/13:45 (BC)

井上・高松・片岡 (BC) 8:50/15:30 (C1)

永易 (BC 停滞)

C2 起床6:30。5750m地点のデポ品回収及び、上部のルート工作とが、この日の西堀隊の目的であった。夜明けとともにC2を出発し、順調に高度をかせぐ。途中、5500m付近のギャップから急な雪壁に移る地点に50mザイルをFIXする。デポを回収した後、真上の雪壁を右へ巻いてから直上する。上部雪壁帯基部に着いて、吉田・吉見が空身となりルート工作に行く。西堀は荷上げ。6000m付近で、最低コルへの突破口を見出せないまま撤退を決定。5800mクレバス帯の小台地上に天幕設営、仮C3とする。この小台地は上下をやや大きめの雪の台地にはさまれており、上部からの表層雪崩は完全に妨げると判断。また、ブロック雪崩の通り道のルンゼより、一段上がった所に位置していたため、西堀・吉田相談の上、この場所を選ぶ。ルートに選

んだこの大雪壁の構成は下から下部雪壁、中間部クレバス・ギャップ地帯、上部雪原、最上部クレバス・垂直雪壁帯とに分けられる。仮C3は最上部地帯にさしかかるあたりに設けた。深夜、横のルンゼ状の斜面で雪崩発生。

C1 起床8:00。依然として体調良くなり、田村隊は休養のため、BCへ下山する。

BC 起床7:00。前日、十分な休養をとった井上は、高松・片岡とともにC1への荷上げを行なう。3人とも体調良。

仮C3 就寝23:00。BC 就寝0:00。

(5) 最高到達地点に達する

8月7日 (C3 晴後地吹雪, BC 晴, C1 晴)

西堀・吉田・吉見 (仮C3) 9:40/17:55 (6450m) 18:15/20:00 (C3) 20:30/23:20

(C2)

井上・高松 (C1) 11:40/14:00 (C2) 20:45/22:00 (C1)

田村・伊東・永易 (BC 停滞)

片岡 (C1 停滞)

仮C3 起床7:30。快晴である。仮C3から右へ雪壁上を大きくトラバースしていく。12:00頃、6000m付近、壁のギャップが小さくなった所から直上する。地吹雪がひどく、呼吸するのがつらい。直上で、FIX 50mを3本張る。3名共絶好調。15:00頃、6150m付近登攀。相変わらずの急傾斜だが、FIX用ザイルを使いきったのでコンテで進む。

上部岩壁の末端にて、吉見体調不良のため岩場で休息。西堀・吉田とで急な大ルンゼ状雪壁を登ると、岩尾根上のコル(6450m)に出た。ガスの切れ間から、ソ連の山々、氷河

が見える。周囲を偵察した結果、このコル上もしくは前衛峰上为天場に最適と考えられた。しかし、田部井C2からこの6450mのコルまで、1日で抜けるのは時間的に不可能と考え、大雪壁通過途中の唯一の安全地帯であると思われる仮C3をC3とする必要があると判断。18:40、6300m地点にテント等をデポし、下山開始。吉田体調悪く、1人遅れる。C2まで下る。

C1 起床7:45。片岡は血圧高く、C1にとどまることになる。井上隊はC2への荷上げを行ない、C1へ戻る。

田村・伊東は休養日とする。

BC 就寝0:00。C3 就寝1:00。

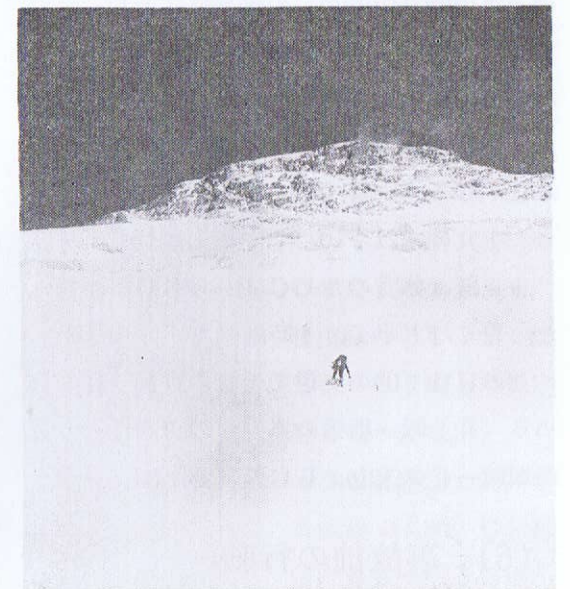
8月8日 (BC・C1・C2 晴)

西堀・吉田 (C2) 11:30/12:40 (C1) 12:50/15:50 (BC) [C1からは、片岡同行]

井上・高松 (C1) 10:10/14:30 (C2)

田村・伊東 (BC) 9:15/14:25 (C1) 17:30/20:00 (C2)

吉見 (C2 停滞)



最高到達地点へ登はん中の西堀隊長

永易 (BC停滞)

C2起床10:15。吉田に頭痛が残るが、西堀とともにBCへ向け下る。途中C1で片岡を加え、快調に下山。BCに着き、缶詰・プリン等を食べあさった。夜になって、永易再度発熱する。39度であった。

C1の井上・高松は、吉見、田村・伊東と合流すべくC2へ向かう。途中、西堀隊と出会いC3上部の状況を知る。

BC起床7:00。田村隊は、田村がやや不調であったが、上部のルート工作を目的としてBCを出発。アイスフォール帯で、西堀隊と出会う。C1で荷上げ品をパッキングしC2へ。伊東は快調で夕方にはC2入りした。

C2就寝23:00。BC就寝23:45。

8月9日 (BC晴れ時々雨、朝5°C)

井上・田村・伊東 (C2) 8:40/18:30 (C3)

吉見・高松 (C2) 10:10/14:15 (BC)

西堀・吉田・永易 (BC停滞)

C2起床6:00。井上隊はC3を目指す。14:00頃までは順調で5500m付近に達したが、雪が降り出したため視界は十数m、ルートはラッセルとなる。さらに16:00頃、伊東が不調、眠気を訴え始め、3人の苦闘がつづく。BCの西堀にルート指示を受けつつ、なんとかC3へ到着する。皆ひどく疲労しており、夕食後、21:10、すぐに床に就く。

吉見隊は休養のためC2からBCへ下山した。驚くほど早く、4時間強で下ってきた。

この日19:00の交信で翌日の行動予定を決める(井上隊—積雪の為停滞の可能性有り)。西堀隊—C2入り。BC就寝23:00。

(6) 事故前の行動

8月10日 (C3雪、C2風雪時々晴、BC晴

時々曇一時雪 朝2°C)

西堀・吉田 (BC) 11:00/15:30 (C1) 16:

10/18:35 (C2)

吉見 (BC) 11:00/13:05 (デポ地) 13:40/

15:40 (BC)

井上・田村・伊東 (C3停滞)

永易 (BC停滞)

BC起床8:00。西堀隊の3人は、3日後に頂上に立つつもりでBCを後にする。デポ地までの間で吉見が体調悪くなり、BCへ戻ることをとする。2名とも何度となく往復しているだけに、スピーディーにC2入りした。

C3起床6:20。井上は一睡もできずに一晩中起きていた。伊東も頭痛を訴える。外は雪(積雪40cm、吹雪、視界0m)。10:00交信にて停滞決定。夕方になると、天候・各人の体調ともに回復。この後C2との交信で、翌日のために6450mまでのルートの確認をする。

BC就寝1:00。C2就寝23:15。

8日11日 (BC晴、強風、朝2°C、C2晴、C3曇)

井上・田村・伊東 (C3) 9:00/15:50(6000m)

16:00/17:00 (C3)

西堀・吉田 (C2) 9:25/18:10 (C3)

[吉田・田村 (C3) 19:10/21:40 (C2)]

永易・吉見 (BC停滞)

C3起床6:00。井上隊は上部ルート工作(C4建設)を目指してC3を出発。右トラバースを開始するが、前夜までの降雪のため足もとから表層雪崩が起こり、中止。そこでC3真上にある最低コルへの直上ルート(8/6吉田・吉見が撤退)を選択する。5970m付近で飛雪のためルートファインディングに手こずるが、交信で吉田より指示を受ける(左ルート)。が、左ルートに活路を見出せず、

15:00頃断念。

次に右上する急雪壁にルートをとるが、6000mから先の雪壁を越えられず、C3へ下ることを決定。17:00C3着。直後、数分前まで歩いてきたルートに大雪崩が発生する。

この日、井上・伊東は快調であったが、田村は午後から不調を訴えており、吉田のC3



BCキャンプサイト

到着を待って断判を仰ぐことにする。

C2起床7:10。西堀・吉田は5日分の食糧・燃料を背負ってC3へ。途中、井上隊に何度かルート指示を出しつつ高度をかせぐ。夕方C3到着。すでに井上隊の3名はテントの中であった。吉田が田村の様子をみて風邪と判断し、下山させることにする。この田村

が下山するにあたってのパートナー(基本的に単独行動はしないため)について協議し、結局、吉田が付き添うこととなる。19:00、BCとの交信にてこれを連絡する。この交信を当日のBC—C3の最終交信とし、今回は明朝開局とした(但し吉田隊—BCの交信は22:30再度行なうこととする)。

吉田隊のC2入りは想像以上に早く、田村の体調も咳は出るものの大分回復してきた。22:30—翌日の行動について、吉見・高松のC2入りの見合わせ、吉田隊のC1もしくはBCへの下山との決定をBCへ連絡。

BC就寝23:30。C2就寝0:30。C2にて、C2—C3方面から雪崩の音を聞く。

3. 事故発生と搜索活動

永易量行・吉田宣明

(1) C3 交信不能となる

8月12日 (BC晴後雨・朝4°C, C2晴一時雪)

吉田・田村 (C2) 12:15/12:35 (5050m) 14:55/15:15 (C2)

吉見・高松 (BC) 14:00/18:15 (C1) 18:30/21:15 (C2)

永易・片岡 (BC停滞)

C2起床6:50。10:00定時交信を行なうがC3と連絡とれず、西堀隊は早朝より行動しているはずで、この時点では危険箇所を通過中だろうと想像する。朝食後、BCへ下るべく準備を始める。11:00の臨時交信でも西堀隊と交信できず。事故の可能性を考え、吉田隊はC2に待機する。12:00やはり交信不能。この時点で3名の遭難を認識し、トランシーバーの常時開局、吉田隊は下山中止し、状況把握に向うことをBC-C2間で相談し、決定する。

5050mの雪原にてルートとなる雪壁を肉眼で観察するが、3名の姿やC3の有無は確認できず、C3からのトラバースルート上とC3右付近に雪崩の跡を発見できただけであった。13:00交信にて、搜索活動は時間・装備・人的な面から見て翌日に行なうことを決定し、吉見・高松に搜索必要品の荷上げを要請する。

15:00頃までこの雪原上で雪壁の偵察、西堀隊からの交信待ちをする。C2に到着後、17:40トランシーバーからコール音3回、

雑音1回聞こえた(C2のみ)ので、3名の生存を確信し呼びかけるが応答なし。(これは後日、トランシーバーの自動警報装置の作動であったことが判明した。)

吉見・高松は吉田の要請を受け、14:00-C2へ向けBCを出発(荷上げ品は7mm/50mザイル、双眼鏡、スノーバー、アルファ米等)。C1到着18:15。ここからC3付近の雪壁上に雪崩の跡を確認する。夕方C2入りする。この頃降雪。

永易・片岡は、BCにて連絡本部の役割りをする。

まず最初に、16:00西堀隊の遭難が確認でき次第、タカラクヘモールス信号を打ちに連絡官に行ってもらうことを確認する。19:00この連絡内容を変更・追加(救助隊の要請及び日本、CMAへの連絡)。

21:30交信にて、翌13日の行動予定を次のように確認する。

- ① 吉田を搜索隊長とし、この指示に従う。
- ② 吉田・吉見が搜索隊としてC3の有無及びC2-C3間の搜索を行なう。
- ③ 田村・高松がサポート隊として5050m雪原にて偵察及び搜索隊への指示を行なう。
- ④ 永易・片岡はBCにて待機。
- ⑤ 高氏は13日夕方の時点で、現状把握の有無にかかわらず下山する。

23:00。行動予定を変更—永易下山の可能性有(馬の入山が条件)。

0:00C2就寝。BC就寝せず。

1:30-C2トランシーバーにコール音2回。呼びかけるがBCの応答のみであった。

(2) 搜索活動の状況

8月13日 (C2・C3晴後雨, BC晴後雪)

吉田・吉見 (C2) 8:45/9:05 (5050m) 9:15/10:00 (下部雪壁上) 10:15/16:55 (C3地点)

田村・高松 (C2) 9:00/9:30 (5050m) 17:10/17:30 (C2) 18:00/21:00 (C1)

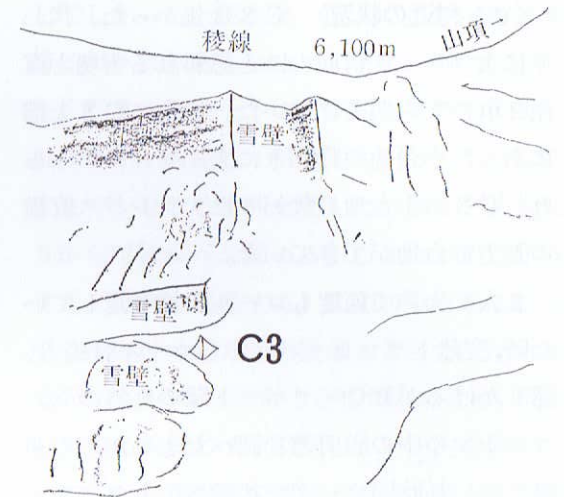
永易・片岡 (BC待機)

C2起床6:15。搜索隊出発8:45。5050m雪原から登ってすぐの下部雪壁帯は、大きな新クレバスが幾つもあり、その中間台地は新たなデブリとなりコンテナ大のブロックが数個散乱していた。この台地上で9:40、スノーバー付きのザイルを発見する。これは8月6日に5400m付近にFIXしたものであった。

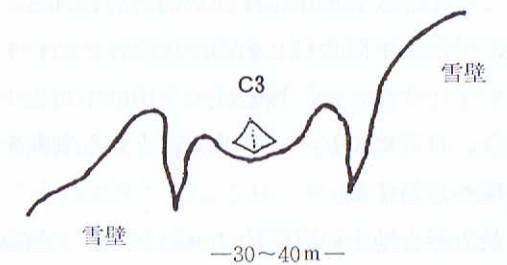
中間部クレバス・ギャップ帯では、クレバスに伴う垂直雪壁が陥没していたり、デブリでクレバスが埋まっていたりして、11日の夕方とは様相が異なっていた。5500mのFIXザイルは無くなっており、上部雪原に出る箇所は氷と軟雪が層を成した急雪壁になっていた。ここを乗越すあたりからガスが発生し、やがて降雪が始まった。

上部雪原上はすでに雪原ではなく、全て新たなデブリで埋まっており、階段状に上部へ続いていた。視界20~30m。肉声とトランシーバーの両方でコールしつつ登高する。5600m付近に達すると、下方で雪崩の起こる音がしてきたので、搜索の継続について相談する

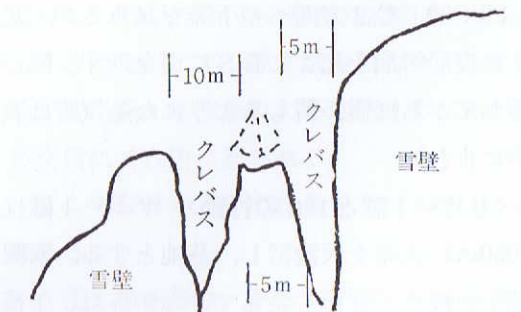
〈図-6〉 C3付近全体図



〈図-7〉 C3付近事故前の位置断面図



〈図-8〉 同上事故後の位置変化



(吉田も吉見も同意見にて登高開始)。

最上部雪壁帯末端にある雪壁下部のトラバースには、試登を数回行ない1時間以上を費やす(積雪30cm, 視界5~10m)。C3手前にあった飛び越せるほどのクレバスは、側壁

陥没で幅広くなっており、これも回り込んだ。

〈C3 付近の状況〉 C3は無かった。代わりに大ブロック雪崩の跡と思われる雪塊と直径2mの大穴ができていた。さらにC3上部にあった小台地の代わりに大クレバスがみられ、C3の小台地の代わりに大クレバス直横の長方形台地ができていた。

2人で大声で何度もコールを繰り返していた時、突然トランシーバーからコール音鳴る。話しかけるがBC・サポート隊の応答のみ。カートンの中の説明書を調べた永易からの連絡では、長時間オープン状態へのトランシーバーが持つ自動警報装置であった(前記)。

ここで、3名の生存は絶望的と思われること、サポート隊のC2宿泊は危険なためC1まで下山すること、捜索隊の下山は不可能であり、付近にてビバークする、という判断を各隊へ連絡する。

長方形台地上の直径約3mのブロック側面を削りビバークサイト(BS)とし、ブロックを背に2人並んで座る。気温は下がってくるが、雪は積もらず衣類を濡らすため、寒い。

20:00、C2方面への下降を試みるが、足下に表層雪崩を起こしBSに引き返す。陽が落ちてからは雪が積もるようになる(雪は夜半に止む)。

〈サポート隊とBCの行動〉 サポート隊は5050mに天幕を仮設営し、基地とする。双眼鏡での捜索では何も発見できなかった。午後になると雪壁上部からガスがかかってきて、やがて捜索隊の姿を追うことができなくなった。定期的にBCと捜索隊との発信のサポートを行なう。夕方、捜索隊からC3付近の状況を聞き、言葉をなくす。吉田の指示に従い、17:00過ぎ設営したテントを捜索隊に残

し、C1へ向かう。

連絡本部(BC)は、常時発信内容の記録及び中国側との交渉にあたる。14:00頃ここでも降雪、夕方には吹雪となる。

捜索隊からの連絡により、17:45—連絡官の高氏及び劉氏に救援依頼のため下山してもらう。連絡官には次の4点を依頼する。

- ① ヘリコプターの緊急出動の要請
- ② CMAへの遭難発生の連絡
- ③ 日本への連絡
- ④ タカラクからの馬の調達

19:45—馬方1名到着。これにより永易は翌朝アクスへ向うこととする。20:00の発信から1時間おきにビバークする捜索隊に呼びかけることを決め、各隊の同意を得る。

この夜、吉見一不眠、吉田一時間ごとに5分目覚める。BC・C1—毎時5分間バカ騒ぎし、その後静寂、うたた寝の繰り返し。通訳王氏もつき合ってくれた。

8月14日(C2・C1晴後雪)

吉田・吉見(BS) 8:45/11:20(仮設C2)
12:25/12:45(C2) 14:20/15:10(C1)
田村・高松(C1) 9:35/11:35(C2) 14:
20/15:10(C1)
永易(BC) 8:45/2:00(2000m)

捜索隊は8:00の発信後、出発準備を始める。雪はすでに止んでおり、朝日が山にさし始めている。8:30頃、2名の立っている小台地に大雪壁上部からの表層雪崩が降ってきて、一瞬ホワイトアウト、呼吸困難となるが、事無きを得る。

BS出発。不眠のため、吉見はつらそう

である。積雪量は前夜と変わらず、雪崩に注意しつつ下る。3時間弱で大雪壁を下りきると、サポート隊が残してくれたエスペースがあった。ここで休憩、テントを撤収し、C2へ向かう。C2ではサポート隊の2人が待っていた。

この日のサポート隊は8:00の発信の後、C2の装備の撤収に向かう。2人とも疲れているがペースは速い。C2へ着いた1時間後に捜索隊が到着した。

C2にてサポート隊へ詳しく状況報告をした後、荷下げ品のパッキングにとりかかる。遭難した3名の個人装備を中心に詰め、食糧・燃料・テントは残すこととする。4人でC1へ。C1にて今後の捜索活動、撤収作業、中国側への依頼要件、日本への対応等予想されるすべてのことについて話し合う。翌日からの具体的行動は次のとおりとした。

吉田・田村=15~17日に第2次捜索活動。これはC3全体が雪崩で流されたことを仮定し、主目的は遺品の回収とする。

吉見・高松=15、16日でC1撤収。

C1就寝23:45。

永易は中国側との相談及び日本との連絡のため、8:45にBCを馬で出発し、深夜2:00に2000m地点に到着しビバークした。連絡官の高氏は22:00にタカラク着。

8月15日(C1曇)

吉田・田村(C1) 11:35/13:55(C2) 14:
25/14:55(仮設C2)
吉見・高松(C1) 12:55/17:05(BC)

C1起床8:50。皆前日の疲れのため寝過ぎてしまった。朝食後、捜索に必要な物の準備にかかる。出発は11:00をまわってしまう。C2へのルートはもう間違えることはなかったが、肉体的・精神的に疲労しておりC2までかなりの時間を要した。C2手前あたりから田村がバテ始める。C2にて2日分の食糧・燃料を調達する。5050mの雪原に出た頃には田村の疲労度が捜索どころではない状態となり、又時間的にも余裕がないため、雪原の右端に仮設C2を設営しテント内で休む。

ここから双眼鏡で捜索ポイントのあたりをつけていた頃、16:20—C3方面から大規模な雪崩が発生する。雪崩は約2分間続き、そのブロックは仮設C2の200m先にまで押し出してきた。この雪崩の発生により、C3が流されたと仮定した際の捜索ポイントを得ることができた。この日、雪崩の音が十数回はあり、視認したのは3回である。

荷下げ隊は、C1の個人装備(C2から降ろした物)を中心に荷下げを行なう。BCでは片岡が心配しており、荷下げ隊の姿を見て安心した後、上部状況の詳細な説明を受ける。

夕方の発信にて、捜索隊からのコールにBCが安堵感・不注意のため応答せず、その後の発信にて吉田に怒られる。

ここで翌日の各隊の行動予定を次のように決める。

- ① 捜索隊は、上部雪原までタイムリミット14:00として捜索する。その後仮設C2・BCへ下る。
- ② 荷下げ隊は、16:00までにアイスフォール帯を通過することを条件に、C1のテントを撤収する。

仮設C2就寝23:30。直後、C3—仮設C2間雪壁上で大規模なブロック雪崩発生。

永易は10:30にタカラクの無線局に到着し、既にアクスより到着していたアクス登山協会の張主任及び連絡官の高氏と打ち合わせを行ったのち12:00にタカラクを発ち、14:00アクスに到着した。

その後共産党委員会本部に向かい、政府幹部と会い、状況報告と救援依頼をしたのち、日本の森下事務局長に第一報を入れた。回線状況が非常に悪いため電話が数時間つながらず、いらいらさせられた。

8月16日 (C2晴, BC晴後雪)

吉田・田村 (仮設C2) 10:00/12:30 (5350m)

12:40/13:00 (仮設C2) 15:35/19:30

(BC)

吉見・高松 (BC) 8:30/12:30 (C1) <ヘリコプター> 13:30/13:40 (BC)

永易 (アクス) <ヘリ> (C1~6000m付近) <ヘリ> (アクス)

仮設C2起床7:50。朝食時(8:30)、中間部クレバス・ギャップ地帯から雪崩が発生し、5050m雪原まで押し出す。10:00捜索隊出発。捜索目標は、5050~5150mのデブリ(第1雪原)、5200~5400mのデブリ(第2雪原)、5500~5700mのデブリ(第3雪原)の3地帯で、予定を変更し下部から捜索を行なうことにする。

<5350mの雪原を捜索> アンザイレンし、双眼鏡で見渡しながら進むが広大すぎて思うようにはかどらない。10:20、第2雪原上部のルンゼから雪崩発生。必死に逃げるがアンザイレンのザイルが雪のブロックに引っ掛かり、むなしく足踏み繰り返す。幸いなことに

雪崩は第2雪原までで止まった。

第2雪原捜索。5200mにて、流されていたFIXザイルと折れたスノーバーを確認。ここから左方向にルンゼ状に伸びるこの雪原を5350mまで捜索。何も発見できず、第一雪原への雪崩の通路をジグザグに下降開始(雪崩の発生頻度等を考慮して、第3雪原へ向かうのは危険と判断)。1つ1つブロックを確かめていく。又、ルート上・各雪原の写真撮影を行なう。回収物は無く、仮設C2へ戻り撤収作業。

BCへの下山を開始する。途中C2には3名2日分の食糧燃料を残す。上空をヘリが飛んで行くのを見つつBCへ。

<ヘリコプターによる捜索> 荷下げ隊8:30。C1へ向かう。C1にてテント撤収作業中、中国政府に用意いただいたヘリが飛来し、C1の荷と隊員を収容してBCへ下る。このヘリには永易とウルムチ登山協会関係者が同乗していた。

アクスで給油した後、空から現場捜索を行なう。現場に詳しい吉見も同乗し、17:30頃現場上空から捜索・写真撮影を行なった。ここでも何も発見できず、これを最後に捜索打ち切りを決定し、BCへむかって入山中であった中国側捜索隊にも下山を要請し承諾を得た。夕方、BCに中国側救援隊(公安警察)の4人が到着する。彼らが持参してきた無線機で、アクスの永易への伝言を送ってもらった。

アクスでの永易は、残った5名の隊員の無事を知らせるために日本への電話を試みたが不通に終わった。

(3) BC撤収

8月17日 (BC曇後雨(雪))

全員 (BC停滞)

10:00起床。この日は終日カートン整理を行なう。登攀具等の共同装備の整理の後、隊員の個人装備を各々カートンに詰める。前日BC入りした公安警察の方々が私たちよりひと足先に明日アクスへ戻るといっているので、夜、ジャンボテントの中で懇親会を開いた。彼らは羊1頭を料理、私たち々はコーヒーや果物缶詰を、それぞれ振る舞い合い、様々な話を交わした。

就寝1:00。

カシュガル、トルファンへの小旅行を終えウルムチに戻ってきた河合・宮崎2名の隊員に、アクスへ戻るように新疆登山協会を通して要請していたが、この日11:00—兩名がアクスに到着、永易と合流して計3名で今後隊の下山まで、諸事項に対処することにした。

8月18日 (BC雪時々晴)

全員 (BC停滞)

8:45—起床(2人)。10:00—公安警察の4人と馬方1人がアクスへ向け下山するのを見送る。

11:00—起床。終日カートン整理。キャラパンで使用しないテント等を干すが、雪が降ったり止んだりでなかなか乾かない。遭難した3名の個人装備をそれぞれ1つずつのカートンにパッキングする。食糧の整理をする頃は吹雪となり苦勞させられた。不必要な物は燃やすことにする。

夕方、BCの大岩にハーケンで3名の名前

を刻む。

就寝0:30。

一方永易は、アクスからはどこに電話をするにしても、つながるまで数時間かかるので、中国に入国する家族と救援隊その他関係者に関する協議等を日本大使館にお願いすることにした。日本大使館に連絡をとると、大使館からは即座に対応を約束する、との返答を得た。担当していただいた大使館員の方々は沼田、清水、岡田の一等書記官の3氏である。

8月19日 (晴)

全員 (BC) 12:05/22:15 (2400m)

朝9:00起床。いよいよBCを去る日となった。前日のことがあったので天候に不安があったが、この日は快晴。荷積み作業はあいかわらず遅い。馬が一頭馬方の言うことを聞かないばかりか大あばれするので、使いものにならなかった。12:00頃出発。途中、モレーン地帯の小さな氷河湖に馬が倒れ込み、永易から預かっていたフィルム数十本、カメラのバッグがずぶ濡れになってしまった。幸いにして、中身は余り濡れていなかった。モレーン地帯最後の徒渉点で馬が疲れのため、倒れてのたうち回るが、馬方に顔面をけられて何とか歩き出す。ここで王氏が徒渉点を間違えたため、彼が渡るのを待っていた隊員達は、馬達に随分と離されてしまった。

幕営地に着いたのは、陽が暮れる頃だった。

就寝0:30。

8月20日 (晴時々曇)

全員 (2400m) 10:45/13:50 (2100m) 18:30

/21:00 (アクス)

8:35起床。2時間後出発。今日は、なぜか早い。皆、各々のペースで歩き13:50—2100m着。到着したトラックに、カートンと未使用ダンボール等を積む。張氏が、なかなか来ないので、民家で食事をする。17:30、張氏西瓜持参で登場。2台のジープに分乗し、世話になった馬方達と言葉を交し、草原を後にする。

夕方、アクス賓館に着くとホテルの玄関には、救援隊、西堀隊長夫人家族らが固い表情で私達を迎えてくれた。つらい再会であった。

荷を各々の部屋に置き、夕食をすませた後、ホテル応接室にて事故と捜索の状況を吉田から詳しく説明した。



4. トレッキング隊行動記録 ——宮崎捷二・河合武臣

(1) 行動の概要

トレッキング隊は、後発隊とともに7月21日に成田を出発。29日にBC入りし、8月5日にBCを離れるまでの間と、8月17日に救援・連絡隊としてアクス入りし、同28日帰国するまでの間は登山隊本隊と一緒に行動をとった。

7月27日からの本隊としてのキャラバン開始以降、コース途上および幕営地周辺の植物観察・撮影、BCでは星座を中心とした天体写真撮影等も行った。植物標本については採取は許可されず、残念ながら持ち帰ることはできなかった。植物写真では、高山植物が主であるが、その他を含めて約130種ぐら

撮影した。強い紫外線、強風や低温、また乾燥のためか、小型化やトゲや毛の多いものサボテン化など奇形した種類が一部に観察できた。

天体撮影では、満天の星空の中で、固定撮影であったが、北斗七星、カシオペア座、ペガサス座、アンドロメダ座等を撮影。R径4cm 20倍で、アンドロメダ大星雲が中心の明るい星々とまわりに広がる星々がくっきり見え、日本の大都市でのR径20cmで見るとすばらしい見えばえであった。BCでみんなで土星を見たのは、よい思い出になった。

当初の予定では、BCからアクスに戻って後、中国登山協会の助言を受けてトレッキングコースを設定することになっていたが、体力

等と相談の上で「無理は禁物」との結論を得て、やむなく許される期間内の「シルクロード天山南路」の旅に切り替え、カシュガル、ウルムチ、トルファンを巡った。

以下、トレッキング隊の行動の概略を示す。

(2) 本隊との行動

7月29日 <トレッキング隊BCに到着>

7月30日～8月4日

BC及びその周辺にて植物観察・撮影、天体写真撮影。デポ地までの荷上げの援助を行う(宮崎は7月30日～8月2日、BC～C2間を往復)。

8月5日 <BC→幕営地>

10:44—トレッキング隊の河合・宮崎は、堀井ドクター・森下事務局長・アリキン通訳・馬方(馬3頭)と共に、登山隊の登頂成功を祈りつつBCに別れを告げる。17:05～17:16枝沢といえど水量多く、この時ばかりは馬にまたがり渡渉。17:30頃、3100m地点(7/28の幕営地)通過。20:00—通称“大きな玉ねぎ”2600m(7/27の幕営地)通過。もう9時間以上も行動しているので、先頭はそろそろ止まるかと思えどその気配なし。一体どこまで、歩く者の身にもなってみよ。21:10—丸太小屋2400m通過。23:14—幕営地着、往時ヨーグルトを馳走になった所だ。この日の行程は、休憩も含めて12時間50分も歩くはめになった。おまけに濁った水しか手に入らない。怒りが込み上げてきた者多し。

8月6日 <幕営地→アクス>

13:35—幕営地発、15:00—2100m地点着。予定の2台のうち張氏のジープがまだ着いていない。2時間も待たされたが西瓜とナンで心静まる。親切にしてくれた馬方のトゥデーと別れの握手。17:23—アクスへ向け出発。20:18—アクス賓館着。湯シャワーでなげりゃ泊まらないと、すったもんだの筆談でやっと湯が出ることを確認し落ち着く。

(3) カシュガルに向う

8月8日 <アクス→カシュガル>

8:05—河合・宮崎まだ暗いアクス賓館発、森下氏はまだ寝ている。9:10—長距離バスターミナルよりカシュガルへ向け出発。おんぼろバスの中、子供達の仕草がせめてもの退屈しのぎ。10:35—アチャル付近にて朝食。途中舗装道路工事のため、道なき道の砂漠の中を砂ぼこりを上げて迂回したり、数度のエンジントラブルを直しつつ進む。17:23—サンチャーフウ付近にて昼食、20:20—アトースにて小休止。いい加減に着いてくれよだ。

22:07—喀什バスターミナル着、重い足を引きずりキニバウ賓館に落ち着く。ツインがとれず野戦病院のごときドミトリ、おまけにシャワーも終了だ。素泊り4元(132円)。

8月9日 <カシュガルにて>

11:40—宿舎を変えるべくキニバウ賓館を出る。街には馬車・ロバ車の客引きが多い。2人で10元というのを粘り抜きガスライターと3元にさせた。13:20頃カシュガル賓館に投宿。当初は長距離バスでトルファン入りを考えていたが、暑さと渴きと長さで振動との戦いを回避し、ウルムチへの航空券を手配。

8月10日 〈カシュガルにて〉

カシュガル賓館前より馬車をチャーターしアバホージャ墓(香妃墓), エイティガール寺院見学。街の衣類・布類バザール, 職人バザールを歩く。日本製ネックチーフを買わされるところだった。

8月11日 〈カシュガル→ウルムチ〉

10:24—カシュガル賓館よりタクシーにて空港へ。12:18—カシュガル空港発, 13:49—ウルムチ空港着。華僑賓館が満館にて紅小賓館に投宿。長距離バスターミナルにてトルファン行き切符を入手。

(4) トルファンへ

8月12日 〈ウルムチ→トルファン〉

8:05—紅小賓館発, 9:10—ウルムチ長距離バスターミナルよりトルファンに向け出発。左の車窓に雪を頂いたボゴダの山脈がついて来る。右には17輛連結の列車が機関車2重連で走る。11:22—パイヤンホー付近で朝食休憩。河合が買い込んだ紡錘形の西瓜を, バスの中で食う。14:06—トルファン着。トルファン賓館の7人部屋のドミトリーに落ち着く。ブドウ棚のトンネル歩道が陽を遮ってくれる。つまみ食い15元の罰金とある。

8月13日 〈トルファンにて〉

賓館前で日本人ばかり13人でマイクロバスをチャーターし, 名所・旧跡を巡るべく8:06出発。午前中アスターナ古墳群(3~8世紀に造られた高昌国貴族の墓), 高昌故城(漢から明の初期まで栄えた高昌国の城), ベゼクリク千仏洞(6~14世紀に造られた石窟寺院), 午後は交河故城(漢の時代, 車師前部

の都城), カレーズ, イスラム寺院, 蘇公塔を見学。途中の火焰山中でガス欠, バスを押ししたり, 大幅遅れの帰着に全員怒り1人20元を15元にさせる。夜は賓館の中庭でのウイグル族の踊り(日本の雅楽のルーツ)を覗く。

8月14日 〈トルファン→ウルムチ〉

バスを待つ時間近くの活気あるバザールを歩く。13:09バスでトルファンを後にする。18:24ウルムチの二道橋バスターミナル着。15分程歩いて新疆華僑賓館に投宿。

8月15日 〈ウルムチにて〉

天山山中で撮影した植物の鑑定にも使えるからと, 市内バスを乗り降りし, 植物図鑑を求めて書店を数軒回れど入手できず。中国登山協会をやっとのことで探し当て訪問。通訳のヌル氏に再会。

8月16日 〈ウルムチにて〉

この日は植物図鑑入手のため, ヌル氏が書店を案内してくれることになっていたのだが。11:00—中国登山協会の杜氏と通訳のヌル氏より, 「登山隊の3名が行方不明」の情報を得る。直ちに今日以降のトレッキング隊の行動を取りやめとし, アクスへの航空券の手配をお願いし, 出発準備を整える。

8月17日 〈ウルムチ→アクス〉

ヌル氏が車で送ってくれる。彼はこれからK2日本登山隊に加わるのだという。9:33ウルムチ空港発, 12:00アクス着, 12:38アクス賓館着。永易より遭難状況報告を受ける。

5. 救援隊活動報告

森下 市朗

8月15日(水)

22:00—中国, アスクの永易より森下宅へ以下内容の国際電話入る。

- ① 8月12日 10:00より, C3の西堀, 井上, 伊東との交信不能となる。
- ② 8月13日 C2から吉田, 吉見の2隊員がC3へ搜索に向かう。

17:00—C3付近に到着。搜索。

クレバス, 大規模な雪崩の跡があり, 天幕, 装備, 人影等発見出来ず。行方不明, 遭難を確認す。

5800m地点にビバークする。

8月14日 C3付近より下を搜索しながら, BCへ下る。

- ③ 8月13日 夜, C3, C1, BC協議の結果, 8月14日永易を, 救援依頼及び連絡に下山させる。
- ④ 西堀, 井上, 伊東の家族に連絡し, 現地に来られるかを聞いて欲しい。氏名, 年齢, パスポート番号等を連絡されたい。

通話の状況悪く, 以上の点のみ確認, 不明の点多々有るも, 「次回2時間後」の交信とする。

留守本部平井, 総隊長大野, 副隊長山田, 山森, 磯村, 等に連絡。

- ① 情報が少ないため, なんとかBCと連絡を取らせる。中国側の連絡先の確認を

する。

- ② トレッキング中の河合, 宮崎をアクスへ向け, BCとの連絡に当たらせる事とし, ウルムチへFAXを手配。入らず。
- ③ 大学へは, 電話連絡が付かないため, FAXを手配。
- ④ 家族への連絡。

8月16日(木)

0:50—中国, アスクの永易より森下宅へ以下内容の国際電話が入る。

- ① 8月14日 永易下山時の状況。吉田, 吉見, 5800m地点にてビバーク, ~C2へ。高松, 田村, C2~C1~BCへ。片岡, BCにて待機。永易, BC~2100m~アクスへ。救援の要請。行方不明の3名を除き, 6名は無事。
- ② C1~C2, 氷河の状況不安定のため, 危険多し。ルートは日々変化, 変更している。
- ③ 中国登山協会(CMA)の対応。(救援要請に対する)
 - (1) 8月16日 BCへ, 機動警察5名入山の予定。同夜より, BC~アクス, 無線開局の予定。
 - (2) 8月16日 要請中のヘリコプター出動予定。
 - (3) 8月17日 20~30名の救援隊入山予

定。

(4) BCは8月20日に撤収の予定。

- ④ 中国側連絡先は、アクス友誼賓館。
- ⑤ 留守本部（日本側）の要望、状況を伝える。
- ⑥ 8月16日 夜、BC、救援状況等の電話連絡が来る。

回線の状況悪く（2～3回交信途絶える）以上にて交信終了。国内の各位に電話連絡。

8月16日 夕刻より、大学内にて、対応を協議することとする。

10:00—大学学長室にて学長他大学関係者と以下を行う。

- ① 経過説明。
- ② 大学内に対策本部を設置。
- ③ 横浜市国際室を通じて、外務省、大使館、等に連絡。
- ④ マスコミに対する対応を協議。記者会見等。
- ⑤ 大学側の連絡担当窓口の決定。

11:45—ウルムチCMAへFAXを送信する。ウルムチCMAの名刺に記載のTEL、FAXの番号は不通。番号を調べ直して、やっとながる。

00186—991—78365

旅券事務所へ旅券の緊急発行、中国大使館へVISAの緊急発行の依頼連絡及び航空機の予約、航空券の手配を行う。

家族への連絡、出国手続きの確認をする。緊急遭難対策会議の連絡。

15:00—ウルムチの河合より連絡が入る。河合、宮崎、ウルムチよりアクスへ向かうと

のこと。

18:00—大学学長室にて緊急遭難対策会議を行う。

出席者：山田、松田、森下（市）、山森、平井、磯村、中島、木内、鈴木、森下（純）、学長、学部長、事務局、学生課長、山岳部長。

- ① 経過説明。
- ② 救援隊の派遣。

現地の状況の把握、情報収集、連絡。

隊員の安全確保、収容。

中国登山協会等との折衝、事後処理。

森下事務局長、平井留守本部長、平塚山岳部長、西堀家2名、伊東家3名、井上家は待機。

8月18日（土）JAL795にて上海まで、8席確保。以後未定。

旅券、VISAの取得を8月17日中に行う。

- ③ 留守本部長（日本側の連絡事務所）を山森希典財務顧問とする。
- ④ 8月17日（金）市政記者室にて記者発表を行う。
- ⑤ 緊急対策資金は、森下事務局長よりの借入にて充当する。
- ⑥ 会員は、留守本部長の業務を補佐し連絡にあたる。

8月17日（金）

アクスよりの電話連絡、入らず。日本よりの電話もつながらず。

10:00—市役所市政記者会見室にて新聞、TV記者発表及び会見を行う。

出席者：松田総隊長代理、森下事務局長、総務課長、学生課長。

救援隊員、旅券、VISAの取得。

15:00—ウルムチCMA（？）より未確認情報が入る。

- ① シンチャン、ウイグル省人民政府が16日、ヘリコプターに依る捜索を行った。
 - (1) 5800m地点、何も発見出来ず。雪崩の跡を認めた。
 - (2) 5400m地点、2名がC2～C1へ自力で下山中。
 - (3) 4500m地点、2名がC1～BCへ自力で下山中。
- ② 8月19日 BC撤収、21日アクス到着の予定。

大学にてTVのインタビューを受ける。

行方不明の3隊員の写真を焼き増しして、市広報室よりマスコミ各社へ配布。

救援隊の行程について、ウルムチへFAXを入れるも返事無し。アクスへ電話を申し込むも通ぜず。

ウルムチCMA、張氏へ電話接続、救援隊員名簿を伝える。宿の手配を依頼。航空券復路はOPENとする。

上海、ウルムチ、アクスへの航空機の予約座席の確保できる。

15:30—CMA、北京日本大使館より連絡入る。

8月13日 C3付近でビバーク中に表層雪崩に遭遇。2名重傷、BCとの交信で確認。

16日 負傷の2名をヘリにて収容、病院へ収容した。他の2名は自力でBCへ下山

中。永易は、ヘリにてBC～アクスへ戻る。他の5名は、BCに無事入っている。

17:30—救援対策資金400万円調達する。

22:00—アクスの河合、宮崎、永易より山森宅へ連絡入る。

- ① 中国側の救援活動は、空と陸から行われた。
- ② 氷河上は雪崩多発し、ヘリ着陸不能。
- ③ ヘリにて、C3上空を30分捜索するも、一切発見出来ず。
- ④ 協議の結果、16日夕刻を以て、全ての捜索を打ち切る事とした。
- ⑤ BC撤収、19日を20日としたい。22日アクス到着。

23:00—ウルムチへ以下内容のFAXを送信する。

- ① 救援隊、19日アクス到着予定。
- ② BCと無線交信まで、20日のBC撤収はペンディングとする事。
- ③ 家族がBCへ入りたい為、ヘリの出動、チャーター要請を依頼。

23:00—探検部OBより以下内容の要請。

探検部より救援隊第2陣を派遣したい。経費は自費負担でも現地で手伝いをしたい。

山森留守本部長、総隊長、事務局等と協議するよう指示。

8月18日（土）

救援隊 森下、平井、平塚、西堀夫人、塚田（西堀義弟）の5名出発する。

成田—上海—ウルムチ19:30着。

23:15—ウルムチ華僑賓館にて、ウルムチCMA張副総経理等の訪問を受ける。

中国側の対応、搜索活動について報告を受ける。

① 8月14日 20:00—タカラク〜アクスよりウイグルの責任者へ遭難、救援依頼の第1報が入る。

② 同日、自治区政府、共産党、登山協会、軍、警察の代表者にて対策本部を設置。

③ 15日 車両、馬にてBCへ警察隊搜索に入山。

④ 16日 北京の指令により、カシュガルの米国製の空軍のヘリコプター2機アクスへ到着、雪崩の誘発を避けるため1機にて搜索に出動。12:00—5400mにて2名、4500mにて2名を発見。5800m付近を搜索、何も発見出来ず。氷河上は風が強いと急傾斜のために着陸不可能。4500m(C1)に着陸。積雪1m。日本人2名を収容、BCへ下ろす。

5400mの2名は交信の結果自力下山を希望、アクスの責任者も同意す。

⑤ 17:00—ヘリコプターによる第2次搜索。C3(5800mの3名)の天幕、装備、隊員等発見出来ず。積雪多い。

日本人2名同乗。19:15—アクスへ戻る。

⑥ 19日BC撤収(CMA)、20日BC撤収(永易)予定との事。

0:35—ウルムチ華僑賓館にて、ウルムチCMA張副総経理、バズリ、マムティ(CMA)氏より報告を受ける。ヘリにて搜索をし

たウイグル人は田部井隊に同行し、チョモロンマに登頂した人物とのこと。

① 8月14日夜連絡を受けた。15日朝出発、ウルムチ、アクス17:30

② 軍、警察27名は、15日朝、アクスを出発。

③ 16日 11:30—アクスよりヘリにてトムールへ。

④ 第1回、搜索の状況。

(1) BC、4800mにて2名、5200mにて2名を発見。

(2) 積雪多く、風強いとため、ランディング出来ず。

(3) C1にて、高度1mのホバリングにて、2名収容BCへ降ろす。

⑤ 第2回、搜索の状況。16:00

(1) C3付近、5800mを、高度10mのホバリングにて搜索するも、なにも発見出来ず。

(2) 日本人2名同乗。

(3) 5800m付近は雪崩が多い。今年は特に86年にくらべ積雪が多い。

(4) 状況をアクスに報告、アクスより「探せ！」の指令あり、30分搜索。

⑥ 中国側の搜索隊は、搜索を打ち切り、全員アクスに下山。

⑦ 16日 PM、責任者と共にアクスに戻る。

⑧ 18日 夜、ウルムチに戻る。ホテルに報告に来た。

⑨ 現在、BCには、日本人5名無事。

8月19日(日)

留守本部の山森へ電話、CMAの報告を伝

える。

PM、ウルムチよりアクスへ。

アクス賓館にて、河合、宮崎、永易の3隊員と合流。以下の報告を受ける。

〈8月12日〉 交信不能、AM、交信を試みる。

田部井C2より3名の姿は確認出来ない。吉見、高松の2名、BCよりC2へ。

〈8月13日〉 吉田、吉見の2名にて、C3搜索。高松、田村の2名にて、田部井C2よりC3偵察、ルート指示。

氷河の様子が変わって違っている、雪崩の跡多数あり、名前をコールしながら搜索。天候悪化、ガスのち雪、視界効かず。C3付近は、ブロック雪崩の跡と思われる雪塊多数と、クレバスが開き、3名の姿、装備、テント等、一切発見出来ず。遭難を確認する。吉田、吉見は下山不可能なためビバークする。

17:30—中国人連絡官の高氏、救援依頼連絡に下山。

〈8月14日〉 永易、連絡のため下山。

〈8月15日〉 永易、アクス着。中国側に救援依頼。日本へ連絡。

〈8月16日〉 永易、アクスより救援隊のヘリに同乗、搜索へ。

C2の吉田、吉見は自力下山。C1を撤収し、C1の高松、田村を収容しBCへ。第2次搜索にて、5800m、C3付近の写真撮影を行う。何も発見出来ず。空、陸全ての搜索を打ち切る決定がされた。

〈8月17日〉 河合、宮崎ウルムチより到着。アクス賓館へ宿舍変更。

北京日本大使館より連絡。誤報の訂正、日本よりの救援隊の連絡。NHK、朝日新聞よ

り電話取材を受ける。

夜、留守本部の山森より電話、救援隊の日程確認、現地状況を伝える。

〈8月18日〉 特に動き無し。

日本大使館に連絡、家族の為の、ヘリ要請依頼、事務処理等についての相談。アクスのTVのニュースにて、遭難について、搜索の模様等、放映される。

〈8月19日〉 日本大使館へ、ヘリの件にて連絡。 以上

* アクスCMAの張氏よりの報告は以下のとおり。

① 8月14日 夜、遭難の連絡を受ける。

直ちに、自治区政府と共産党に連絡。

② CMA、自治区政府、自治区共産党にて、救援組織結成される。

③ 地区最高長官謝氏が責任者となり、救援の方法、動員等について討議。

④ 15日 5:00 第1次救援隊をつれてアクス出発。

⑤ タカラクにて、永易と出会い、状況報告を受けた。タカラクに前線本部設置。

⑥ 永易を、アクスの陸上指揮部へ案内。

⑦ 15日 17:00BCへ向け出発、16日夜到着。武装警察4名。

⑧ 16日 BCにて、ヘリと合流。

⑨ 15日 9:00 第2次救援隊5名出発。武装警察。

⑩ 搜索打切りの指令により救援隊下山、19日アクス着。

⑪ 謝氏、18日アクス着。戻る前のBCとの交信で、全員元気とのこと。

⑫ 医師5名を含む救援隊は、19日、15:00解散した。

⑬ 張氏とBCとの打合せ事項。

8月20日 BC撤収。張氏タカラクの受入れ準備。

BCには、要求の通り、16頭の馬が入っている。

⑭ 武装警察の人員構成については組織が異なるのでわからない。

⑮ C2はそのまま留置、C1は撤収。

以上

8月20日(月)

11:00—アクス賓館会議室。

中国側救援組織の代表者の方々の報告を兼ねた弔問を受ける。以下はそれぞれの代表者からの挨拶の要旨。

- ① 捜索は空から、陸上部隊は事務、実務で、タカラクにて待機していた。
- ② 19日 救援隊は、全員下山した。
- ③ 19日 夜、救援組織は任務を終え、解散した。
- ④ この度の事故につき、心からお悔みを申し上げます。
- ⑤ 日中友好の為、3名の意志を継いで、再度の来訪をお待ちしています。
- ⑥ アクスの名所、旧跡等を観光して、心を癒して下さい。

踏査の会を代表して森下事務局長が挨拶する。天山計画の経緯、遭難の報に接して、中国側の対応に対する謝辞、捜索打切りが残念、遺族をBCまでヘリで連れてゆきたい、今後の協力方の要請、等。

BCより下山した後、追悼式を行う、との通告を受ける。

登山隊、本日20日アクス到着とのこと。

13:25—追悼式について打合せ。

会場 アクス賓館1F会議室。

主催 中国登山協会。

PM 留守本部の山森へ電話、追悼式の件を連絡する。

救援隊第2陣の日程、23日到着の予定。

16:00—日本大使館より電話が入る。

ヘリについては、解放軍の決定を待っている。追悼式が行われる旨連絡する。

行方不明になった3名の失踪証明書の発行を要請する。

17:45—追悼式次第について打合せ。

- ① 開会の辞
- ② 3名に対し、黙禱1分。
- ③ アクス地区CMA 林首席 追悼の辞。
- ④ 中国登山協会 陣副首席 追悼の辞。
- ⑤ トムール峰登山隊代表 平塚教授 挨拶。
- ⑥ 遣族代表挨拶 西堀夫人。
- ⑦ 告別 三礼。
- ⑧ 閉式の辞。

日時 8月21日、午後の予定。

CMAより3名の記念碑(木製)を作成した、ヘリにてBCに建てたい。明年には、正式な記念碑をBCに建立する予定である。

日本側の式辞の原稿を作成し、通訳へ。

追悼式の供花の手配を依頼する。

22日発の平塚教授の航空券の手配を依頼する。

18:20—森下、平塚、平井、張女史。

公安警察副署長のアルマスト氏をアクス第一人民病院に見舞う。氏は救援出動のおり、交通事故にて、右足骨折の為入院中。全治3

ヶ月とのこと。

21:00—BCを撤収し、片岡、高松、吉田、田村、吉見、無事アクス賓館に到着。

23:00—吉田より、遭難、捜索について、報告を受ける。別項活動報告の通り。

全体報告を受ける。別項活動報告の通り。

8月21日(火)

休養、洗濯、記録の整理等を行う。

入山中の公式記録の取りまとめ、作成を登山隊員にて行う。

留守本部の山森氏へ電話、事務処理、帰国スケジュール等打ち合わせをする。

18:00—追悼式、アクス賓館にて開催される。

中国の関係者約30名出席。VTRに全て収録。

ヘリの返事が来ないため、飛べない事を想定し、22日に徒歩、一泊にて入れる所まで、西堀夫人、塚田、平井、吉田の4名にて入山することとする。車と馬の手配をCMAに依頼する。

19:00—帰国のスケジュールについて、ウルムチCMA張女史に依頼する。

24日 アクス～ウルムチ、25日 ウルムチ～北京の航空券の手配。26日以降の北京～東京、航空機予約を依頼する。

ウルムチCMA張女史より、西堀夫人と同道したいとの申し入れあり、23日夜までに必ず戻る事を条件に、通訳アリキン氏と同行をお願いする。

8月22日(水)

10:30—西堀夫人、塚田、平井、吉田の4名と、張女史、高氏、アリキン氏等入山。

平塚教授出発。(ウルムチCMAにて記録を留守本部へ向けてFAXする)

隊荷のカートン整理、パッキングリストの作成を行う。

18:40—救援隊第2陣、小島、三浦の2名到着。

8月23日(木)

CMAの提案でキヂル千仏洞見学。5名。記念碑(木製)ホテルへ届く。BCまで入山不可のため、明年までCMAにてお預かり願う。

明年正式な碑を作製して3900m地点に設置するとの事。

0:30—西堀夫人、塚田、平井、吉田の4名と、張女史、高氏、アリキン氏等帰着。

8月24日(金)

11:00—西堀夫人、塚田、宮崎、永易がアルマスト氏を見舞う。

16:00—アクス関係者へ、お礼の挨拶。

EPI、ガスボンベ、ヘッドをアクスとウルムチのCMAへ寄贈する。

アクス関係現地払い分を支払う。

22:00—アクス発。

0:40—ウルムチ友誼賓館着。

8月25日(土)

帰国の航空券手配に関し、CMAより返事が無いため、再度依頼する。

留守本部の山森と電話にて情報交換する。

片岡隊員の母危篤、至急帰国されたい。

日本にて、航空機の手配を行っている。16:30FAXを送った。

9月1日伊東宅訪問，2日井上宅訪問の予定。(FAX)

航空機の予約状況。(FAX)

ウルムチCMA主催による，歓送晩餐会に招待される。

ウルムチCMA関係の請求書を確認，現地払い分を支払う。

8月26日(日)

10:00—ウルムチ発。

13:00—北京着。東方飯店へ(森下，片岡を除く)

16:30—北京発。JAL782，森下，片岡。

20:00—成田空港着。山森留守本部長と打合せ。

8月27日(月)

〈北京〉



AM:日本大使館へお礼の挨拶に訪問する。

夕方:CMAの招待にて歓送晩餐会。

〈国内〉13:00—大学学長室にて

出席者:学部長，森下，山森，平塚，朝比奈他。今後の対応について協議する。

- ① 救援隊の活動報告。
- ② 本隊帰国時の受入れについて。
- ③ 28日に記者会見を行う。
- ④ 30日PMに，天山踏査の会拡大役員会の開催準備。
- ⑤ 伊東宅，井上宅訪問の日程，人選等。

8月28日(火)

本隊帰国。(北京→成田)

18:00—市政記者クラブにて記者会見を行う。森下，山森，平塚。

6. 中国側の救援協力活動

永易 量行

中国側の救援活動が開始されたのは，連絡官の高氏がタカラクに到着した8月14日午後10時頃である。タカラクからの無線連絡で遭難の報を受けたアクスでは，アクス地区中国共産党委員会が主体となって救援活動に関する会議が緊急召集され，救援隊の総指揮官に韻同委員会書記を任命し，政府主導の救援活動が展開されることになった。

韻氏を補佐するのは同委員会のカハル専員，尚秘書室長，それにアクス登山協会主席を兼任する林副専員である。この救援組織は即座に中央政府とヘリ出動の交渉に入るとともに20数名の公安警察官の組織する陸上の救援隊を編成し，15日早朝には韻氏自身が，林氏と共にこの救援隊を引き連れてアクスを出発した。これに先んじて，アクス登山協会の張主任と臨時通訳の任氏は，打ち合わせなどで一睡もしないままアクスを発ち，午前8時にはタカラクに到着した。

永易が15日10:00にタカラクに到着すると，ここで事情説明と打ち合わせを行って，張，高の両氏及び馬方とその馬は12時にBCへ向かって出発した。永易もタカラクを去るのと，入れ違いに韻氏等救援部隊が2100m地点に到着して，ここに前進本部を設置し，更に，4名の公安警察官がまずBCへ向かって同本部を発った。

アクスに到着した永易は午前中に既にウルムチよりアクスに着いていた陳新疆登山協会主席と，王同協会顧問等の出迎えを受け，そのまま彼等とともにカハル氏と会い，全面的

な可能な限りの協力の申し出をうけた。

夕刻になってヘリの出動要請が受諾されて16日の朝アクス空港に到着することになった。又，アクスに，ヘリに同乗して捜索に向かう2名の登山家が呼ばれていた。この2名は1986年の女子登山クラブのトムール遠征の際の協力員であったマムティ氏とバズリ氏であった。

《ヘリコプターによる捜索》翌16日の11時半頃に，カシュガルからヘリが到着し，第一回の捜索に向かった。同乗したのは，新疆登山協会顧問の王，任，マムティ，バズリの各氏と永易である。約30分でC1上空に到達してC1より100mの地点に半着陸し，C1を撤収していた高松，吉見より吉田，田村の無事を確認し，高松，吉見を同乗させてBCに一旦着陸する。その後は上部で捜索中の吉田と打ち合わせて，現場確認のため再度5800m付近の上空からの捜索及び写真撮影を行うことにした。このため実際に現場を把握している吉見を同乗させることとする。ヘリは給油のため一度アクス空港へ戻った後，5800m付近を約30分間捜索したが，何も発見できなかった。

この日，陸，空全ての捜索活動を断念した。

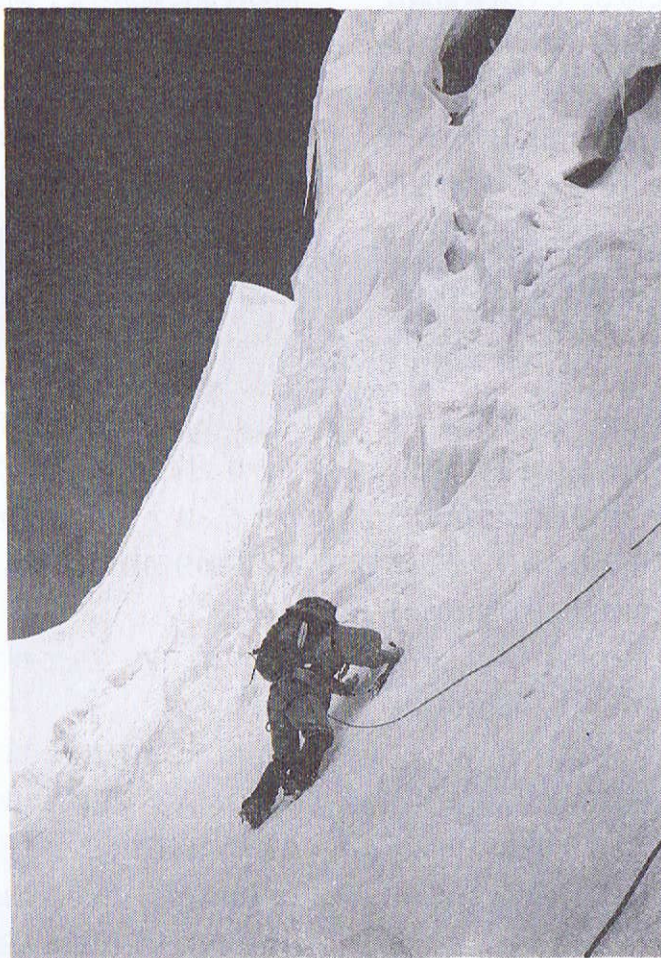
なお，この日昼頃に張，高の両氏及び馬方はBCに入り，続いて21時には4名の救援隊もBCに到着した。

一連の救援，協力活動に関して韻氏は，これが両国の友好関係と人道的な立場に基いた

ものであることを再三にわたって強調し、実際の費用も非常にわずかであった。中国側が負担した経費もかなりあったと伺っている。

17日に入ると中国側は、救援部隊の下山と家族等の受け入れ準備にとりかかった。ヘリはウルムチへ帰った。18日成田を発った西堀夫人等5名は新疆登山協会による手続きで19日、アクスにスムーズに到着した。20日の登山隊の下山を待って21日には、新疆、アクス両登山協会によって3名の追悼式がアクス賓館で行われた。

また、中国側の好意で仮の碑を作成した由伝えられていたが、これが大変立派なもので



あったので隊員達は一様に驚いた。

ところが、来年、さらに正式なものを石で作る、との言葉に再び驚き、ただただ感謝するのみであった。

22日に、新疆登山協会の張女史等中国側スタッフ数名も付き添って、西堀夫人等3名が二日の行程で馬に乗って3100m付近まで行ってケルンを積み上げてくることができた。

24日になって私たちはアクスを発ち、ウルムチ泊。ウルムチでは新疆登山協会の招きで夕食会が開かれた。北京に到着したのは26日である。北京でも登山協会主催の夕食会を開いていただいた。

7. 国内留守本部の対応

山森 希典

(1) 第一報を受ける

遭難の報を8月15日深夜に接し、16日大学に残留隊員及びOBが参集した。断片的な現地報告(永易)のなかで事実関係・現状把握の不十分のまま8月18日に救援隊及び遭難者の家族の現地への出発を決めた。

これを受け、国内的には情報の一元化と対現地支援の指示、遭難者の家族・現地隊員の国内家族への連絡(情報提供他)及びマスコミの窓口一本化の受け皿となることであった(これは、市、大学、その他後援団体への迷惑をかけないためにも絶対的必須条件であった)。

このため、本部に求められるものは、昼夜分かたぬ電話・FAX交信可能であること、情報を適切かつ時に判断し、実務処理できる能力が兼備されていなければならないことであった。しかも中国及びCMA並びに直近の新疆ウイグル自治区事情の理解できることが望まれた。この要請により、先に帰国していた国内残留隊員山森希典がその任に就き、昼間は山森会計事務所、夜間は自宅を当て、8月30日本部を解散するまで総力を挙げて対応することになった。

本部機能を次の7項目に分け、各セクションに責任者を置き職務分担をお願いした。

1. 山岳部とOB関係—中島満山岳部OB
2. 探検部とOB関係—鈴木元章探検部OB

3. 現地隊員と探査会及び踏査の会関係—磯村康博探査会・事務局員
4. 遭難者の家族・大学・踏査の会幹部及びマスコミ関係—山森希典踏査の会財務顧問
5. 第1次・第2次救援隊派遣の手配全般—同上
6. 現地支援—同上(CMA, 北京大使館 日本外務省との連絡, 渉外及び指示)
7. 帰国隊員の手配全般—同上
8. その他—同上

以上の態勢の中で発足した国内留守本部は、平時のそれとは性格が一変し、まさしく国内遭難対策本部となっていたこともまた、必然であり不可避であった。

本部の対応を第1期(8.17~8.22)と第2期(8.23~8.30)に大別すると前者が救援と情報混乱期、後者が帰国と終取期に区分される。

(2) 救援と情報混乱期 (第1期)

① 8月18日(土)この日の送受信(含FAX)は100件をゆうに超えるすさまじさであった。北京CMA(超建軍氏),ウルムチCMA(桂氏),北京日本大使館(沼田氏,岡田氏),外務省(領事部邦人保護課・浜田氏),旅券事務所(奥沢氏),福岡中国領事館,華聯旅行社,遭難者の家族などと情報収集・伝達や緊急渡航の手続・連絡・指示で前夜よりま

さに忙殺された。また、この間全ての大新聞、TVより取材を受け、遠くは大新聞の福岡支局各社からの攻勢もとどいたほどだった。

8月15日深夜の断片的な永易情報（森下事務局長経由）しか情報のない本部としての基本的な対応を次の3点に絞った。

- (イ) 知り得た情報は全て公開すること。
- (ロ) 救援隊を一刻の猶予を置かず現地に派遣し、現地の生情報を聴取して総合的に分析したうえ後の指示を現地に素早く出すこと及びその円滑化を内外地に根廻しすること。
- (ハ) 遭難者の家族への緊密な連絡と渡航支援及び一部遭難者の家族の要望によりマスコミの取材攻勢から同家族を保護（代理人として）すること。

夕刻、市大の大山事務長（商）経由で山岳部OB木内氏より最初の中国情報が入った。西友グループ関係の中国大陸のパイプによるとのことであった。それは、およそ次のとおりである。

[8月16日ヘリ2機を飛ばした。その1機に日本人2名が同乗した。]

- ①5800m地点 ②何も発見できない、
③ナダレの痕跡あり
- ②5400m地点 C1に向い2名自力下山中
- ③4500m地点 更にBCに向い2名自力下山中
- ④上記4名とは交信できない。自力下山は可能
- ⑤8月19日BC撤収

⑥8月21日アクス到着

ということであった。

この木内情報がほぼ正確であったことが後で判明したが、当時はいろんな情報が飛び込んできた。特にひどかった情報は、北京日本大使館の沼田氏を通じて得た北京CMA（発信元：超建軍氏）からのものであった。それは、前出の4名中2名が重傷を負いアクスの病院に入院したとあった。情報源のこともあり、これを公開した。ただし、本部は、西友グループ情報（木内山岳部OB）の方を信用していた。このことは、大使館沼田氏と、ウルムチまで間近に行った山森の中国分析が正しい判断であると確信があった。つまり、中国の情報網、通信事情、職責機能を日本のそれと同一視しては、対策本部としての機能が果せない事を冷静に把握していた。（本日は山森1人で全てを対応したので疲労こんぱい。終了零時40分であった）

② 8月19日～8月22日

《8月19日(日)》 中島満氏が山岳部OB数人を伴って本部に応援にきた。電話・FAXの送受信も20件以下と激減し、以下日を追ってマスコミの関心も薄れていった。これは留守本部が流した捜索打ち切りの中国CMA情報の公開が効いたためと思われる。

救援出発に当たり森下事務局長より依頼されたヘリコプター要請を北京日本大使館を通じて中国外交部（外務省）に働きかけた（アクスで8月20日森下氏もヘリ要請）。鈴木元章氏も探検部員を伴い第2次救援打合せのため来所。

《8月20日(月)》 山岳部OB1名が応援にくる。夕刻、中国人民解放軍の内部でヘリの

件について、もう少し待つて欲しいとの連絡が北京の日本大使館よりある。ただし、1フライト250万円の費用が必要とのこと。当方は依頼方の続行を強く再要請した。

第2次救援隊2名を本日上海経由で派遣した。

《8月21日(火)》 応援1名あり。現地入り（アクス）した救援隊員2名より以下の連絡があった。

（平井隊員）

- (イ) 本日PM6時より現地CMA主催の追悼会が行われる
 - (ロ) 明日、登山隊員からの詳細報告をFAXで送信する
- （森下事務局長）
- (イ) 8月12日雪崩発生
 - (ロ) 8月13日2名がC3まで行って遭難を確認
 - (ハ) 中国側は8月17日に救援隊(活動)を解散していた。

本部は、これを最終的な公式報告として、再度各方面に伝達した。なお、この時本部より森下事務局長に対し現地CMA・警察よりの失踪証明書の交付申請をするよう指示した。

《8月22日(木)》 本日早朝、北京日本大使館沼田氏より、解放軍は器材調整の関係上ヘリの運航は不可能であるとの連絡あり。目下小型飛行機を検討中なので連絡を待つようとのコメントがあったが、その後何の連絡もなく今日に及んでいる。

(3) 帰国と終収期(第2期)

8月23日(木)

現地よりのFAX（森下事務局長発）の報告をふまえ、大学の要請により「天山踏査の会」の諸問題打合せ会に本部を代表して出席した。

学長、事務局長、3学部長、3学部事務長、総務部長、同課長、学生課長、学生生活正副委員長、探検部顧問、進交会事務局長、山森（本部代表）の16名で次のとおり、報告及び審議がなされた。

- (イ) 経過報告〔総務部長〕
- (ロ) 最新情報の報告〔山森（本部代表）〕
- (ハ) 天山踏査の会の説明〔同上及び探検部顧問〕
- (ニ) 60周年記念事業参加の認識〔同上〕
- (ホ) 森下事務局長の早期帰国要請〔学長、事務局長〕
- (ヘ) 踏査の会に対する支援〔同上（今後とも全面的に支援）〕
- (ト) その他

8月22日～8月24日

現地隊員の帰国の手配に精力的に動くことになった。中国の実情を知るにつけ、全ての手配は本部でやっておかねばならないと考えていた。

夏休み明けのため、日本向けは航空機ラッシュで、手配は仲々困難だった。しかも現地と音信不通の中での手配は想像以上であった。

第1段を華聯旅行社経由で手配し、第2段をJAL（東京・北京のセクション）及び北京日本大使館経由の二方法で重複して便をお

さえた程である。この間、関係者の方には大変ご迷惑をおかけした。これも筆舌に表わせないできごとであった。

8月27日(月)

一足先に帰国した森下事務局長と大学で報告する。大学の事務局長より記者会見の要請を受ける。8月28日(火)に帰国する登山隊員の記者会見への出席を促されたが、熟慮のうえその意にそいかなる旨回答した。また、帰国後の問題については8月30日(木)に緊急会議を開いて決めると報告しておいた。

8月28日(火)

本日登山隊員が全員帰国するので、磯村氏他が成田へ出迎えることになっている。この朝、大学の小泉総務課長の連絡で、16:00より市役所市民局2階の広報室で、共同記者会見を要請された。本部の森下、山森と平塚教授が出席を依頼された。本部より中島満氏の出席をお願いし、同席することになった。

市の広報室において、広報課長より本日帰国する登山隊員の記者会見同席を強く要請されたが、遭難者の家族のもとに一刻も早く駆けつけたいという登山隊員の胸中を重視し、その要請を強く固辞し、記者会見にのぞんだ。

8月30日(木)

大学において13:00より緊急全体会議を開催した。報告事項は、以下のとおりである。

- (イ) 本部報告(8月16日以降) — 山森
- (ロ) 現地救援報告(8月18日～8月28日) — 森下
- (ハ) 遭難報告(8月10日～8月13日) — 吉田

以上の報告のあと、次の決定事項を確認した。

決定事項

- (1) 合同追悼式(無宗教)を9月8日(土)とする。
- (2) 明年現地へ行く(追悼石碑建立)、但し本会とは別組織で行ないたいとの若手登山隊員の提案を承認した。
- (3) 留守本部は本日を以て解散する。

以上のことから、9月1日より従来組織に基づく天山踏査の会として動いていくことになった。

8. 行動表(隊及び隊員)

(1) パーティーの行動表(7月14日～29日)

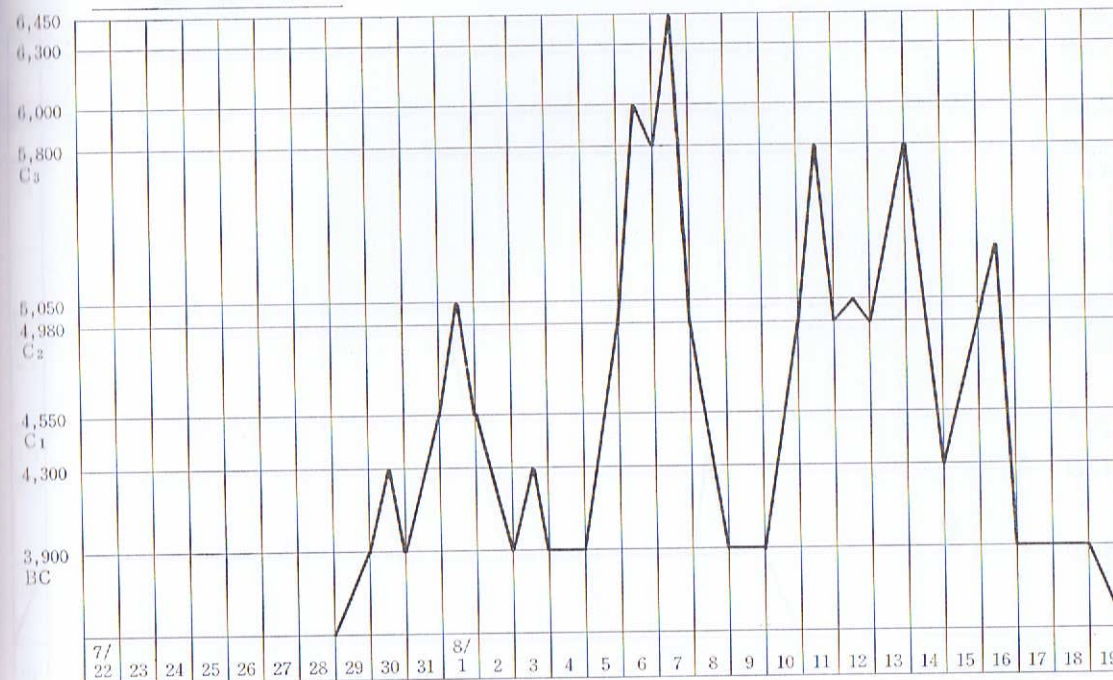
	7月14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	
BC																	
3900m																	
3100m																	
2400m																	
2100m																	
アクス																	
コルラ																	
ウルムチ																	
北																	
成																	
	先発隊	先発隊	先発隊	先発隊	先発隊	先発隊	先発隊	先発隊	先発隊	先発隊	先発隊	先発隊	先発隊	先発隊	先発隊	先発隊	
	吉見	西堀	伊東	山森	後発隊	田村	伊東	吉見	西堀	永易	山森	後発隊	田村	伊東	吉見	西堀	永易
C1																	
4550m																	
テポ地																	
4300m																	
BC																	
3100m																	
2600m																	
2100m																	
アクス																	
ウルムチ																	
北																	
	後発隊	後発隊	後発隊	後発隊	後発隊	後発隊	後発隊	後発隊	後発隊	後発隊	後発隊	後発隊	後発隊	後発隊	後発隊	後発隊	
	永易	西堀	吉見	山森	後発隊	田村	伊東	吉見	西堀	永易	山森	後発隊	田村	伊東	吉見	西堀	永易

吉見敦司

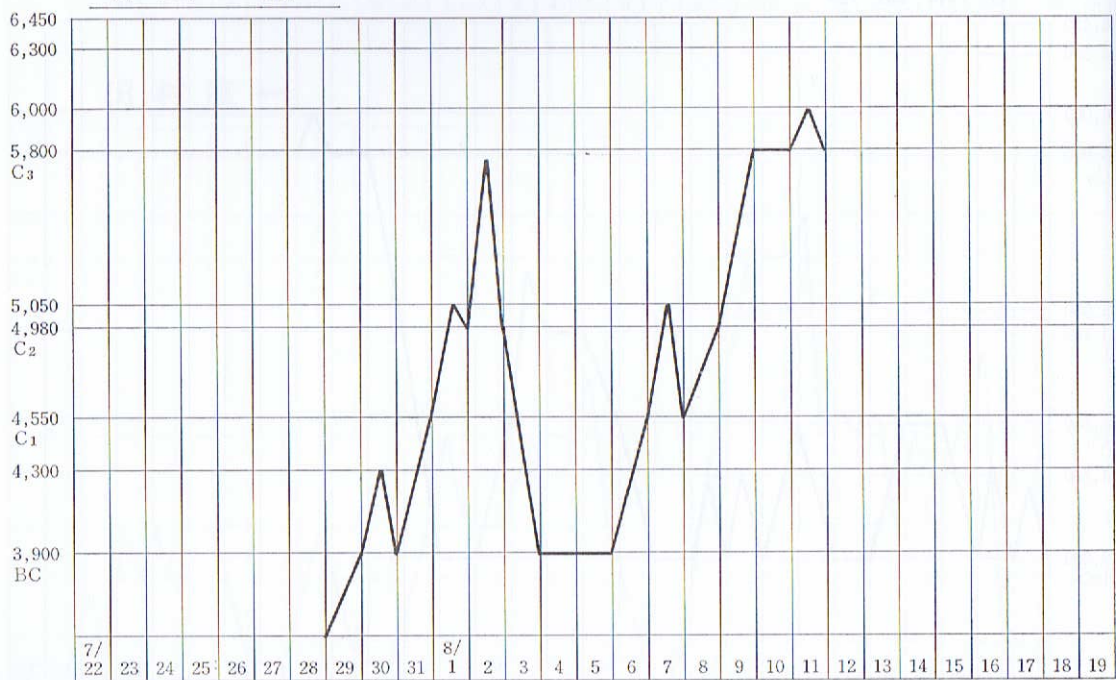
----- ヘリコプター



吉田宣明

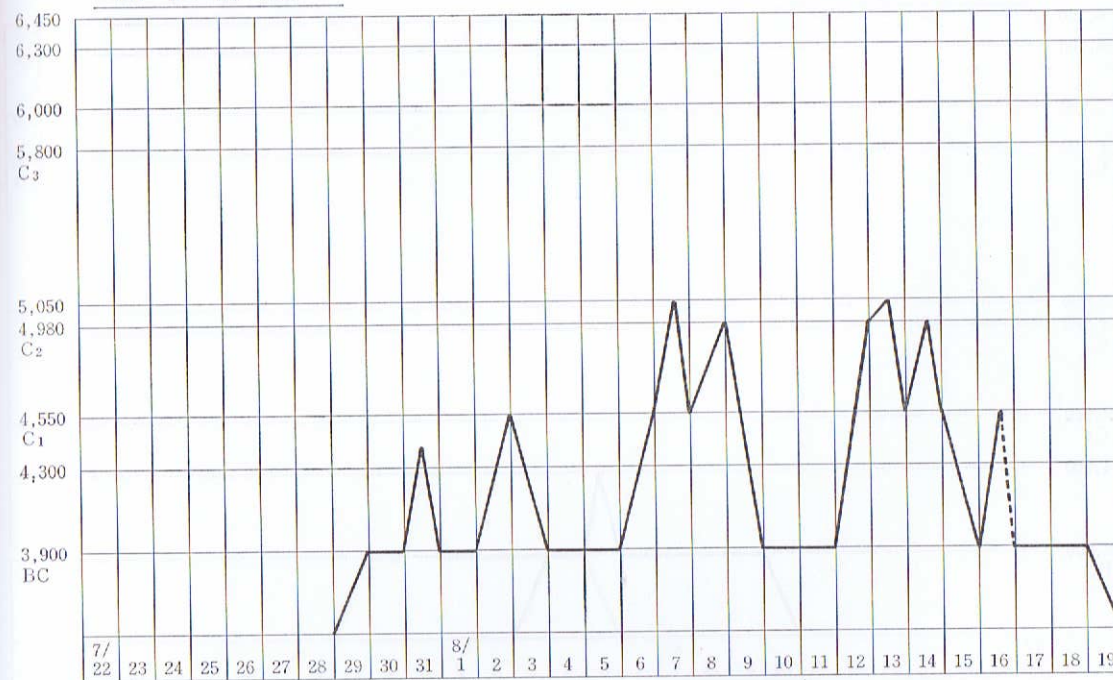


井上 誠

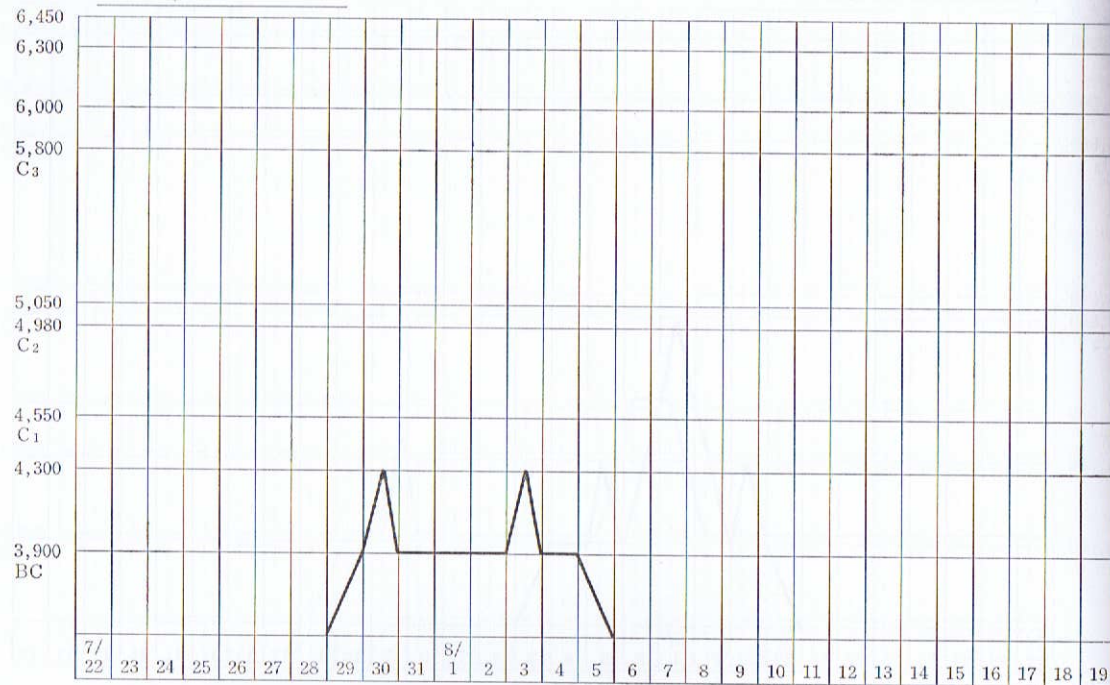


高松康夫

----- ヘリコプター



堀井昌子



9. 帰国後の経過

高松 康夫

8月28日(火) 本隊は2便に別かれて北京より帰国する。登山隊員は成田で合流し、18:20頃磯村他の出迎えの乗用車2台に分乗して横須賀の井上隊員宅へ遺留品を届けに直行する。

8月29日(水) 午後大学に集まり、30日の緊急全体会議(拡大役員会)へ向け、準備する。

8月30日(木) 大学において緊急全体会議が開かれ(別項7.留守本部の対応参照)、以下の事項を天山踏査の会本部(事務局)を中心として取り組んでいくこととする。

- ・遭難隊員のご遺族への訪問・経過報告
- ・合同追悼式の挙行

- ・報告書の作成・追悼文集の発行
- ・救援費用・保険の扱い

(1) 合同追悼式

遭難隊員のご遺族を訪問し、事故の経過、捜索活動、救援活動等について報告・説明を行なう。また、追悼式についての意向を伺い、日程等について了解を得る。

大学側と相談し、大学の協力を得て合同追悼式を9月8日学内にて行うこととし、準備作業にはいる。

9月1日(土) 伊東隊員宅訪問

朝北奈探検部顧問、山田、吉田、田村、吉見、鈴木(元)、三浦、西堀夫人

9月2日(日) 井上隊員宅訪問

森下、山森

9月8日(土) 合同追悼式

場所:横浜市立大学大会議室

時間:午後2時~

参列者:約200名

その後、ご遺族の意向により、個別の葬儀または追悼式がそれぞれ行なわれる。

9月29日(土)~30日(日) 井上隊員葬儀

場所:自宅(横須賀市)

10月10日(水) 伊東隊員葬儀

場所:報恩寺(佐賀市)

10月27日(土) 西堀隊長追悼式

場所:久保山霊堂(横浜市)

(2) 報告書・追悼文集

9月8日の追悼式においてご遺族および関係者へ報告するため、中間報告書をまず作成する。

本報告書は、9月4日第1回編集会議を行ない、中島編集長の下、全体の構成について討議し、執筆分担を決める。刊行は12月下旬を予定とする。

追悼文集については、年が明けてから具体化させることとする。

(3) 救援費用・保険

BC以上の登山隊員は全員、隊の責任において保険加入が義務づけられ、事故等救援に係わる全ての費用は保険金をもって当てる、との申し合せにより、留守本部の平井が保険に係わる事務手続きを行なう。精算終了後、残金をご遺族へお渡しする。

(4) 天山踏査の会の解散

お世話になったCMA、ウルムチ・アクスCMAおよび関係機関・個人等への礼状の送付。ご協力をいただいた機関・団体・個人等への挨拶状の送付。12月に入ってやっと引き取ることが出来た隊荷……。あわただしく3カ月が過ぎる。

報告書の完成、追悼文集の発行、追悼記念碑の建立等の課題を残しながらも、大方の残務整理の目途がついて来たところで、12月24日天山踏査の会の総会兼解散式を行なうこととなる。なお、継続事務については、構成団体である探査会事務局が引き継ぐこととする。

Ⅲ 担当報告

1. 装 備

吉見 敦司

(1) 登攀具

装備は、女子登攀クラブの報告書をはじめ、各登山隊の計画等を参考にさせていただいた。ザイルは8mmと7mmを持っていたが、岩稜登攀がないため軽い7mmを中心に使用した。アイスハーケンは、アイスフォール及び雪原のFIXロープ用に持参したが、フィックス用途には、氷がゆるんですぐにぬけてしまったのが現状。そのためスノーバーはC1～C3上部のFIXロープの固定に有効であった。標識用のポールは、園芸用なので、氷にささらず、石などで固定したが風がふくとすぐに倒れてしまった。ポールの先端に赤布をつけて使用した。

(2) 火気・燃料

ガソリンは中国内で購入した。BCではガソリンコンロ、カセットボンベコンロを、キャラバンとC1以上はEPIを使用するつもりだったが、実際にはBCではカセットコンロのみを使用した。操作が簡単で安定しているので使いやすかった。ただし、風に弱く、火力もあまり強くないのが欠点だったようだ。

(3) 露営具

キャラバン、BCはフライ付きダンロップ、それ以上はエスペースとした。またBC、集会用に8人用テントを設営したが、ほとんど荷物置き場と化していた。中国側のスタッフに対してはそれぞれ民族が違うので、各人に1人用テントを支給せねばならなかった。ハイピーシートの使用はBCのみであったが、降雨の時にカートンやテントにかぶせたり、外で食事をする時の敷物にしたりと非常に使いでがあった。

(4) 生活用具

圧力鍋はBCのみで使用したが、ご飯がたいへんにおいしく食べられた。雑ひもを20mほど持っていったが、重宝し、不足してしまったほどである。ガムテープも足りなくて困った。この二つは非常に使用価値があるので、多めに持って行く方がよかった。カートンの梱包には、PPバンドという、プラスチックのバンドを使用した。これは非常に丈夫で、梱包も簡単で便利であった。馬方たちが、馬に荷をくくりつけるときに使うらしく、これを非常に欲しがり、私たちが使用済みの余り

をさかんに奪い合っていた。彼らは、最新式の装備よりも、ひも類に目がない。

(5) 個人装備

今回は予想していたより、ずっと気温が高く、晴天の日は、C2上部までは、Tシャツ1枚で十分だった。靴は、革靴とプラブーツを持っていった隊員もいるが、ほとんどがプラブーツのみを使用していた。気温が高いので、厚いインナーだと、非常にむれる。BC

上部のガレ場は、運動靴だと歩きにくく、プラブーツで行動した。日中は気温が高いといっても、夜はかなりひえる。このため、C1以上では羽毛シュラフを使用した。ゴーグルはすぐにくもってしまうので、サングラスのほうが使いやすいとの意見が出ていた。また予備も必要だった。日照時間が長いのでヘッドランプはほとんど使用しなかった。その分の電池も不用であった。

(6) 装備一覧表

① 登攀具

品名	メーカー	製品名	規格	計数量	使用量	備考
クライミングロープ	ニュートップ	ナイロンロープ	8mm × 50m	10	5	
			8mm × 100m	6	1	
			7mm × 50m	20	15	
アイスハーケン	モチヅキ	パイプスクリュー	16cm	10	10	テントの固定使用
			20cm	20	20	
			25cm	20	20	
			20cm	10	5	
ロックハーケン	ジョイナー	アングル	14.3cm	5	0	
			"	3	0	
			"	2	0	
			BL	5	0	
スノーバー	エキスパートオブジャパンコブラ		S (40cm)	20	5	
			M (50cm)	30	15	
			L (60cm)	30	30	
ユマール	アッセンダー			6	0	
カラビナ	ボナテ		D型	20	10	
			ワイドD	20	0	
			くの字型	20	0	
シュリング	IBS	補助ロープ	6mm × 10m	1	1	軽いのでアンザイレンによい
			5mm × 50m	1	1	不足
標識棒			園芸用ポール	250	50	氷には向かない

② 火器・燃料

品名	メーカー	製品名	規格	計画数量	使用数量	備考
固形燃料	LOZNA	スイスメタ	20P	20	0	
携帯燃料	ダイサントップ		大	5	0	
アルミボトル	シグ		1.5ℓ	4	2	水筒として使用
注油リング	シグ			4	0	
マッチ	コグラン	ウィンド	2個人	5	1	
ライター			100円ライター	10	10	
ガスカートリッジ	E P I タキタ	GC230W (小) GC500W (大)	カセットボンベ	200	100	
				10	2	
				75	60	
コンロ	ホエブス E P I	625		2	0	燃料としてガソリンを使用しなかったため
		725		5	0	
		BPS		2	2	
		BPSA		4	4	
		パワーブースター		4	4	
		BPランタン		6	6	
		BPランタンマントル		50	10	
		カセットコンロ		3	3	
ガソリン				80ℓ	0	中国で購入

③ 設 営

品名	メーカー	製品名	規格	計画数量	使用数量	備考
テント	エスパー	ダンロップ	6人用	2	2	内張付き
			4,5人用	3	3	〃
			2,3人用	5	3	〃
			4人用	3	3	BC用, 実際には3人しか寝れない
			1,2人用	3	3	中国側に支給
			8人用	1	1	
ツェルト	IBS	S・ライト	2人用	2	0	
マット	IBS	T・マット	3m ²	26	16	
ペグ	シュイナード	T・ステーク	M	60	0	テントの固定はアイスハーケン, スノーバーで行った。
予備ボール	エスパー		6人用	1	1	
			4人用	1	0	
スコップ	シュイナード	Mショベルセット		3	2	
ハイビシート			大	2	2	
			小	2	2	
テントリペアキット			ナイロン	4	0	

④ 生活用具

品名	メーカー	規格	計画数量	使用数量	備考
ビニールロープ			1	0	
たわし	亀の子柄つき		8	2	
			3	0	
圧力鍋			3	3	BCのみ使用
フライパン		26cm	2	2	
まな板			2	2	
包丁			2	2	
ボール			2	2	
ざる			2	2	
フライパン返し			3	3	
さいばし		長短	2	2	
			1	1	
あみ			3	3	モチ焼きに有効
サランラップ		50cm	3	1	
アルミホイール			3	1	
スポンジ			3	3	
ママレモン			1	1	
ビニール袋		45ℓ (10枚入)	10	5	
		30ℓ (〃)	6	3	
		10ℓ (20枚入)	5	2	
トイレットペーパー		100コ入	1	50	
タオル		3枚入	1	1	
洗剤			2	1	
洗濯ばさみ		10コ入	6	6	不足
軍手		1ダース	1	0	
アルカリ電池			900	500	ビデオ等に使用
マジック			3	3	不足
タッパー		大	3	0	
		小	3	0	
ロープ		3mm×20m	1	1	
ガムテープ		25m	5	5	非常に不足した
針金		細太	500g	0	
			〃	0	
ラジオペンチ			2	0	
六角レンチ			2	1	
モンキースパナ		小	1	0	

いしかった。体調が良くないときは朝食にラーメンなんかはあまり食べられないものだが、これらのフリーズドライを入れた野菜ラーメンは食べることができた。また、フリーズドライの納豆も好評であった。

主食はアルファ米、ラーメン、モチとした。モチは石綿付きの魚焼きアミで焼いたのでおいしく食べられた。

その他、好評だったものに缶詰の鮭ふりかけがある。特に隊長が気に入って、「うまいうまい」と独り占めにしていた。

《行動食について》なるべく飽きのこないようにバラエティーに富む内容にした。特に好評だったのは、リッツ、アーモンド、エンゼルパイなどのクッキー、羊かんなどである。

《現地購入食糧について》フルーツ缶詰、酒類(ワイン、ブランディー)、砂糖をアックスのデパートで購入した。卵、にわとり、小麦粉はCMAによって購入済みであった。また、後発隊到着までにキャベツ、玉ねぎ、人参、じゃがいもを用意してもらえるようにC

(5) 食糧一覧表

① 日本からの輸送食糧

(A—非常によく使用した B—良く使用した
C—あまり使用しなかった D—ほとんど使用しなかった)

品名	個数・数量	使用頻度	備考
アルファ米	250コ	A	非常に軽量で味もよい
ラーメン	300コ	B	なるべくくせのない味のものがよい
モチ	500コ	B	量が多すぎた
みそ汁	150コ	B	ブタ汁にも使用
頑張れ玄さん	50コ	D	
カレールー	5コ	A	不足
クリームシチュールー	10コ	A	〃
ビーフシチュールー	5コ	A	〃
レトルトカレー	30コ	A	

MAをお願いした。

フルーツ缶詰は味がイマイチで、あまり評判がよくなく、半分くらい余ってしまった。ワインはととても甘くて、疲れてBCに帰ってきたときに飲む一杯は最高であった。にわとりは馬方の扱い方が荒く、BCに着いたときはすでに死んでいて、ほとんど使えなかった。空気が非常に乾燥しているのので、野菜類のもちがよく、なんと下山の時までもっていた。

(4) 反省

全体的に充実した食糧計画だったと思うが、出発直前になって隊員の数が減ったり、滞在日数が減ったりしたので、数量が非常に多くなってしまった。米などは50kgも余って非常にもったいないことをした。

また、メニューの種類がちょっと少なかったようだ。限られた材料での工夫した作り方を事前に研究しておけば、さらに良いものになったと思う。

品名	個数・重量	使用頻度	備考
レトルシチュー	20コ	A	
レトル中華丼	20コ	A	
さば缶	100コ	C	量が多すぎた
鮭缶	30コ	C	
ツナ缶	100コ	B	量が多すぎた
大和煮缶	30コ	C	
スパゲティ	20袋	B	
〃ソース	5コ	B	
フルーツ缶	30コ	A	
ホットケーキミックス	5袋	D	
炊きこみご飯の素	30コ	B	
釜めしの素	30コ	B	
すし太郎	30コ	B	
お茶漬	50コ	D	
焼きそば	30コ	B	
焼きのり	10袋	B	味付
マッシュポテト	10コ	A	
マーボ豆腐の素	30コ	A	
梅ぼし	5袋	B	
さんま味付	20コ	C	
ゼリーの素	10コ	B	デザートによい
プリン	10コ	B	〃
ポップコーン	5コ	B	
するめ	5コ	A	不足
まぜりゃんせ	20コ	C	
コンデンスミルク	30コ	A	行動食としても使用
スキムミルク	10コ	D	
きな粉	10コ	B	
にぼし	5袋	C	主にみそ汁のだしに使用(BCのみ)
しょうゆ	3本	A	
味の素	5本	C	
かつおぶしパック	80パック	C	
あじ塩	10本	B	
マヨネーズ	5本	A	
サラダ油	3本	B	
ソース	3本	D	
中華味の素	5本	B	

品名	個数・重量	使用頻度	備考
フリーズドライ ねぎ	0.5kg	C	
〃 キャベツ	2 kg	A	
〃 人参	2 kg	A	
〃 玉ねぎ	2 kg	A	
〃 ほうれん草	0.5kg	C	
〃 牛肉	3 kg	A	
〃 豆腐	0.5kg	A	
〃 油揚げ	0.5kg	C	
〃 納豆	0.5kg	A	好評
〃 ミックスベジタブル	1 kg	C	
〃 たまご	0.5kg	A	
〃 しょうゆ	0.5kg	A	
コーヒースティック	3本	A	
ココアスティック	200本	A	砂糖といっしょに入っているので便利
紅茶 ティバック	50本	B	
緑茶 〃	30箱	A	
ウーロン茶 〃	10箱	A	
ほうじ茶 〃	10箱	B	
ポカリスエット	10箱	B	
わかめスープ	20袋	C	
カップスープ	100コ	B	
はちみつ	250コ	B	
クッキー	3本	C	量が多すぎた
ビスケット	6 kg	B	
クラッカー	6 kg	B	
ナッツ	4 kg	A	
せんべい	8 kg	B	
小魚&ナッツ	2 kg	C	
ベビースターラーメン	3 kg	C	
かわはぎ	3 kg	C	
あられ	1 kg	C	
ソーセージ	2 kg	C	
サラミ	4 kg	A	
チョコレート	2 kg	C	
アメ	12kg	A	
甘納豆	4 kg	D	
	1 kg	B	

品名	個数・重量	使用頻度	備考
バウムクーヘン	3 kg	B	
羊かん	2 kg	A	
干しぶどう	4 kg	B	
プジョム	2 kg	C	
米	90kg	C	量が多すぎた

※各品目の個数・重量はすべて伊東が把握していたため、概略とならざるを得なかったことを明記しておく。

② 現地購入食糧

品名	個数・数量	使用頻度	備考
砂糖	5 kg	D	
くだものびん詰	48コ	C	
じゃがいも	15kg	A	
玉ねぎ	15kg	A	
キャベツ	10kg	A	
玉子	5 kg	A	
小麦粉	5 kg	D	
ニワトリ	5羽	C	
酒 ワイン	10本	A	
ブランデー	5本	A	

3. 医療

堀井 昌子

(1) 準備

出発前の準備として、

(1) 横須賀共済病院及び神奈川県立がんセンターにおける健康診断

(2) 筑波大学運動生理学教室における低圧室訓練

が行われた。

(1)については心肺機能に特に問題はなく、最大酸素摂取量は 38.0—50.5 ml/min/kg (平均 43.6 ml/min/kg) であった。

(2)については、6000メートル相当高度までの低圧室における滞在(運動も含め)を週1回、計4回行ない、低圧状態を障害なく体験することが出来た。

医薬品は、医師の全期間参加が不可能なことから、個人用と共同用に分けて用意し、それぞれにリストを作成した。内服薬、外用薬とも小さいチャックつきビニール袋に入れ、袋に適応、用法を明示した紙を貼り付けた。

ガモウバッグについては、入手を試みたが購入するには高価に過ぎること、レンタルについては先約があるなどで結局不可能であった。従って酸素発生装置を購入携行した。

(2) 登山中の医療

《内科系》

高度障害: いわゆる急性高山病の症状で、頭痛、咳嗽、浮腫、息切れ、眠気などが4000メートル、6000メートル前後でみられたが、高度を下げることで、少量の利尿剤(フロセマ

イド、アセタゾールアミド)投与、あるいは時間経過により消失した。

肛門周囲膿瘍: 先発隊隊員で既往歴はない。7月22日臀部にシコリが出現、あぐらをかくと痛く、29日頃より大きくなり、発熱、自発痛を伴った。テトラサイクリン系統にてセフェム系抗生物質の内服を指示したが改善をみず、8月3日診察したところ末だ切開の適応でないため、セフェム系抗生剤と新キノロン系抗菌剤の併用に変え下熱傾向をみた。しかし8日再度発熱、9日自壊し大量の排膿あり、数日後に閉鎖した。

《外科系》

捻挫(足関節): クレバスへの転落によるもので、ハップ剤とテーピングによる治療を行った。

頭部挫創: 落馬によるもので、縫合は不要であった。

以上の他、風邪症状、胃腸症状、靴ずれなどに対しては個々に個人用の医薬品にて対応可能であった。

(3) まとめ

本登山隊は高所登山経験が少ないこと、年齢構成が19歳から55歳と幅広いことが特徴である。高度順応が比較的順調であったことは、無理をせずに高度を下げるという隊長の方針と、低圧室における訓練および富士登山一特に頂上でのステイによるところが大きいと思われた。

準備の面では、内服薬の用法について(二

種類以上の場合)言葉が足りないなど反省すべき点はあるが、個人用の医薬品パックを用意したことは有用であった。

(4) 医薬品リスト

① 共同用

品名	数量
消毒用イソジン綿球	2
滅菌割箸	5
滅菌綿棒(大中小)	各5本
滅菌ガーゼ	10枚
包帯	2
コネット(4サイズ)	
テーピング用テープ	
バンソウコウ 各種	
医療用酸素(90リットル)	9
酸素発生器	1
酸素用カスラ	1
血圧計	2
体温計	2
携帯用心電計、必要物品	1
アルコール綿(消毒用)	
ボカリスエット	
カローラメイト	

《個人用以外の薬品》

ケフラール(抗生剤)	100
ロメバクト(抗生剤)	120
ダイアモックス	50
ラシックス	30
CM-P軟膏	2
ベノキシル点眼薬	1
ナウゼリン座薬	20
シナール(ビタミンC)	200

3隊員の遭難は別として、医師不在の間に大きいトラブルがなかったことに感謝したい。

② 個人用

薬品名	効能	量
ボボンS, ビタミン	総合ビタミン	40
トリドセラン	総合ビタミン	40
ユベラニコチネート	凍傷予防	120
セデスG	(鎮痛)	10
ボンタール	(鎮痛)	8
セスデン	(鎮痛)	10
インテバン坐薬	(下熱)	3
フェスタール	(消化剤)	10
三共胃腸薬	(消化剤)	15
ザンタック	胃潰瘍予防	20
ゲファニール	胃潰瘍予防	20
フェロベリン	下痢止め	12
トクレス	咳止め	10
P.L.顆粒	風邪	4
ダンリッチ	風邪	5
ハルシオンアモバン	入眠剤	4
ミノマイシン	抗生剤	5
トローチ		10
ブルセニド	緩下剤	8
イソジン	消毒液	
テラコートリル軟膏	皮膚症状	1
点眼薬		1
日焼け止め		1
リップスティック		1
綿棒		5
カット絆		7

4. 輸 送

田村 康一

(1) 日本国内

隊荷の発送は、燃料の北京到着が先発隊入国（7月14日）の3ヶ月前まで、その他の物資は2カ月前までに行うということであった。しかし、3月15日に田村と伊東が北京に出発した時点で、集荷・梱包作業はほとんど手つかずの状態だったので、CMAと交渉の末、燃料の北京到着を半月間延期してもらった。

集荷・梱包は田村らが帰国した3月22日から山岳部室にて集中的におこなった。特に吉見と伊東の二人は、食糧や生活用具を求めて、朝から晩まで馬車馬のように働いた。

梱包に使ったダンボールは日本通運に頼んであつらえてもらった特別製で、1個が1,700円もする代物であった。パッキングの際には赤のスプレーで隊名（YCU・天山）を、黒のマジックでカートンナンバーをマーキングし、防水用のスプレーニスを全面にふきつけた。また、カートン別に個人装備・共同装備・高所食・キャラバン食を大まかにわけてつめこみ、パッキングリストを作成した後、PPバンドをかけて梱包作業を終了した。

上記の規格梱包以外に、ポール・アンテナ・背負子・BC用テント・予備ダンボール・はしごを別梱包した。私たちの隊荷の内訳は以下の通りである。

総重量約1.3トン、規格梱包37箱、特殊梱包10、燃料（ガスボンベは業者が梱包代行）。燃料以外の荷物は4月3日、日通のトラッ

クに引き渡し、4月10日横浜発の船で送りだされた（北京まで10～15日間）。また、燃料は4月7日に新橋の日通航空課にもちこみ、4月16日の飛行機で北京へ発送された。

なお、通関手続きは日通が代行した。

《通関に必要な書類》

- ・隊長パスポート（コピー可）
- ・航空券予約証明書（コピー可）
- ・税関長願書（あればなお可）
- ・登山計画書（含隊員リスト）
- ・パッキングリスト（総重量、金額明記）
（英文）

(2) 中国内

中国における通関は、CMAが代行してくれることになっている。しかし、私たちのパッキングリストの発送が遅れたため、CMAは通関手続きをおこなえず、催促の電話が田村宅にコレクトコールでかかってきた。

荷物は北京からウルムチまで列車で運ばれることになっていたが、燃料だけはトラックで輸送することになった。私たちの燃料の内訳はEPIボンベ小が200個、大が10個、カセットコンロボンベが75個というものだったが、数量にかかわらず、トラック1台分の輸送費として約45万円支払わなければならなかった。

燃料を含む荷物は、7月16日ウルムチで先発隊と合流し、トラックでアクスまで運ばれた。アクスからはさらに古めかしいトラック

につみかえられて、2100mのキャラバン開始地点まで輸送されることになった。ジープで先行した私たちは、悪路のため途中何度も立往生したため、トラックではとうてい荷物は運べないだろうと観念していたところ、けたたましいエンジン音と共にトラックが到着したので、隊長の西堀は「中国人民のパワーをみたか！」と歓喜した。

2100m地点からは、荷物を15頭の馬につき、3900mのベースキャンプまで2回（先発隊・後発隊）にわけて運んだ。カートンの1個の重さが20kg～35kgとまちまちだったため、左右のバランスをくずして川に転落する馬や、途中でつぶれてしまった馬もいたが、すべての荷物を無事BCまで運び上げることができた。なお、馬方は馬3頭につき1人だったので、モレーン地帯などの難所では隊員も馬を引いた。

BC撤収後は、16頭の馬で残った荷をおろした。アクスで再梱包とパッキングリストの作成をおこない、後の輸送は新疆登山協会とCMAに任せて私たちはひと足先に帰国した。

(3) 輸送費用

① 船 便

項 目	数 量	費 用
カートン代	1,700円×50個	85,000円
カートン配達料		20,000円
貨物引取り料		40,000円
通 関 料		5,600円
ラッシング料 ^{注1)}		25,000円
ドレーシ料 ^{注2)}		25,000円
オーシャンフレイト （横浜→天津）		160,000円
インランドチャージ ^{注3)}		70,000円
日通取扱料		50,000円
消 費 税		4,350円
合 計		484,950円

注 1) コンテナ内にカートンを収納するための用具・作業代

2) 倉庫から船積までの費用

3) 天津→北京間の費用

② 航空便

エアーフレイト	750円×256kg	192,000円
諸 掛 金（税込み）		57,434円
計		249,434円

以上日通支払分のみ。他の梱包資材費、中国からの返送費用除く。

5. 国内でのトレーニング——永易量行・吉見敦司

(1) 国内訓練山行

登山隊で月1回程度まとまった訓練山行をすることになり、経験の少ない1年生が2人いたので、基本的なザイルの扱い方からはじめる。まず岩登りトレーニングから始まった。

◎1989年8月27日、9月9日 越沢バットレス
西堀・吉田・田村・吉見

◎9月15日～17日 谷川岳
吉田・田村・吉見・西堀・井上

◎10月7日～10日 穂高岳
西堀・田村・永易・吉見・伊東（北穂東稜）、井上・吉田（屏風岩）

天候が悪くなく目標としていた、瀧谷、奥又白へは行けなかった。

◎11月5日 谷川岳
西堀・吉見・伊東（一ノ倉沢南稜）、井上・田村・永易（一ノ倉沢コップ状岩壁緑ルート）

井上パーティは岩の状態悪く、取付で敗退。

◎11月23日～26日 鹿島槍ヶ岳
西堀・井上・吉田・永易・田村・吉見・伊東（天狗尾張）

天狗の頭で撤退。1年生の2人にとっては初めての雪山であったが、ペースが非常に遅く、今後、この2人をどうするかが問題となり論議。

◎12月30日～1月3日 穂高岳北尾根
西堀・井上・吉田・田村・吉見・伊東
天候悪く、八峰で撤退

◎1990年1月13日～15日 甲斐駒ヶ岳
西堀・井上・伊東（黄蓮谷左俣）
吉田・吉見（黄蓮谷右俣）

◎3月11日 富士山
西堀・井上・田村・永易・伊東・高松

◎4月28日～5月3日 剣岳八ツ峰
西堀・井上・永易・吉見・伊東
積雪期の八ツ峰縦走はなかなかの手ごたえでトムールへ向けて、技術的な確信が生まれた。

◎6月30日～7月1日 富士山
西堀・井上・田村・吉見・伊東・高松
高度順化を兼ねて頂上でビバークする。特に高度障害が出たものはいなかった。

なお、この他にも穂高・後立山・八ヶ岳などで、少人数での山行を行っている。

(2) 低圧室訓練

5月中旬より約2カ月間、7名の登攀隊員は、予想される高度障害に対処するため、筑波大学の浅野勝己先生にお願いして同学内の低圧実験室で低圧訓練を行うことになった。

低圧室は厚い鉄板で囲まれた15畳敷ほどの部屋で、その部屋の気圧を高度6000m相当にまで下げ、そこで自転車をこぐ等の運動をして心肺機能の強化を狙ったものである。

訓練はほとんど毎週行われたが、全隊員がそろって参加するのは難しかった。それでも常に5名程は筑波へ行ってはゼーハーし、頭痛に悩まされることになっていた。帰路での合言葉は「中国で差がつくのだ、今に見てい

ろ。」

しかし何回か通ううちに自転車をこぐのも当初とくらべると楽になり、頭痛を訴える者もほとんどなく、皆若干眠くなる程度であった。

私達の他にも今夏遠征予定のパーティが訓

6. 渉外——田村 康一

(1) CMAとの交渉

CMAとの交渉は、5年前の長江源流計画以来、探査会の丸山が窓口となっていた。今回も登山許可取得後は、丸山が文書のやりとりを通じて交渉を続けていたが、今年2月の時点で丸山が計画に不参加となったため、以後田村がCMAとの交渉の仕事を引きついだ。

3月15日から22日にかけて、田村と伊東は北京で議定書の調印と計画の細部にわたる打ち合わせをおこなった。その際、問題となったのは、燃料の北京→ウルムチ間の輸送（輸送の頁参照）と、無線の使用についてである。

燃料は北京→ウルムチ間を車で運ぶのに、約45万円必要である。これは数量に関係ない、車1台分の費用ということなので、なんとか安くしてもらえるように頼みこんだ。CMAからは同時期にウルムチへ燃料を運ぶ登山隊があれば、一緒に輸送し料金は折半にしようとして提案されたが、結局条件のあう登山隊がなく、規定通りの料金を支払った。

無線は、通信担当の磯村が提案した「ベースキャンプと日本との交信」が問題となった。過去に中国では、日中合同登山隊の際に現地から日本へ電波をとばしたことがあるそ

練に参加しており、互いに激励があったものだ。浅野先生を始めスタッフの皆さんには、土曜日だというのに嫌な顔もせずに協力していただいて、隊員一同非常に感謝している。又浅野先生からは、スタッフ全員がサインしてくれた日の丸をいただいた。

うだが、中国無線電運動協会等と交渉した結果、「単独大学のパーティに許可を与えるのは難しい」との返答を得たため、この案はとり下げた。登山活動に使うトランシーバーの出力・周波数の通知は、帰国後おこなった。

トムールのルート、気象等に関する情報については、1977年の中国隊登頂者である曹氏（CMA副主席）から直接話をうかがうことができた。その際に、中国隊の報告書と曹氏の著書の提供をうけた。また帰国後、「登山活動以外に使用しない」との約束で、トムール周辺の地形図を送ってもらった。

(2) 日本国内

装備はIBS石井スポーツから一括購入した。その際、割引販売して頂いたのに加え、BC用大型テントの寄贈をうけた。また、隊長の友人である大西氏を通じて、登山隊用の羽毛服を寄贈してもらった。

食糧は伊東がホーリンと交渉して、肉、野菜などのフリーズドライ食品を格安の値段で購入してきた。また、市大空手部OBの経営するセイエンタプライズから、マウンテンハウス等の高所食を提供された。

渡航に関しては、華聯旅行社とアトラストレックにお世話になった。

IV 会計報告

高松 康夫

1. 本隊会計

(1) 収入の部

(単位1000円, 1000円未満四捨五入)

項 目	金 額	備 考
隊員個人負担金	11,200	社会人 1,000, 学生 300
探査会・探検部OB寄付金	510	
山岳部OB寄付金	1,120	
その他寄付金	5,103	一般OB, 教職員, その他
合 計	17,933	

(2) 支出の部

項 目	金 額	備 考
〈国内支出〉		
趣意書作成費	169	
議定書調印費	312	東京←→北京(2人)
登山装備費	2,786	
食糧費	538	
生活用品・記録用品費	573	
梱包輸送費(東京→横浜→北京)	734	一般荷物(船便), ガスボンベ(航空便)
〃(北京→横浜)	250(予定)	一般荷物(船便)
渡航費(東京←→北京)	1,900	
海外旅行障害保険料	158	
訓練費	273	
雑費	1,242	事務費, 通信費, 壮行会費, 写真費, 医薬品等
報告書作成・発送費	1,000(予定)	
計	9,935	

〈中国支出〉		(1元≒33円 1\$≒147.1円)
北京CMA支払い	6,855	北京CMA, ウルムチCMA, アクスCMAの経費の合計 46,601.11\$
アクスCMA現地支払い	23	
現地物資購入・雑費	131	食糧, アルコール類, 返礼用品, その他
環境保護料	293	1万元(1元≒29.3円)
Tシャツ作成費	118	お土産用
計	7,420	
合 計	17,355	残額 578

2. 救援会計

(1) 収入の部

(単位 1,000円, 1,000円未満四捨五入)

項 目	金 額	備 考
簡易保険金(郵政省)	44,000	20,000×2人, 4,000×1人

(2) 支出の部

項 目	金 額	備 考
国内関係支出	5,049	追悼式, 交通・宿泊, 通信・郵送, 追悼文集, その他
中国関係支出	3,150	中国渡航・滞在, アクス・ウルムチCMA支払い
計	8,199	残額 35,801

協力者名簿

愛甲 道雄	梶木 寛之	佐藤 正	竹之下勝民	深谷 泰弘
相原 正雄	梶 重男	佐藤 宗弥	竹端 節次	福田 博行
阿川 良次	片尾 周三	佐藤 嘉倫	田沢英五郎	藤本 謙治
明田悠一郎	加藤 晴康	佐藤 隆三	立木 大造	藤本 弘樹
浅井 千策	加藤 信	里吉 政子	種子田幸太郎	藤山 嘉夫
浅野 勝己	紙村 徹	篠原 信好	田部井淳子	保科 久
朝比奈大作	唐沢 誠	柴田 悟一	玉木 徹志	堀内 真
阿部 将夫	河崎 典夫	島田 伸之	塚本 義久	本多 秀雄
井沢 雪雄	川尻 哲夫	島村 昌孝	土屋 恒篤	松井 重利
石井 安憲	神田 文人	清水 保尚	寺島 和光	松井 道昭
石黒吉太郎	木内 政雄	正田 要一	寺田 勝彦	松田 喬
石綿 千明	木村 努	新堀 豊彦	常世田泰正	松本 富雄
磯野 剛太	国吉 一夫	杉山 心	内藤 純郎	丸山 宏
市川 孝史	熊沢 憲	鈴木 秀明	中川 淑郎	三浦 綾
伊東 和枝	栗生 修臣	鈴木 広視	長崎 和夫	三浦 研
伊藤 喬	児島 和久	鈴木 伸治	中島 満	三崎 浩英
伊藤 宏	小嶋 健太	鈴木 元章	中村 伝	水尾 寛己
伊藤 隆二	児玉 亮	鈴木 喜平	名張 達光	水谷 敏郎
伊奈 正	小浜喜久二	鷺見 一夫	西川喜美子	水野 栄一
稲村 修治	小林 義雄	千賀 重義	西丸 興一	宮川 弘
宇南山英夫	細郷 道一	相馬 早苗	丹羽 安夫	宮崎 忠克
梅山 善之	斎藤 修三	外林 大作	野並 豊	宮崎 博文
江口 英輔	斎藤 隆	園田 純子	野々山隆幸	本宮 一男
遠藤 直好	斎藤 利夫	平 智之	野村 満雄	森下 一男
大井 二郎	酒井 隆志	高井 修道	長谷川静江	森下 純
大島 穂	酒井 徹	高岡 幸彦	馬場 彰	森 英雄
大西 登	堺沢 亘	高杉 暹	原 弘之	矢吹 晋
大山 浩朗	相良 美成	高橋 寛人	平井 幹二	矢部 順子
越智 健	佐々木慶正	高橋 雅子	平井 進	山口 幸雄
影山摩子弥	貞木十四雄	高秀 秀信	平塚 久裕	吉野 孝子
河西 孝紀	佐藤 修史	高松 宏明	肥留間正明	渡辺不二子

I B S石井スポーツ

朝日新聞社横浜支局

アトラストレック

アポロスポーツ

(有) アマノスタジオ

エーザイ (株)

大塚製菓 (株)

(株) オンワード樫山

外務省領事部邦人保護課

神奈川県大学山岳連盟

神奈川新聞社

カネボウ薬品 (株)

(株) かぶらぎ事務所

(株) カメラのきむら

華聯旅行社

キャノン (株)

キャノン労働組合

(株) 共栄装飾

空港施設 (株)

(株) 五條建設

(株) コダックイマジカ横浜営業所

三共 (株)

塩野義製菓 (株)

(株) 白い小屋

住友製菓 (株)

(株) セイエンタプライズ

高松臨港倉庫 (株)

武田薬品工業 (株)

田辺製菓 (株)

中外製菓 (株)

中華人民共和国駐日本国大使館

筑波大学体育科学系運動生理学研究室

台糖ファイザー (株)

成田空港施設 (株)

日本アップジョン (株)

日本国駐中華人民共和国大使館

(株) はなよし

フジテレビジョン

ヘキストジャパン (株)

(株) ホーリン

(株) 松田平田坂本設計事務所

(株) 武蔵屋

明治製菓 (株)

山森税務会計事務所

横須賀共済病院

横浜国立大学山岳部

横浜国立大学山の会

横浜市立大学係長会

横浜市立大学局部課長会

横浜市立大学事務局

横浜市立大学文理学部地理学教室学生一同

横浜市立大学文理学部人間社会過程クラス一

同

横浜市立大学60周年記念事業実行委員会

横浜中エメラルドライオンズクラブ

横浜エメラルドライオネスクラブ

旅券事務所 (東京・横浜)

(株) ル・モンターニュ

YCMコーポレーション

(敬称略, 順不同)

後援

横浜市

横浜市立大学

横浜市立大学後援会

社団法人進交会

支援

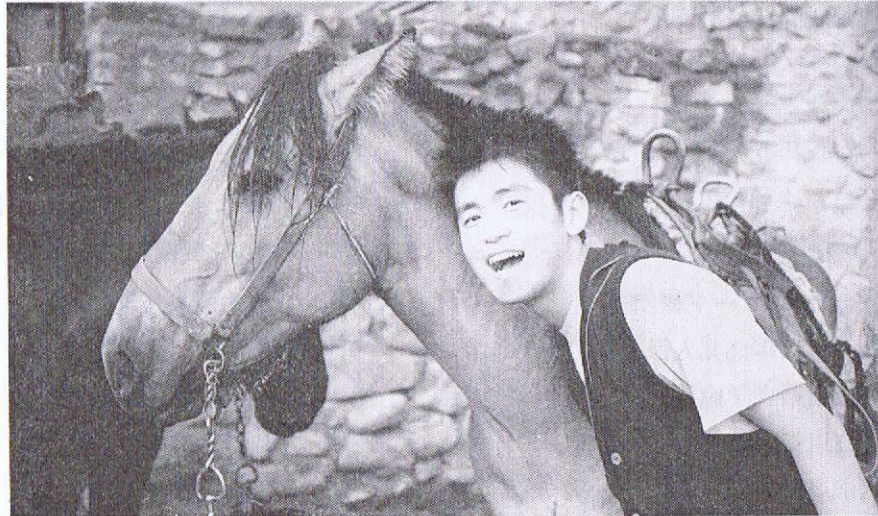
中国登山協会

新疆登山協会

アクス登山協会

トムールに逝った3隊員の略歴

キャラバン中の伊東昌彦隊員(右)。訓練合宿で鹿島槍登攀中の西堀秀二隊長(下写真の上)と井上誠登攀リーダー(下写真の下)



西堀 秀二 登山隊長

昭和24年11月14日生
 昭和43年3月 東京都立南高等学校卒業
 昭和44年4月 横浜市立大学文学部文
 科入学
 昭和48年3月 横浜市立大学文学部文
 科国際関係課程卒業
 山岳部OB JCC所属
 昭和49年9月 空港施設株式会社入社

井上 誠 登攀リーダー

昭和37年1月13日生
 昭和55年3月 神奈川県立追浜高等学校
 卒業
 昭和56年4月 横浜市立大学文学部理
 科入学
 昭和60年3月 横浜市立大学文学部理
 科化学課程卒業
 昭和60年4月 キヤノン株式会社入社
 玉川事業所 化成第二開
 発センター 山岳部OB

伊東 昌彦 登山隊員

昭和44年6月24日生
 昭和63年3月 佐賀県立佐賀西高等学校
 卒業
 平成元年4月 横浜市立大学文学部文
 科人間社会課程入学
 平成2年4月 地理学科専攻
 探検部 山岳部

編集後記 (あとがきにかえて)

◎…本報告書の制作にとりかかったのは実質9月末からであるから、完成までに半年以上費してしまった。事故後の対策と併行しての執筆にとりかかるまでには、事実経過確認と、そして何よりも隊員及び計画を推進してきた関係者が共通の事実認識をもてるまで何回もの討議を経なければならなかった。さらに、校正段階においても追加修正などが行われていたため予定よりも遅れてしまい、1990年12月中の完成をめざしたが、やむを得ず、年を越してしまった。3人のご遺族そしてご協力いただいた方々にひとことおわび申し上げます。

◎…議論となったのは、3名の犠牲を出した“事故”のとらえ方であった。事故を不可抗力として単純化してしまうのは簡単なことだが、果たしてそれだけでいいのだろうかという思いが常にあった。そして、3人のご家族、ご協力をいただいた方々に一刻も早く正式な報告をしなければならないという責任もあった。さらに、事故後の対応についての整理と、どこまでこの報告書に記録するかについても、登攀隊員たち及び救援隊それぞれの立場からの行動が基になっているだけに調整に時間がかかってしまった。

◎…こうした議論のなかから、本報告書では、“事故”を一連の活動のなかにおき、事実関係をできるだけ詳細に記すことに主眼をおくことにした。従って、事故前後の判断や、対応に関する反省にはふれることはできなかった。編集会議では、報告書の一章をさいて座談会を含める予定で、そのための会合も実施したが、すべての議論はテープに残すことにとどめた。事実報告を出すことによって読者のご批判をあおぎたいと思う。

◎…さらに西堀、井上、伊東3氏をしのぶ追悼文集の企画が出ていることにもふれておきたい。ご遺族の意向を大切にしながら、山を愛し、冒険に情熱を燃やした故人の足跡を残しておきたいという声は、追悼会議の席上何人もの方々から聞いた。そして、3氏への思い出もつづけてみたいという声も出てくるであろう。どういふ方法で発行するかは期を熟するのを待って自ずと決まってい

よう。

◎…本報告書の編集執筆は、横浜市立大学天山路の会森下市朗事務局長を中心として、登山隊全員、平井幹二留守本部担当、山森希典財務担当あたり、山岳部OB中島満が全体のとりまとめを行った。

——中島記

◎…立案から日本での準備、訓練と、この計画にかかわった人々に抜かりはなかった筈です。また探査会、山岳部・探検部及び各OB会、市大及び後援会・進交会、横浜市、その他多くの人々に支えられた計画でした。しかし、自然の大きな力は、我々から容赦なく3人の仲間を奪い去り、最愛の夫、最愛の父、最愛の子供、最愛の兄・弟を奪いました。

◎…8月15日の21時を境に、僕の中で何かが崩れてしまった。……自分が山に登っている時も心の片隅では意識しながらも決して実感する事なかった——それゆえ、僕にも、おそらく山に登る全ての者に希望を持たせ続けている遭難への楽観が、跡片なく崩れてゆきました。本当に残念です。しかし、長い年月を経て血の畔の中で愛を育てた御家族にとっては、何ものでも埋めようのない無念である筈です。これは何と言っても、僕には言葉で表せないのでしょう。

◎…幸にして、この計画に携わる人々は本当に多才でした。事故後も、日本での対応、現地でのこと、追悼式から報告書の作成まで、惜しみ無い努力があった事を感じるのは僕だけでないと思います。しかし、これらの行為をもってしても、御家族の無念の思いにとうてい換えられないことを心に銘記するべきでしょう。また僕達にとって、この遭難が生涯忘れられない悔いとなって心に染みたくとも、やはり同じことでしょう。

でも、少なくとも僕達が3人の友であった事の証となるのであるなら、僕達はこの悔いをいつまでも持ち続けましょう。——平井記

(天山山脈トムール峰) 登山報告

'90・天山山脈トムール峰登山隊報告書

発行日 1991年5月15日

発行者 横浜市立大学天山踏査の会



